

「地域と協働する大学づくりシンポジウム in 鹿児島大学」

# 鹿児島大学生涯学習憲章への道 —大学と地域をつなぐ架け橋—

Ⅱ部 「鹿児島大学生涯学習憲章策定」

起草委員会の記録

平成 25 年 9 月

国立大学法人 鹿児島大学

## 鹿児島大学生涯学習憲章

鹿児島大学は、大学憲章の理念に沿って、自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざしており、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。

鹿児島大学は、全構成員が生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 地域の発展の基礎となる多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。
4. 鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、進取の精神を養い、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 柔軟で闊達な組織づくりに努め、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

※「進取の精神」とは、自ら困難に果敢に立ち向かう態度です。



## はじめに

大学の歴史的使命が問われる時代になった。人生における学習は、単に幼年期から青年期だけのものではない。学習を生涯にわたって継続することは、よりよく、よりやさしく、よりおだやかに生きていくための必要条件となったことを意味する。

鹿児島大学は全国の国立大学に先駆けて生涯学習憲章を制定した。鹿児島大学に生涯学習教育研究センターができて 11 年が経ち、これまでの経験と実績を検証する必要に迫られたこともある。しかしそれ以上に、鹿児島大学において、地域貢献の精神を明確に宣言する必要があると考えたからである。

大学の生涯学習の役割は、まず第 1 には、職業教育という意味で言う技術革新が非常に激しい中で、新しい知識を常に身につけなければならないという要請に応えることである。第 2 は、より高い自己実現のために、市民としての力量をつけ文化性を身につけるための教養教育の機会を提供することである。

今日、大学の使命は教育研究とともに地域への貢献がとりわけ重要になっている。歴史のなかで、世界の窓口となって文化を形成してきた鹿児島の地において、地域と切り結びながら鹿児島大学としての学問形成を図っていくことが求められている。

平成 25 年 9 月 19 日

岩元 泉 生涯学習教育研究センター長

## 目次

鹿児島大学生涯学習憲章...	1
はじめに.....	3
第Ⅱ部 「鹿児島大学生涯学習憲章」起草委員会の記録	
1. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の経緯.....	6
2. 起草委員会の開催状況.....	8
3. 第1回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	13
4. 第2回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	31
5. 第3回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	51
6. 6月1日ワークショップ前の臨時起草委員会.....	79
7. 第4回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	89
8. 第5回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	105
9. 第6回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	113
10. 第7回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会.....	123
11. パブリックコメント.....	129
あとがき.....	135
＜別冊＞	
第Ⅰ部 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの記録	
1. 全体会.....	7
2. 分科会 1.....	19
講師問題提起.....	21
事例報告 1.....	28
事例報告 2.....	34
事例報告 3.....	38
各班の発表.....	42
講評.....	60

3. 分科会 2 .....	63
講師問題提起.....	65
事例報告 1 .....	74
事例報告 2 .....	79
事例報告 3 .....	82
各班の発表.....	84
講評.....	106
4. 総括.....	109
分科会 1 総括.....	111
分科会 2 総括.....	113
分科会の主張（要点メモ） .....	115
アンケート集計結果.....	116

#### 資料

1. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ名簿.....	121
2. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップアンケート結果（全回答） .....	125
3. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の経緯.....	132
4. 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会の概要	
起草委員会の実施状況.....	134
鹿児島大学生涯学習憲章第 1 次案（学内意見照会） .....	136
鹿児島大学生涯学習憲章第 2 次案（パブリックコメント） .....	139
5. 刊行物・新聞記事.....	142
6. 公開シンポジウム「地域とともに描く、生涯学習の近未来像」 .....	146
7. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ運営スタッフ.....	148
あとがき.....	149

## 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の経緯

時期	内容
平成 24 年度	<b>ステップ1（事前準備）</b>
9 月	■生涯学習憲章/宣言に向けた生涯学習教育研究センター内の準備を開始
9/19(水)	担当理事へ鹿大生涯学習憲章の策定構想に関する説明
10/18(木)-19(金)	第 34 回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の出席（熊本） 鹿大における文部科学省熟議の実施について担当官に打診
11/9(金)	担当理事へ鹿大生涯学習憲章の策定構想に関する説明
11/20(火)	平成 24 年度第 2 回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催 理念の共有：鹿大生涯学習憲章/宣言（仮称）の策定計画について提案/協議
2 月～3 月	■鹿大執行部、部局長等へのヒアリング実施（研究、学生教育、地域貢献）
2/8(金)	文科省生涯学習政策局生涯学習推進課の担当官と打合せ（鹿児島） 次年度に文部科学省ポスト熟議を鹿大で実施することで確認
平成 25 年度	<b>ステップ2（始動期）</b>
4 月	■新執行部体制の下で生涯学習憲章策定に向けて活動を本格化
4/9(火)	平成 25 年度第 1 回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催 鹿大生涯学習憲章策定方針やスケジュール等について協議/条件付承認
4/11(木)	担当理事へ鹿大生涯学習憲章策定プロセスの説明/協力要請
4/16(火)	地域貢献推進室会議にて鹿大生涯学習憲章策定構想と準備状況を説明
4/24(水)	平成 25 年第 2 回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催（メール会議） 生涯学習憲章策定ワークショップの企画に関する修正案を承認
4 月～5 月	■学共施設、研究科長等へのヒアリングと協力要請の実施
5 月	□生涯学習憲章起草委員会の立ち上げ、委員会活動を開始（全て公開）
5 月	■部局長、各教職員、学外者等の訪問（憲章策定ワークショップの参加協力要請）
5/8(水)	□ <b>第 1 回起草委員会</b> ：趣旨説明、方針や骨子に関する意見交換/確認
5/9(木)	文科省生涯学習政策局生涯学習推進課の担当官と打合せ（東京） 地域と協働する大学づくりシボジウム in 鹿児島大学として実施を確認
5/15(水)	□ <b>第 2 回起草委員会</b> ：学外講師を招いて憲章の考え方を協議/整理
5/16(木)	上杉孝實京都大学名誉教授、学長、理事を表敬訪問
5/20(月)	□ <b>第 3 回起草委員会</b> ：生涯学習憲章の大項目の確認/素案骨子の確定
5/23(木)-24(金)	「鹿大生涯学習憲章」策定ワークショップ・ファシリテーター会合の開催（事前）
	<b>ステップ3（学内世論形成期）</b>
6/1(土)	「鹿大生涯学習憲章」策定ワークショップを実施（文科省共催） 地域と協働する大学づくりシボジウム in 鹿児島大学

6/6(木)	「①憲章素案の検討」+「②実践につなげる提言」を成果へ 「鹿大生涯学習憲章」策定ワークショップ・ファシリテーター会合の開催（事後） ファシリテーターと起草委員会の合同開催、その後起草委員会
6/7(金)	<b>□第4回起草委員会</b> ：ワークショップの論点を確認、憲章の第1次案を作成
6/11(火)	生涯学習教育研究センター運営委員へ第1次案の報告、意見照会（～10 まで）
6/12(水)	地域貢献推進室会議にて第1次案を提示/協議、意見の集約（センター長陪席）
6/18(火)	学長と担当理事の懇談会（理事懇）にて第1次案の報告
6/24(月)	<b>□第5回起草委員会</b> ：地域貢献推進室会議の意見を受け第1次最終案を作成
6/25(火)	・執行部会議にて第1次案の報告/確認（センター長陪席）
6/25(火)-7/5(金)	・役員会議にて第1次案の報告/確認（センター長陪席） <b>■鹿児島大学生涯学習憲章第1次案の学内意見収集を開始～終了</b>
	<b>ステップ4（最終案確定期）</b>
7/8(月)	<b>□第6回起草委員会</b> ：学内意見収集の結果を受け第2次案を作成
7/9(火)	地域貢献推進室会議にて第2次案を提示/協議、意見の集約（センター長陪席）
7/10(水)	学長と担当理事の懇談会（理事懇）にて第2次案の報告
7/11(木)	平成25年度第3回生涯学習教育研究センター運営委員会の開催 生涯学習憲章素案に関する学内意見収集結果の反映案（第2次案）を協議
7/12(金)	・執行部会議にて第2次案の報告/協議（センター長陪席）
7/25(木)	・臨時教育研究評議会にて生涯学習憲章2次案について報告（センター長陪席） ・役員等会議において第2次案の報告/協議（センター長陪席）
7/26(金)	<b>□第7回起草委員会</b> ：パブリックコメントに出す第3次案と解説文を作成 以上をもって起草委員会は解散
	<b>ステップ5（学内承認期）</b>
7/29(月)-8/16(金)	<b>■鹿児島大学生涯学習憲章第3次案のパブリックコメントを開始～終了</b>
8/19(金)	地域貢献推進室会議にてパブコメの結果を協議、第4次案の作成（センター長陪席）
8/21(水)	学長と担当理事の懇談会（理事懇）にて第4次案の報告、最終案の確定
9/2(月)	・執行部会議にて最終案の報告/協議
9/3(火)	・役員等会議にて最終案の報告/協議
9/12(木)	・大学運営会議にて最終案の報告/協議（センター長陪席）
9/19(木)	・教育研究評議会にて最終案の報告/決定（センター長陪席） ・臨時役員会議にて鹿大生涯学習憲章の決定
9/24(火)～25(水)	第35回全国生涯学習系センター研究協議会・研究フォーラムの開催 24日午後：公開シンポジウム「地域とともに描く、生涯学習の近未来像 - 大学生涯学習の過去、現在、未来 -」

鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会の開催状況

	日程	時間	起草委員出席者(順不同)	出席者(順不同)	内容
第1回	5月8日	水 16時～18時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 各起草委員による自己紹介 3. 憲章策定の経過報告 4. 起草委員会の活動方針について 5. なぜ「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定するのか— 学内の動向と文教政策を踏まえて—(小栗准教授) 6. 第1回素案検討会
第2回	5月15日	水 16時～18時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)、築瀬教授(医学部)	油原部長(研究国際部)、牧田准教授(農学部)、久保田准教授(教育学部)、農中講師(教育学部)、桑原司教授(法文学部)	1. 挨拶(岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 第1回鹿児島大学生涯学習起草委員会での討議の確認:第2回検討会(論点メモ) (小栗准教授) 3. 講話「大学生涯学習の到達点とこれから」上杉孝實(京都大学名誉教授) 4. 討論会
第3回	5月20日	月 16時～18時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)	油原部長(研究国際部)、牧田准教授(農学部)、金子准教授(教育学部)、安楽教授(水産学部)	1. 挨拶(岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 第1回検討会・論点メモ、第2回検討会・論点メモの確認 3. 第3回検討会:起草(案)の前文・定義・方針に関する検討、並びにワークショップに提示する内容の確認 ★憲章案ver.1の提示
臨時委員会メール会合	5月21(火)日～28日(火)		岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)		第3回鹿児島大学生涯学習起草委員会の検討会結果を踏まえて、5月23日(木)と5月24日(金)に開催するフアシリテーション事前会合に提示する憲章案(憲章骨子)の確定、並びに、6月1日のワークショップに提示する骨子案の確定 ★憲章案ver.2～4作成
第4回 ※6月1日のWSフアシリテーションとの合同会議	6月6日	木 13時～16時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部 附属教育実践総合センター)	伊藤准教授(教育センター高等教育研究開発部)、牟田氏(モノづくり工房“響”)、志賀准教授(志学館大学 法学部)、西尾教授(大学院理工学研究科)、大迫氏(Coaching STEP代表・岳の学びや代表)、桑原教授(法学部)、佐久間教授(水産学部)	1. 挨拶 (生涯学習教育研究センター長) 2. 「鹿児島大学生涯学習憲章(素案)」の検討と確定(小栗准教授) 3. 今後のスケジュール ★憲章案ver.5の提示、憲章案ver.6(第1次案)の作成

第5回	6月18日	火	13時～15時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部附属教育実践総合センター)、築瀬教授(医学部)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 報告 (1)地域貢献室会議における「鹿児島大学生涯学習憲章(素案)」に対する意見について (2)今後のスケジュール 3. 修正作業・起草委員会の活動方針について・修正意見に対する起草委員会のスタンス・意見の記録方法・整理作業について 4. 第1次案の修正作業について ★憲草案ver.7の作成
第6回	7月8日	月	15時～16時30分	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)、前田准教授(教育学部附属教育実践総合センター)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 報告 (1)「鹿児島大学生涯学習憲章(第一次案)」への意見照会結果について (2)今後のスケジュール:第3次素案の作成で解散 (3)欠席委員の意見について 3. 第2次案の作成について ★憲草案ver.8の作成
第7回	7月26日	金	9時～10時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、木村教授(水産学部兼社会貢献担当学長補佐)、前田准教授(教育学部附属教育実践総合センター)、築瀬教授(医学部)		1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 報告 (1)スケジュール変更と今後の予定 (2)運営委員会における意見 3. 第3次案の作成と解説文(パブコメ用)について 4. パブコメについて ・パブコメの目的・範囲・方法等について 5. 「鹿児島大学生涯学習憲章」解説文の作成について ★憲草案ver.9とver.10の作成

	日程	時間	憲章事務局出席者(順不同)	ファシリテーター出席者(順不同)	内容
第1回 (分科会1)	5月23日 木	15時～17時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)	李准教授(農学部)、伊藤准教授(教育センター 高等教育研究開発部)、牟田氏(モノづくり工房“響”)、志賀准教授(志学館大学 法学部)、西尾教授(大学院理工学研究科)	1. 挨拶 (岩元生涯学習教育研究センター長) 2. 自己紹介 3. 「鹿児島大学生涯学習憲章」のこれまでの経緯 4. 起草委員会の経緯について 5. 鹿児島大学生涯学習憲章(素案)について 6. 6月1日ワークショップについて (1)ワークショップの概要 (2)当日の参加者について (3)ファシリテーターにお願いしたいこと
第2回 (分科会2)	5月24日 金	10時～12時	岩元教授(農学部兼生涯学習教育研究センター)、小栗准教授(生涯学習教育研究センター)、酒井講師(生涯学習教育研究センター)	寺岡教授(農学部)、大迫氏(Coaching STEP代表・岳の学びや代表)、桑原教授(法文学部)、佐久間教授(水産学部)、福岡准教授(教育学部)	



## 第 1 回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



## 第1回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：5月8日（水） 16：00～18：00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：別紙

■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長
2. 自己紹介
3. 「鹿児島大学生涯学習憲章」のこれまでの経緯 …資料1、資料2
4. 起草委員会の活動方針について …資料3
5. なぜ「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定するのか
  - ①学内の動向 …資料4、資料5
  - ②文教政策（主に生涯学習政策・高等教育政策）…資料6、資料7
6. 第1回素案検討会

■配布資料（一部）

（1）学内データ関係

資料4：学内ヒアリング報告、資料5：公開講座、公開授業、社会人大学院

（2）文教政策関係

資料6：日本の生涯学習受容の歴史、資料7：文科省第6期中教審生涯学習分科会の議論整理ほか

（3）大学憲章関係

資料8

（4）社会教育・生涯学論関係

- ・上杉孝實・前平泰志編「生涯学習と計画」、松らい社、1999
- ①はしがき、②生涯学習計画と国の政策（上杉）、③大学の生涯学習計画（生田）
- ・上杉孝實「生涯学主・社会教育の歴史的展開」、松らい社、2011
- ①はしがき、②生涯学習時代の社会教育・成人教育（第4章）
- ・三輪健二「生涯学習の理論と実践」、放送大学大学院教材、2011
- ①生涯学習の理念（2）

鹿児島大学生涯学習憲章 素案起草委員  
(4月9日の運営委員会承認)

1. 生涯学習教育研究センター長 岩元 泉 教授
2. 生涯学習教育研究センター 専任教員 小栗有子 准教授
3. 生涯学習教育研究センター 専任教員 酒井佑輔 講師
4. 生涯学習教育研究センター 運営委員 築瀬 誠 医学部保健学科教授  
(5/8 本日欠席)
5. 社会貢献担当学長補佐 木村郁夫 水産学部教授
6. 大学開放事業（公開講座・公開授業等）実施教員  
前田晶子 教育学部准教授

## なぜ「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定するのか

### 【1】大学（本学の）生涯学習概念を広げる必要性

#### （1）本学中期目標に応えるために

- ・鹿児島大学 第2次中期目標 A21：生涯学習に対する全学的な取組を推進する。
- ・鹿児島大学 第2次中期計画 B32：「生涯学習教育研究センター」の機能を強化するとともに、各部局等の特色を活かした生涯学習プログラムを実施する。

→現状：公開講座、公開授業というイメージ、年配の方の学びというイメージ  
しかし…

#### ■高等教育機関の生涯教育機能（ユネスコ国際成人教育推進会議、1965年）

- ①成人教育についての体系的・科学的研究
- ②成人教育の教師や行政官の組織的養成
- ③成人教育関係者に対する指導・鼓舞
- ④正規の学生以外への大学開放

#### ■成人教育に絞らず「生涯学習と大学」一般の場合（宮坂広作、1997）

- ⑤研究成果について情報を社会に広く公開すること（学会・出版・ジャーナリズムを通じて）
- ⑥専門職や行政官などの研修
- ⑦社会人・職員人の研究参加
- ⑧一般市民を対象とする成人教育（学習機会の提供および学習活動への援助）
- ⑨社会人・職業人を正規の学生として受け入れること

#### （2）国の文教政策も伴走している

- ・文科省・生涯学習局生涯学習推進課の「ポスト熟議案」（130208）

地域社会と共生する大学づくりを推進するため、大学等が本来持っている生涯学習機能をより一層強化するための在り方を考えるシンポジウム（ワークショップ）を開催。

文科省（ポスト熟議メモ）	鹿児島大学（部局長等ヒアリング結果）
<ul style="list-style-type: none"><li>・学び直しの機会</li><li>・地域人材の養成</li><li>・大学による地域課題解決の推進</li><li>・自治体との連携</li><li>・組織体制</li><li>・放送大学との連携</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・学生の生涯学習力を高める教育…社会の要請に合致する（就職問題）学生教育の見直し</li><li>・社会人の学び直しの機会…社会のニーズに応える教育研究機能の見直し</li><li>・地域課題に応える教育研究</li><li>・FD・SD</li></ul>

（平成25年1月「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」に基づいて）

## 第1回検討会

目的：憲章内容の大きな方向性の確認

・検討の視点：具体的な表現ではなく、項目として盛り込む方向性

大学憲章	大学実態	文教政策	生涯学習論
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主自立と進取の精神</li> <li>・地域とともに社会の発展に貢献する</li> <li>・進取の気風</li> <li>・国際社会</li> <li>・世界水準の研究拠点</li> <li>・研究者の連携</li> <li>・南九州、地域産業の振興</li> <li>・環境の保全など、地域社会の発展と活性化に貢献する</li> <li>・地球環境の保全に貢献する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の生涯学習力を高める教育…社会の要請に合致する（就職問題）</li> <li>・学生教育の見直し</li> <li>・社会人の学び直しの機会…社会のニーズに応える教育研究機能の見直し</li> <li>・地域課題に応える教育研究</li> <li>・FD・SD</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域社会と共生する大学等の高等教育機関づくりの推進</li> <li>・学び直しの機会</li> <li>・地域人材の養成</li> <li>・大学による地域課題解決の推進</li> <li>・課題解決の取組により蓄積された知見を研究に反映させる</li> <li>・地域連携に学生を参画させ、学習意欲向上に高める</li> <li>・自治体・多様な主体との連携</li> </ul>	主な内容は下段

### 1. 大学生涯学習の理念の構成要素

#### （1）大学憲章と文教政策の一致点

文教政策（文科省：中教審・議論整理）	鹿児島大学憲章
地域社会と共生する大学等の高等教育機関づくりの推進	地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす

#### （2）大学の個性と地域の規定

- ・鹿児島大学は、雄大で多様な自然、厚みのある歴史と文化を持ち、知的拠点たる大学はこれらの認識と形成に深く寄与してきた伝統を持つ（自然、文化だけでなく、大学人の個性）
- ・地域とは、地域に暮らす人々の生活や経済、意識の総和であり、同時に、歴史が形成してきた文化、及び、そこに存する自然のすべてをいう
- ・グローバルな視点：黒潮文化・アジアに開かれた交流の歴史・伝統

#### （3）時代認識

- ・現代産業社会すなわち近代工業文明の本質ともいうべき、人間疎外と自然破壊の問題。脱産業化社会、成熟社会ともいう。そうした社会の創造のために大学は貢献し、そうした社会の実現によって大学は活性化する。
- ・新たな地域像、社会像、大学像

#### (4) 大学の使命・存在

・社会的存在としての大学

・一方で、アンビバレントな社会の要請の内にある存在（適応と抵抗）

（たとえば、宮坂広作 1997）

・大学の歴史的本質はつねに個別を越えて普遍に、現象を越えて本質に、現在を越えて永遠に、価値を見いだそうとする点にある。時代の制約をまぬがれ、新しい知の地平を大学は切り開いてきた。大学の有する不変の本質、たとえば、有意味な人生とは何かという根源的な問い。また、展開されている社会自身の意味づけと方向を明らかにしてほしいと、社会が大学に要請するものである。

・大学は、時代と社会から超絶するものではなく、大学と歴史・社会とのかかわりは、働きかけつつ働きかえす「相互性」のダイアレクティックである。

## 2. 大学生涯学習の定義

・生涯学習の共通認識をはかる → 第2回起草委員会の上杉講話で重点協議

頭だし（基本的理解） ・生涯学習は理念であり、具体的活動を意味する

・教育主体と学習主体の関係：生涯教育は、すべての人に生涯にわたる教育を保障する観点から教育全体を再編するアイデアである。一方、生涯学習は、その多様な学習活動を統合するのが学習主体、つまり学習者自身であることを基本とする概念である。また、学習の主体（担い手）が、自他の学習を企画し、整え、支えるといった教育への発展、すなわち、教育の主体（担い手）になることを指向する概念でもある。

・生涯学習における個人と社会（国）の関係：人間は社会的存在である（もとより大学も社会的関係の中にある）。したがって、自己実現とは、他者とのかかわりにおいて自己の個性・アイデンティティを発見することを意味し、人間は学習によって、世界と自己の関係性の現実を認識し、よりよい関係性の実現をめざし、状況と自己を変革しようとする。

## 3. 大学生涯学習の方向性 → 各論へ

・地域において主体的に生きていく人びとのための学習機会の保障は地域とともにある大学の基本的責務である。（大学の内なる生涯学習、外なる生涯学習）

・社会人の学び直し（成人教育）援助する：教養と職業訓練の二つに限定されるものではない。社会を対象化して、その構造や機能について客観的に正確に認識する、その矛盾・問題点を解決するための方策をさぐり、社会の中であって人びとともに生きている自己の生きざまについて深く省察する。このような学習のいとなみを援助する

・教員と学生（職員）の共同研究としての教育（研究成果の伝達・知識の一方的教授・伝達だけではない）、その拡張としての生涯学習事業。そのことで大学は活性化される。

・生涯学習活動は、知的発見、研究教育上の効果と相互作用であり、これらを通じて地域との共生を実現する：大学人と市民による課題解決をめざす共同学習・共同研究の展開

## 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の構想と準備状況

### 1. 着想の背景

#### 学内における憲章の実績

鹿児島大学では、平成19年11月に「鹿児島大学憲章」を、平成22年11月には「鹿児島大学学生憲章」を、さらに、平成23年12月には「鹿児島大学教育目標」を策定し、定めている。→「生涯学習」に対する学内理解の強化策として使えないか

### 2. 構想に至る前史

(参考)

鹿児島大学 第2次中期目標 A21：生涯学習に対する全学的な取組を推進する。

鹿児島大学 第2次中期計画 B32：「生涯学習教育研究センター」の機能を強化するとともに、各部局等の特色を活かした生涯学習プログラムを実施する。

(1) 2012年4月に鹿児島大学生涯学習教育研究センターの組織体制の改善がなされた。

・改善1：2010年から2年間続いた専任教員一人体制が解消され、専任講師が着任。前センター長は、退職後企画担当理事へ。前農学部長が、新センター長へ

・改善2：事務部の組織改編により、当センターの所管が学生部総務課から、研究国際部社会連携課地域連携係に移る（社会連携課長、課長代理、地域連携係長、地域連携係員）

○国立大学法人鹿児島大学事務局事務分掌規則

（社会連携課）第6条の2 社会連携課に産学官連携係、地域連携係及び知的財産係を置き、次の事務を分掌する。ただし、上司の命を受けた場合にはこの限りでない。

地域連携係

- (1) 地域連携及び社会貢献（産学官連携係の所掌に関するものを除く。）に関すること。
- (2) かごしまルネッサンスアカデミーに関すること。
- (3) 地域と大学のローカルシンフォニーに関すること
- (4) 生涯学習教育研究センター及び地域防災教育研究センターに関すること。
- (5) 与論活性化センター及び大崎活性化センターに関すること。

(2) 新体制の下、当センターの使命や現状、課題について定期会合を実施する。その結果、一年間で様々な業務改善に着手、成果も得られている。

力を入れたのは、「公開授業の拡充策」：教員・受講生・センターにとって win-win-win（教員にとって負担が少ない/手軽な参加、系統的・体系的な知識の提供、安定財源）

・受講生倍増計画（前期・後期それぞれ実数で200名）を打ち出し、対策に乗り出す

①ニーズ把握、②教員（個別・部局長）への働きかけ：科目増、③外部への働きかけ（HP充実、しおり作成、ポスター刷新、南日本リビング新聞社との連携公開講座等）

(3) センターの取り組みを次のステップに進めるためには、全学で共有する生涯学習の理念や考え方の必要性が確認されるようになった。

### 3. 生涯学習憲章の策定目的、期待される効果、方針等

#### (1) 策定目的

鹿児島大学の第2期中期目標A21・中期計画B32の(頁1の(参考)を参照のこと)達成に向けて、学内世論を喚起し、底上げを図るため、鹿児島大学がとりくむ生涯学習に対する姿勢や方針を定め、広く社会に公開する。

#### (2) 期待される効果

鹿児島大学の生涯学習に対する学内世論を醸成するとともに、以下にあげる課題をまとめて解決していく

- ①鹿大教員の多くが、生涯学習になぜ取り組まなければならないかを理解できる  
⇒教員の安心感と本学の生涯学習・地域貢献のイメージをつくる
- ②鹿児島県民も、鹿大が生涯学習に積極的に取り組んでいることを理解できる
- ③文部科学省・他大学等に対して、鹿大の生涯学習の取り組みについて発信できる  
⇒6月1日に実施する憲章策定ワークショップにおける文科省との共催(仮称事業名「地域と協働する大学づくりシンポジウム」)  
⇒9月24日～25日に全国国立大学生涯学習系センター協議会を鹿児島大学で開催

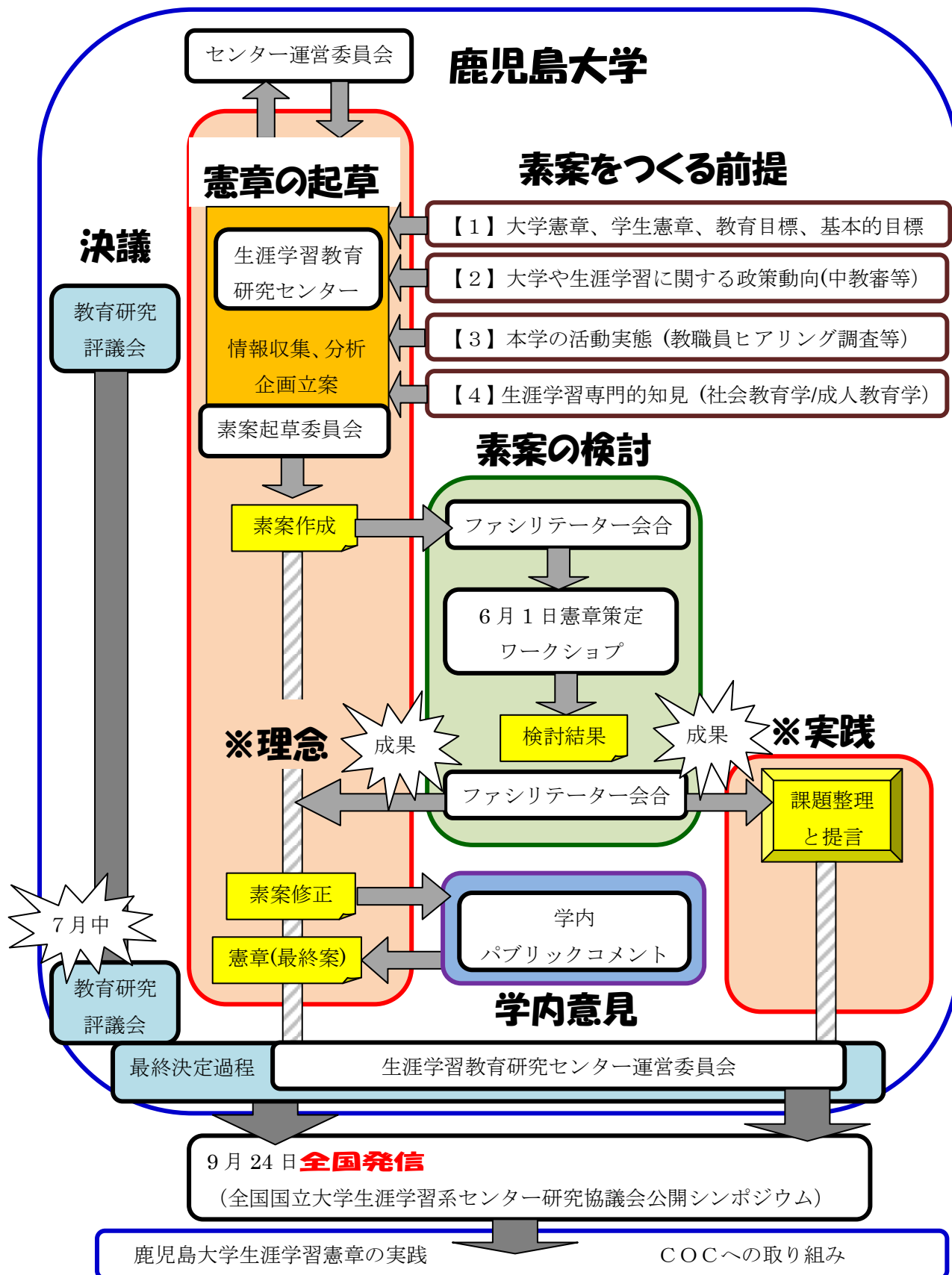
#### (3) 策定方針

- ・本学の各部局や教職員が実施している生涯学習のよい実践をベースに体系化→そのことを通して生涯学習に取り組む部局や教職員を励まし、大学の支援体制の確立を目指す
- ・策定にあたっては、文科省の協力を仰ぐ(憲章策定ワークショップの共催や全国国立大学生涯学習系センター協議会における公開シンポジウムなど)
- ・生涯学習教育研究センターが事務局として策定の責任を負う。  
⇒発展性とわかりやすさ：本学の各種憲章を軸にして、文教政策動向や大学論・生涯学習論を踏まえつつ、本学の実態に即した方向性  
⇒ポスト憲章を見据え、具体論に落とす道筋をつける

#### (4) スケジュール(次頁)

時期	内容	備考
平成 24 年度	<b>ステップ1（事前準備）</b> センターにおいて憲章/宣言のたたき台をつくる 2月～3月 学内キーパーソナルリング（研究、学生教育、地域貢献） 3月～4月 たたき台の作成	
平成 25 年 4 月第 1 週目 4 月一杯 4 月～5 月下旬 5/8 5/15 5/20	<b>ステップ2（始動期）</b> ■4/9 にセンター運営委員会を開催、策定開始の承認を得る ■理事等執行部と協議→部局長等に 6 月 1 日の参加要請を行う ■学共施設、研究科長へヒアリング+協力要請 <b>■起草委員会を立ち上げ計 3 回の委員会を開催（全て公開）</b> ・第 1 回：自己紹介、趣旨説明、方針確認 ・第 2 回：鹿大生涯学習と地域、社会、学生教育（学外講師） ・第 3 回：生涯学習憲章の素案づくり：大項目の確定 ■憲章策定ワークショップファシリテーター会合（事前）	・熟議参加者招聘依頼 ・マスコミ取材 ・ニュースレターの作成配布？
6/1（土） 6 月第 1 週目 6/6	<b>ステップ3（学内世論形成期）</b> ■生涯学習憲章策定ワークショップ（文科省共催）を実施 「①憲章素案の検討」+「②実践につなげる提言」を成果へ <b>■憲章策定ファシリテーター会合（事後）※起草委員会合同</b> <b>■起草委員会において憲章（案）を確定する</b> ・第 4 回：ワークショップの論点確認、憲章づくり+案の確定 ■学内パブリックコメント（月曜日から翌週の金曜日：2 週間）	・マスコミ取材 ※文科省の事業名は、大学熟議
6/24（月） 6 月第 5 週（火） 6/26-7/1 の間 7 月第 1 週（火）	<b>ステップ4（最終案確定期）</b> <b>■起草委員会において最終案の確定</b> ■理事懇（センター運営委員会に向けて） ■センター運営委員会において最終案の承認 ■理事懇（憲章案の報告・確認）	
7 月第 2 週（火） 7 月第 3 週（火） 7 月第 3 週（木）	<b>ステップ5（学内承認期）</b> ■役員会議での承認 ■学内運営委員会での承認 ■教育研究評議会での承認	
8 月中旬	憲章/宣言の印刷物等の作成	
9/24～25	第 35 回全国生涯学習系センター協議会・研究フォーラム 24 日午後：シンポジウム「大学生涯学習の過去、現在、未来」	・マスコミ取材

#### 4. 鹿児島大学憲章策定過程の構造図



**6月1日の文科省共催「地域と協働する大学づくり in 鹿児島大学」  
鹿児島大学生涯学習憲章策定ワークショップ企画（案）**

**（１）目的、位置づけ：**

- ・生涯学習憲章の動きを学内に周知させるひとつのイベント
- ・生涯学習憲章策定に参加した、みんなでつくったという共通体験
- ・生涯学習憲章の理念を大学の日常の中に実質化していくための確認作業

**（２）憲章策定への参加方法：**

- ・予め憲章素案（骨子）を提示の上、本学の大学活動実態に基づき議論を重ね、課題や将来展望を見据えつつ、憲章骨子の検討を行う
- ・各分科会で行う課題整理に基づき、具体的な解決方策について提言を行う（それら内容について、憲章策定後の具体的な活動実践へとつなげていく）。

**（３）期待する成果：**

- ・参加したメンバーが楽しかったと思えること、また、かかわりたいと感じられること
- ・参加したメンバー同士で、次の具体的な取り組みが展望できること、また、手始めにやってみようと思える具体的事項（提言内容）が確認できること
- ・大学執行部に意義を理解してもらえること

**（４）テーマ設定と基本課題：**

テーマ：地域とともに発展する鹿児島大学生涯学習の具体像を描く - 学生教育と社会人教育を突破口にして、社会とのダイナミックな学びの循環を創発する

基本課題：

- ・地域の課題や学習ニーズと大学活動（教育・研究）や大学資源との結びつけ方が問われている → 成熟社会における新たな地域像、社会像、大学像が求められている
- ・その基本課題において、提示できる大学生涯学習像とは？現在進行中の具体的な教育活動の中からその可能性を探り、展望を描く。

**（５）分科会テーマ設定と基本課題：**分科会 1

テーマ：社会の要請と学生教育の充実（質向上）

基本課題：地域社会とのかかわりが相乗効果をもたらす本学の教育目標の実現

分科会 2

テーマ：社会人教育機関としての大学の展望

基本課題：成人教育の特質を踏まえた学習機会の創出とそのための条件整備

<b>(6) 時間配分</b>	
13:00 開会	
13:00 - 13:10 挨拶 担当理事（学長）、文科省	分科会
13:10 - 13:40 趣旨説明 文科省＋センター	13:50-14:30 講師問題提起 ＋事例報告
13:40 - 13:50 移動・休憩	
13:50 - 17:00 分科会 閉会は分科会ごとに	14:30-16:30 班による熟議
17:00 - 17:30 会場移動	16:30-17:00 分科会全体会
17:30 - 19:30 全体報告会＋懇親会	17:00 閉会
<b>(7) ワークショップの運営方法：</b>	
■ファシリテーター会合：	
・ワークショップの前に、分科会世話人とファシリテーターが、ワークショップの目的、進行、成果について協議、確認する。	
・ワークショップの後に、分科会世話人とファシリテーターが、ワークショップの成果をめぐる協議し、憲章の検討結果、および、課題整理と具体的な提言内容について確認にする。	
■全体会：文科省生涯学習推進課との共催	
・文科省：最初全体説明、最後の講評（各分科会にて）	
・生涯学習教育研究センター・社会連携課：全体統括	
・その他協力職員・協力教員	
■分科会：	
・分科会世話人を置く：センター教員が担う	
・学外講師を招聘する：	
分科会1；専門家北海道大学高等教育推進機構生涯学習計画研究部門の亀野淳准教授（人材教育/キャリア教育の専門家）	
分科会2；調整中（成人教育学の専門家）	
・ファシリテーターを指名する：自薦、推薦等で指名する本学教職員、学生、地元等	
①教員枠：運営委員会枠；計4名 ＋ 大学開放教員枠；4名＝計8名	
②職員枠：計2名	
③地元枠：2名	
・参加メンバーを事前に依頼、確定する：	
①教員：9学部（各2～3名）、11研究科（若干名）、学共センター等（若干名）	
②職員：12名	
③学生；9学部×1名	
④卒業生：6名（※インターシップ等受入れ団体・事業者、自治体職員）	
⑤社会人学生：6名 ⑥自治体関係者等：6名	

## (8) 分科会構成案

### 分科会 1

#### ★構成員別モデル

分科会 1 チーム	1 班 混合	2 班 教員	3 班 教員	4 班 職員	5 班 学生	6 班 卒業生	計
論点	学生と地域 社会がつな がる各々の メリット、 デメリット	学生を実 社会で教 育させる ことの難 しさ	学生にと って本当 に必要な 力とはな にか	学生ニーズ に職員はど う応えるか	実社会とか かわる教育 機会をより よくするた めに	卒業生か ら大学教 育に求め ること	
ファシリテーター	1	1	1	1	1	1	6
教員	2	6	6	1	-	1	16
職員	1	-	-	5	-	-	6
学生	2	-	-	-	7	-	9
卒業生	1	-	-	-	-	5	6
計	7	7	7	7	8	7	43

#### ★役割分担 ※仮担当、最終的な判断は後日

全体進行：酒井※		事例報告：①地域の要請と学生教育 ②民間企業ニーズと学生教育の接続 ③離島のニーズと学生教育（離島県のニーズ）		
講師：亀野准教授				
ファシリテーター：				
職員枠 1	地域枠 1	運営委員会枠 2	大学開放教員枠 2	

#### ★参加メンバー（イメージ）

①ゼミ：（法文学部）	⑬学部：工学部出前授業（工学部）
②ゼミ：（農学部）	⑭学部：理学部出前授業（理学部）
③ゼミ：（水産学部）	⑮学部：医学部出前授業（医学部）
④ゼミ：（稲盛アカデミー）	⑯学部：歯学部出前授業（歯学部）
⑤学部：マスコミ論科目（法文学部）	⑰FD（共通教育センター・全学）
⑥学部：キャリア教育科目（法文学部）	⑱SD（共通教育センター・人事課）
⑦学部：教育実習総合演習（教育学部）	⑲共通教育：ボランティア
⑧学部：工学部インターシップ（工学部）	⑳共通教育：博物館実習
⑨学部：農学部インターシップ（農学）	㉑共通教育：海外実習・演習
⑩学部：共同獣医学部インターシップ（共同獣医）	㉒学共センター離島実習（国際島嶼）
⑪学部：医学部離島実習（医学部）	㉓ピアサポート（保健学科）
⑫学部：歯学部離島実習（歯学部）	◎教育センター長 ◎教育担当学長補佐

## 分科会 2

### ★構成員別モデル

分科会 2 チーム	1 班 混合	2 班 職員	3 班 教員	4 班 教員	5 班 社会人	6 班 自治体	計
論点	社会人教育 の相互作用 が生む楽し さと新しい 気づき	職員自 身のキ ャリア 形成	社会人教育 プログラム (カリキュラムや 体制) の難 しさ	社会人学 生のニー ズに応え ることの 難しさ	社会人学 生として の学びを よりよく するため に	大学が自治 体のニーズ によりよく 応えるため に	
ファシリテーター	1	1	1	1	1	1	6
教員	2	1	6	6	-	1	16
職員	1	5	-	-	-	-	6
社会人学生	2	-	-	-	6	-	8
自治体	1	-	-	-	-	5	6
計	7	7	7	7	7	7	42

### ★役割分担 ※仮担当、最終的な判断は後日

全体進行：小栗※	事例報告：①社会人大学院（社会人の特性→個人研究指導） ②履修証明（社会人の特性→長期プログラム/仕組み） ③公開講座（社会人の特性→短期プログラム/仕組み）		
講師：成人教育専門家			
ファシリテーター：			
職員 1 人	地域 1 人	運営委員会 2 人	大学開放教員 2 人

### ★参加メンバー（イメージ）

①履修証明：焼酎マイスター（農学部）	⑬連携型：医者学び直し（医学部）
②履修証明：林学学び直し（農学部）	⑭連携型：建築士学び直し（工学部）
③履修証明：外国人リカレント（水産学部）	⑮公開授業
④大学院：人文科学研究科（人文学部）	⑯企業連携：産学官連携推進センター
⑤大学院：連合農学研究科（農・水・共獣）	⑰ローカル：大崎町
⑥現職：教育実践センター（教育学部）	⑱ローカル：与論町
⑦現職：免許更新（教育学部）	⑲自治体連携：薩摩川内市
⑧公開講座：専門職向け（医学部）	⑳自治体連携：垂水市
⑨公開講座：専門職向け（歯学部）	㉑自治体連携：伊仙町
⑩公開講座：法文学部	㉒団体連携：青年会議所
⑪公開講座：工学部	㉓社会貢献学長補佐
⑫公開講座：学共センター	

## 起草委員会の活動方針について

### ■起草委員会の役割・仕事

- ・目的：「鹿児島大学生涯学習憲章」素案を作成する
- ・内容：委員会活動としては全4回、もしくは、5回を予定する  
事務局案に対して、意見を述べる

### ■起草委員会のスケジュールと内容

#### 第1～3回（5/8、5/14、5/20）

6/1のワークショップに提示する「鹿児島大学生涯学習憲章」素案骨子を確定

第1回検討会：憲章の方向性と盛り込む項目（論点提示）

第2回検討会：「大学生涯学習の到達点とこれから（仮称）」（上杉孝實京都大学名誉教授）→ 講師の話を受けての項目等の再検討、憲章の構成（案）の検討

第3回検討会：憲章素案骨子の提示と確定

#### 第4回（6/6を予定）

6/1のワークショップの結果を受けて「鹿児島大学生涯学習憲章」素案を見直す

※前半：ファシリテーター会合と合同、後半：起草委員会

#### 第5回

6月10日（月）～6月21（金）の期間実施するパブリックコメントの結果を受けて素案を確定する

### ■憲章内容の方針

大学生涯学習憲章の策定は、日本初の快挙となる試みである。文科省生涯学習推進課はもとより、関係機関からの注目が高い。よって、次のような方針をもって策定に臨む。

- 一. 鹿児島大学の各種憲章を踏まえ、鹿児島大学の個性を前面に打ち出す内容とする
- 二. 近年の文教政策の流れに対して自立性を保ちつつ、流れに反しない内容とする
- 三. 国内外の生涯学習や社会教育研究における最高の学問水準にふさわしい内容とする

## 本学前執行部、前部局長等へのヒアリングとその結果

### (1) 目的・聞き取り内容

- ・ 目的：本学生涯学習憲章の策定への理解・協力要請＋現状把握・情報収集
- ・ 執行部（学長・理事）：各自の教育／研究／地域とのかかわり／生涯学習の経験・考え
- ・ 部局長（9学部）：部局・各教員の興味関心を踏まえ、現実路線で可能な生涯学習の拡充を考えるための検討材料（本学独自の生涯学習体系に向けた情報収集）。既存の大学開放メニュー／社会人教育・リカレント教育／地域とのかかわり（学生教育・研究・自治体や企業との連携／その他の学習機会

### (2) ヒアリング結果…主な論点・課題

<p>■学内の体制づくりと評価方法</p> <p>① 現場や地域、あるいは、生涯学習への個人的ではなく、組織としてのかかわりが整理できていない。それをどうするか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 頑張っている個人（各教員）をまずは励まし、応援する仕組みづくり</li> <li>➔ 組織の問題にどこまで踏み込むか、踏み込めるのか</li> </ul> <p>② グローバルスタンダードの業績評価と地域貢献との矛盾</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 特に理学系に顕著？</li> </ul> <p>③ 地域の多すぎる要望にどう応えるか、対応するのか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 部局ごとに対応する部分と、全学で対応する部分との整理</li> </ul>
<p>■企画力・実施体制</p> <p>④ 教える側（大学）と受ける側（地域）とのギャップの埋め方 … 企画力、および、実務の問題（誰が、どこで、どういう立場で？）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 企画力＋実務力を各々の部局で高めていく必要があるのではないか</li> <li>➔ 一方的に教える感覚から、現場や地域のニーズから学び、自ら変わる必要性</li> <li>➔ 職員や第三者の企画力＋実務力を高める方針というのもありうる…？</li> </ul> <p>⑤ 学科や学部を超えた連携ができていない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 昔と違い、異分野を知る機会がない</li> </ul>
<p>■学生教育の問題</p> <p>⑥ 実習やインターシップには積極的だが課題も</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 現場の持つ教育力の高さについては、意見は一致している（一方的関係ではない）</li> <li>➔ 一方、学生の基本マナーができていないことが共通の課題になっている</li> <li>➔ 生涯学習教育研究センターと共通教育センターの役割分担・連携の在り方</li> </ul> <p>⑦ 学生の質変化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➔ 社会ニーズに応える学生教育</li> </ul>

⑧ 高校生への出前授業（小中学校に対しても）

→ 特に理工学系

⑨ 地元の就職率（医師や歯科医等の地元定着率の低下）

■多様な形態によるリカレント教育

⑩ どこまで大学のリカレント教育として位置づけるか

→ 履修証明／公開講座／国家試験といった特殊なケース（教育・医学・歯学・建築等）

## 第2回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



## 第2回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：5月15日（水） 16：30～18：30

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：別紙

### ■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長
2. 第1回鹿児島大学生涯学習起草委員会議事要旨（案）
3. 第2回検討会・論点メモの確認
4. 講話「大学生涯学習の到達点とこれから」上杉孝實京都大学名誉教授

#### ※講師プロフィール

1935年京都府に生まれる。

1959年京都大学教育学部卒業。1961年京都大学大学院教育学研究科修士課程修了。京都府立図書館、大阪府教育委員会、大阪府科学教育センター、姫路短期大学、奈良女子大学勤務を経て、1978年京都大学助教授、1987年京都大学教授、1999年龍谷大学教授、2006年畿央大学教授、2010年退職、この間に京都大学教育学部長、畿央大学教育学部長などを歴任。

現在京都大学名誉教授。専攻は社会教育、教育社会学

主な著書に『現代文化と教育』（高文堂出版、1989年）、『地域社会教育の展開』（松籟社、1993年）、『生涯学習・社会教育の歴史的展開－日英比較の視座から』（松籟社、2011年）など。

5. 第2回検討会…質疑応答を中心に

### ■配布資料

- （1）第1回鹿児島大学生涯学習起草委員会議事要旨（案）
- （2）第2回検討会・論点メモ
- （3）講師資料『生涯学習の理念と現実—大学との関連において—』

### 前回配布物

- ・上杉孝實・前平泰志編「生涯学習と計画」、松らい社、1999
- ①はしがき、②生涯学習計画と国の政策（上杉）、③大学の生涯学習計画（生田）
- ・上杉孝實「生涯学主・社会教育の歴史的展開」、松らい社、2011
- ①はしがき、②生涯学習時代の社会教育・成人教育（第4章）
- ・三輪健二「生涯学習の理論と実践」、放送大学大学院教材、2011
- ①生涯学習の理念（2）

## 平成25年度 第1回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨

■日時：平成25年5月8日（水）16:00～18:00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室（共通教育棟1号館4階）

■素案起草委員出席者：岩元教授（農学部兼生涯学習教育研究センター）、小栗准教授（生涯学習教育研究センター）、酒井講師（生涯学習教育研究センター）、木村教授（水産学部兼社会貢献担当学長補佐）、前田准教授（教育学部 附属教育実践総合センター）、以上。

■委員会の流れ：

1. 挨拶 （岩元生涯学習教育研究センター長）
2. 各起草委員による自己紹介
3. 憲章策定の経過報告・・・資料1、資料2（岩元生涯学習教育研究センター長）
4. 起草委員会の活動方針について・・・資料3（小栗准教授）
5. なぜ「鹿児島大学生涯学習憲章」を策定するのか―学内の動向と文教政策を踏まえて・・・資料4、資料5、資料6、資料7（小栗准教授）
6. 第1回素案検討会

6. 第1回素案検討会 討議内容

岩元）（小栗准教授による生涯学習概念に関する説明をうけて）このような理念であり考え方が背景にあり憲章（素案）を作るでしょ？「これってどう言う事ですか？」と問われたときに「背景にこのような事があって・・・」と説明するのは大変だと思う。なかなかね・・・。

前田）幾つか質問、良いですか？

大学憲章と文教政策とあるのですが、生涯学習論の中でのキーワード例えば自己変革など専門用語を入れて行ったほうが良いのでしょうか？

小栗)「意味は残して表現を変える」という方が良いのではと思います。分かりやすさを重視する必要があるのかなと。「表現は平易、意味は深い」方が難しい言葉を説明するよりも易しい言葉を使う方が、見る人がみれば深いということが伝わればいいのかなと。

前田) 一方でパッと見たときに「あっ！これが生涯学習だ」と一語で象徴される言葉があってもいいのかなと。

小栗) これだけは譲れないというね・・・(笑)

前田) そうですね。これが象徴しているみたい。ほかの憲章とちがう独自性っていうのかな。私も最近自己変革という言葉聞いて 子供の場合は成長でいいが大人の場合は自己変革しかない聞いてなるほどと納得しました。自己変革ってすごいことだなと思って。キーワード的なものがあるのもいいのかなと思って。

「地域」は重要なキーワードで私も最近解ってきた所が2と3に書かれていた感じがあって。教育の領域でも「地域に根差す教育」とあるが、地域の教材を使う。そのようなレベルのことが多い。そうではなく、その地域の中で、自然災害・色々な事故 人々が戦って生活を守って発展させてきた。そんな「地域の中の活動や蓄積に学ぶ」ということが「地域に学ぶ」という事だと最近思う。大学は法人化されて中途半端な位置づけで、国家の枠組みともちょっと違う。でも、地域社会から自発的に出てきたものでもなく地域との関係の作り方が大事なのかなと思いました。

地域の課題というか、地域住民だけで解決出来ないような課題ってありますよね。それは60年代から認識されていたのですか？

小栗) どのレベルでですか？

前田) ユネスコとか生涯学習と言われた時代と今、小栗さんが書かれているような「地域と共に」と言った場合、地域の課題があってそれをどのように乗り越えていくのかということです。そのような所を中心に書かれていると思うのですが「生涯学習・生涯教育」色々変遷はあると思うのですがいつ位からですか？

小栗) 実は、今度来て頂く上杉先生が地域教育の専門家でもあるんですね。地域コミュニティは前田さんもお存じかと思うのですが国によって実態が違います。そもそも65年に出てきた時の生涯教育概念は「変革・抵抗」というあまり付与されていない。出てくるのは80年代位になります。65年の時より生涯学習概念がどんどん深く広がってきていることですね。その意味ではコミュニティに関し日本の社会教育という分野がかなりコミュニティの中で発展してきています。私の中では、生涯学習と地域合併

が入ってきたのはここ 20 年位という認識ですね。

酒井) 補足というか議論を脇道に敢えて逸らしますが、生涯学習のこれまでの概念の変遷やキーワードは重要だと思う一方で今回、鹿児島大学としての「生涯学習とはなんぞや」を打ち出す新規性というか、これまで議論されてきた議論の差異化をはかるということが重要になると思います。その時に木村先生や岩元センター長が「地域と向き合う」となった時、大学は「地域と共に生きるのか?」「地域とどうするのか?」というフレーズで何か具体的に地域と大学の関係性を当てはめるキーワードがお二人の中にあるのか?もしなければ何が当てはめるためのヒントはなるのか?お考えの点があれば教えて頂きたい。

岩元) 例えば、鹿児島大学が県民にとって必要なものと皆に思われているか?と言えばそうでもない。「鹿児島大学が何か色々やってくれているから我々の役に立っているのだろう」という位には思われていると思う。鹿児島大学が身近に来てくれて我々と付き合ってくれるかと言えばそうではない。来てくれたら学生が来るだけでものすごく歓迎してくれる。ガソリン入ただけでも歓迎してくれる。具体的に自治体からは連携してくれと言われる。だけど例えば農村でいえば、鹿児島県では農村振興運動をやっているがその中で大学に役割を期待されたことは今までにない。

酒井) どうしてですか?

岩元) 大学はそーいう事に関心をもっていると思われていなかったのかもしれない

酒井) 逆に今、大学は関心を持つべきだと考えられますか?

岩元) 実際、求められているし大学の先生の知恵だけでなく学生が農村に入り込むだけで歓迎され、それだけでも元気が出ると言われる。そこでは色んな知恵をもらいたいという気持ちがある。そういう意味では昔に比べたら接近度が近くなっているかもしれないですね。つまり、昔は農村に行くと大学卒業がほとんどいない状況だったが今は子供が大学に行っている家庭も沢山ある。昔は村の中に 1~2 名しか大学に行っている人が居なかったが今は居る。そのような意味では大学がより身近な存在になってきている。

小栗) 私が理工学研究科長の訪問で目から鱗だったことがあります。彼が言うには、大学を知らないから全否定するか全てをやってくれという関係になる。という話をされていて。結局、彼が言うには、ある意味で工学部は地域に向き合ってなく、学生を外に送り出している。という見られ方をしていたし、私も多少なりともそのような見方をして

いたんですね。内部の先生から言えばマッチングが上手くいかない。それは大学を地元の人が知らないから使い方がわからない。そこには企業秘密があるので軽く出ていけないと。現場の中に大学を理解してくれる仲間を増やすことが大事。アメリカではベンチャー企業のように大学で学んだ人が行く。ということをおっしゃっていた。だから今、酒井さんの取り組んでいるのが「市民にいかに大学を知ってもらうのか？彼らが大学を使いやすくなるのか？」という取り組みをしている。

木村) 水産学部では実学で結局出てきたものは使ってもらわないと・・・という所がある。そのような意味では現場で一緒に仕事・研究をやるのは非常に勉強になるし、その場に学生を連れていくと学生も物凄く勉強になるんです。

その道のプロの彼らが納得できる話になっているか？私達が彼らと話すとき「研究データとしてこのように出ているが皆さんは感覚からしてどう思いますか？」と問いかけをするんです。そうすると彼らはやる。次回行くと「やってみました」という人もいてドキッとなり、嬉しくなり、そこから話が進むし、なぜそうなるのか？という話をもう少しすると真剣に聞いてくれる。そんな世界が出来上がる。お互いに色々な場面でやらないといけないかな・・・と。最初に私が与論島に行った時は時野呂先生と行った。野呂先生は海藻の専門家で、その際にちょっと経ったら「ちょっとこの海藻を見てくれ。この海藻があるんだけど、これはこんな特徴がある」とパッと話す。そうしていくとそこからもう一段レベルの高い話になるんです。その段階で「ちょっと待ってね」という話になると相手がプロからプロに対し問い掛けて、それに対してどう答えるかというそういう場に行くと真剣にやらなくちゃいけない。とか本当の彼らが知りたい事がその場に出てくるという話ですよね。

その中で藻場（もば）が非常に駄目になってきている所で藻場再生に関し対しどのようなやり方をするのか？という議論に発展する というやり方ができるってことです。地域とやるという話になればやっぱり具体的なテーマで実際に彼らが知りたいことを全部教え、彼らからも私たちも吸収するものがあって、それで更にレベルが高い仕事にしていくという、そういう付き合い方が地域とのやりかた。

さっき、工学部の話がでたが大学の中はプロ集団でみなさんが色々な分野でものすごいプロですよね。その中で連携し生涯学習に対応していくのが一つの方法かな？と。

例えば、水産というのは一つのことではないバックにいろんな技術が必要 なんでもそうかもしれませんが。例えば養殖の話をする と 養殖のゲージがありますよね？ネットで作ってあるのですが・・・あれは最近日本製が少なくほとんど外国製になっちゃって。養殖業を支える産業があるんですがそれを応援するため。私達からしたらゲージについて詳しい人を知らない。むしろ工学系の先生の方が知っているかもしれない。物としてですね。

そういう意味合いでは自分が出来ないところ大学の中で連携し、彼らがやっている世界

は総合的な技術を使って行いう世界なので、それに鹿児島大学ならではの対応の仕方が出来るのではないかと。単一のものだけではなく、もう一つは大学の中で連携をとってやっていくという・・・。

やってはいけないことは先生の得意な所だけ喋って終わりは駄目なんですね。

そうではなく、一つのテーマに従って皆で議論をするようなやり方が必要ではないかという気がする。得意な分野だけ喋るのは一番楽だけどそれは続かないですよ。

大学の先生も勉強しなくちゃいけないんじゃないかな？大学の先生自身も自分を変えていかないといけないんじゃないかな？という所もあるんじゃないかな？と思うんです。

木村) 食品の加工関係(水産学の加工関係)なのですが、いわゆる加工機械の方とお友達が沢山います。何故かというソフト的には解っていても、それを実現するためにはハードが必要で、ソフトとハード両方しないと動けないわけでちょっと変わった世界ともお付き合いを持たないと行けない。水産業というのは実は魚を採って加工するだけじゃなく

支えている所が沢山ある。それをみんなで対応して行かないとみんなが知りたいことに對してきちんとした答えを出すのは難しいかもしれない。

単純に水産業に関する勉強をするだけでなく、上手く大学の中でも作り上げて行けるんじゃないかな？と。

酒井) お二方の話を伺って、どちらかという地域と大学の関係性を踏まえた場合、木村先生には地域を通した大学内外の「知の循環」というものを節々に私は感じられました。その一方で岩元先生は学生が行く事で地域がいかに活性化されるかという視点があって両方は必ず大事な要素でそこを単純に「大学と地域の共生」という言葉だけでいいのか？もっといい言葉が別にないのか？もっと異なった地域との向き合い方・関わり方はないのか？というのを私達の中で言葉を積み上げて行くプロセスがあると「ウチの大学の生涯学習憲章はこうなんだよ！」と言えて素敵だなと。

木村) それはアクティビティを高めて行くという事ですね。

この前ね、えっと・・・ちょっと雑談になっちゃいますが串木野のまぐろフェスティバル 22 回目らしいですが、私達はそういうことをやってるって知らなかったんです。

串木野はまぐろ遠洋漁業の基地なんですね

あそこから出ているけどもまぐろはなかなかあそこに来なくて

静岡とかに流れて行っちゃうんです。せっかくまぐろの町だからということであってことで・・・

私達はまぐろについて研究しているのでそっちの社長さん達を良く知っていてうちの学生が公開のシンポジウムにパネラーで呼ばれたんです

それは串木野が活性化するために好きな事を言ってくれと言われて

うちの学生は非常に面白くて串木野に行ったら（彼はおじいちゃんが串木野の出身）まぐろの臭いがしない・全然感じないと言ったんですね。市長さんとか皆がいる前でバチって言ったんですね。そうしたら、みんなその通りだと。なかなか皆言えなかったと。非常に面白い事を言ってくれたと言われ、それもあり、まぐろフェスティバルをやるから是非、鹿児島大学の学生もボランティアで参画してくれと言われたんです。かごしま丸を港につけて見学してもらうことをやったんです。

ボランティアで学生が行って一緒に交流するということが自体が地元のマグロの方たちにとって非常に嬉しいことで、学生にとっても非常に面白かったみたいですね。地域と一緒にやるって中で彼らからはこちら（大学）でやっている研究について詳しく話を聞かせろという意見が出てきたんです。お互いに話をしていると出てくるんです。でも彼らは俺たちの方が良く知っていると言う。

私達がやっているのはマグロの品質に関わることでこのような効果があるよっていう話をする。彼らは「俺たちの方が知っているはずだ」と。だから、そういう時に彼らが知っている事と自分達の研究とを交換し合う。それも一つの学習の場になるのではと思っています。

ここから先はまた全く関係がないんですが・・・

（まぐろフェスティバルで）福引があるのですが ボランティアで行った学生が福引をしたら金色の玉が出てきたんです。ボランティアの女子高校生が「あっ」と言ってカラncランと鐘をならしてですね。まぐろ一本当たっちゃったんです。（笑）

前田）1本幾らするんですか？

木村）結構高いですよ

ボランティアで行ってると彼ら（漁業関係者）も気を使ってくれてまぐろ食べ放題のようになっていたのに更にお前達は、まぐろ1本持って帰るのか？という風になって（笑）私は2日間の内、1日しか行ってないのですが、学生から電話が掛けて来たんです「先生当たりました。どうしたらいいですか？」と。

「わかった！じゃあ皆でまぐろパーティーやろう」となり実は金曜日まぐろパーティーをやるんです。

前田）それまで冷凍してあるんですか？

木村）冷凍してあって頭も切ってくれて

そういうゆる〜い感じでお付き合いをしていると実はうちはまぐろの研究をやっているよという話になり、じゃあ、その話をもっと聞いてみようとか、その場を設けるから・・・

という話になる。交換して行く場が必要かなと

小栗) 教育関係の行政の所では「理論と実践」「協働・コラボレーション」とか、かなり言われているんですけど、じゃあ、連携してどうするの？つという所が見えない。連携すれば良いって話になりますが、プロジェクトを新しく作ることで純粋な研究の部分も変わっても来るし、でも地域そのものではなく、中間的な所で学びが形成されるイメージですかね？その辺が言葉にできれば良いですね。「生み出す」や「地域」とか。

岩元) 1回目としてはこれでいいんじゃないですかね？

2回目もありますので、起草委員会の趣旨とこんなことをやるんだという事をご理解して貰えば良いと思います。

〈終了〉

#### 〈配布資料〉

資料1：「鹿児島大学生涯学習憲章」策定の構想と準備状況

資料2：6月1日の文科省共催「地域と協働する大学づくり in 鹿児島大学」鹿児島大学生涯学習策定ワークショップ企画（案）

資料3：起草委員会の活動方針について

資料4：本学前執行部、全部局長等へのヒアリングとその結果

資料5：平成23年度 公開講座、公開授業一覧や社会人入学状況

資料6：生涯学習概論（小栗准教授の講義資料より一部抜粋）

資料7：文科省のポスト熟議・全国横断熟議資料

資料8：鹿児島大学憲章

その他、社会教育・生涯学習論関係資料

・上杉孝實・前平泰志編『生涯学習と計画』、松らい社、1999

「はしがき」、第2章「生涯学習計画と国の政策」（上杉孝實）、第3章「大学の生涯学習計画」（生田周二）

・上杉孝實『生涯学習・社会教育の歴史的展開』、松らい社、2011

「はしがき」、第4章「生涯学習時代の社会教育・成人教育」

・三輪健二『生涯学習の理論と実践』、放送大学大学院教材、2011

第2章「生涯学習の理念（2）」

以上。

## 第2回検討会（論点メモ）

## 第1回起草委員会からの論点

## 目的：憲章内容の大きな方向性の確認、その結果

- (1) 「地域」は重要なキーワードである。
- ・地域をどう規定するか
- (2) 「地域社会から自発的に出てきたものでもない大学」と「地域」との関係づくりが大事

## 主な論点：

- (1) 本学と地域との具体的な関係性を表現するキーワード、言葉
- ・一般論としての「地域とともに社会の発展に貢献する大学」や、大学生涯学習ではなく、鹿児島らしい個性を打ち出す。すなわち「鹿児島大学は地域と共にどう生きるのか、地域とどうかかわるのか・どう向き合うのか」（ほかと違う憲章、新規性を出す）。

具体的な関係	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・現場と一緒に仕事・研究（共同研究）をやるのが勉強になる</li> <li>・その場に学生を連れて行くと学生も物凄く勉強になる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アクティビティ（活動）を高めていく</li> <li>・プロジェクトを新しく作り上げる学び</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知の循環</li> <li>・自己変革</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロ同士（現場と大学）が学習し合うことが大切</li> <li>・一つの具体的なテーマにしたがって議論をするやり方</li> <li>・大学のプロ集団が連携して生涯学習に対応していく（現場は総合的な技術を使って行う世界）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の先生自身も自分を変える</li> <li>・学生が地域と対話し、交流する</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の人がもっと大学を知る／大学をもっと使う</li> </ul>

- (2) 実社会で働くときに役立つような高度で専門的な知識だけでなく、よりよく生きる、豊かにするような生涯学習力（⇔学習者が高度化した技能や考え方を深めて理解し、その技術を応用していけるような生涯学習的取組み）

- (3) 「あっ！これが生涯学習だ」と一語で象徴される言葉。

- ・学問分野からのキーワード

## 第2回起草委員会

### (1) 本学の生涯学習を定義するにあたり、踏まえるべき内容や論点について

講話「大学生涯学習の到達点とこれから」(上杉孝實京都大学名誉教授)

- ・生涯教育・生涯学習概念の形成史、および、その基本的内容(論点)
- ・日本社会に特有の生涯教育・生涯学習概念の受容と、特に大学における生涯学習の展開にみる課題と可能性

## 第1回起草委員会より

- ・「公開授業」からもう一步進める必要性

- ・大学の実践する生涯学習が非常に多様である

公開授業受講生との対話／学生を地域に連れ出す実践事例／ゼミで研究する社会人学生／地域と共同研究を通じた相互の学び等

- ・何を学ぶのか、なぜ学ぶのか

再掲:実社会で働くときに役立つような高度で専門的な知識だけでなく、よりよく生きる、豊かにするような生涯学習力(＝学習者が高度化した技能や考え方を深めて理解し、その技術を応用していけるような生涯学習的取組み)

### (2) 憲章の構成(案)について

#### ①前文(総論)

- ・鹿児島大学憲章への言及
- ・時代認識
- ・鹿児島大学の個性(歴史・自然・営み)
- ・地域、大学、生涯学習との関係

#### ②定義

- ・大学生涯学習
- ・地域

#### ③方針

- ・社会人教育
- ・学生教育
- ・大学人の学び
- ・大学と地域相互の学び

## 生涯学習の理念と現実—大学との関連において—

上杉 孝實（京都大学名誉教授）

### 1. 生涯学習・教育の理念

生涯学習（lifelong learning）の言葉がよく聞かれるようになってから、かなりの年月が過ぎ去っている。これに先立って、生涯教育(lifelong education)の言葉が広がるきっかけになったのは、周知のように 1965 年のユネスコにおけるラングラン（P.Lengrand）の提起であった。生涯にわたって学ぶことの意味は、古い時代から言われていたことであるが、すべての人の生涯にわたる学習を保障するために教育のしくみを整えるべきことの主張は、20 世紀に入って顕著になってくる。第一世界大戦の惨禍からの回復をめざした英国再建省の成人教育委員会が出した 1919 年報告書（1）や、1923 年に出された信濃自由大学設立趣意書(2)に、その例を見ることができる。そこには、市民性の発揮、民主主義の確立への指向がある。英国の大学で一般成人を対象に教育を行う構外教育部（department of extra-mural studies）の設置が促されたのも、1919 年報告書によるものである。1920 年にノッティンガム大学で最初の構外教育部（のちの成人教育部）がスタートし、ピアーズ(R.Peers)が成人教育の教授（professor）に任命され、以後諸大学に同様の部の設置が続くことになった。英国大学成人教育思想の中には、大学は教養を高めるもので、その教養はすべての人が身に着け得るものであり、したがって大学は開かれたものでなければならないというものがある(3)。

ユネスコにおける生涯教育の提起の背景には、激しい社会変動や技術革新に対応するために、教育における格差を是正するとともに、職業技術を新たにすることの必要性が増したことがある。そのためには、従来青少年期に偏りがちであった学校教育の改革を含め、教育全体を統合的に整備しようとするものである。そこで、青少年教育と成人教育の統合、学校教育と学校外教育の統合が強調され、さらに階層分化と結びついていた一般教育と職業教育の分離を克服しての両者の統合が提唱されたのであり、そのため、フランス語の生涯教育（éducation permanente）が英語に訳されるとき、生涯にわたって統合された教育(lifelong integrated education)とされたのである(4)。

日本における生涯学習の概念は、当初から見られたが、その広がりや、1980 年代に設けられた臨時教育審議会が、85 年から 87 年にかけて 4 次にわたる答申の中で、もっぱら生涯学習の語を用いてからである。その裏には、教育であれば、文部省の所管であるが、学習であれば当時の通産省、厚生省、建設省、農林省、労働省などあらゆる省庁が関わることができるという判断が働いていたことが、臨教審委員の言からも明らかである(5)。そのため、保養施設、観光事業、労務管理など、多様なものが生涯学習の名で推進され、1990 年の「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」では、都道府県の生涯学習基本構

想に、事業者による教育文化事業の参入が期待され、通商産業大臣（現在経済産業大臣）が文部大臣（現在文部科学大臣）とともに認可にあたることになった。ただ、その後の経済停滞によって、このような構想は進まない状態にある。

このように、生涯学習の意味はあまりに広く、定かでない面もあるが、学習者の主体性に着目した概念として、国際的にもよく用いられている。ただし、「生涯教育から生涯学習へ」といったスローガンの下、安易に学習概念で以て教育概念に代えようとするところからくる混乱も見られた。国が生涯学習体系への移行を提唱したり、自治体が生涯学習計画を立てたりといったことも、混乱を招いた例である。さすがに、当初生涯学習局を発足させた文部省も、今日の文部科学省にあっては生涯学習政策局と名称を変え、生涯学習推進計画とする自治体も多くなっている。1981年の中央教育審議会答申「生涯教育について」が示したように、生涯教育と生涯学習の両者の関係を明らかにし、それぞれの意味を混同することなく用いることが重要である。

1985年の国際成人教育会議で、有名な学習宣言が出されたが、そのことに関連して、当時ユネスコの生涯教育部門を担っていたジェルピ(E.Gelpi)が、学習概念は大切であるが、それを保障する教育についての言及が十分でなく、すべての人のための教育のみならず、すべての人による教育が目指されなければならないと言っていたのが印象的である(6)。当時、日本の文部省で政策推進に当たっていた担当官が、多くのメニューから適当なものを選んで学ぶところに学習者の主体性があると言っていたのと対比されるべき把握である。自己教育という語があるように、教育には意図的計画的な学習の意味が込められていて、学習主体が教育主体になることが重要なのである。日本の社会教育でも、公民館主催の講座などの終了後には自主学习集団が成立するような運営を心がけてきたのである。そのため、公民館主事は講座の企画・運営への学習者の参画を進めてきた。

生涯学習の推進には、フォーマルな教育のみならず、インフォーマルやノンフォーマルな教育の機能の発揮が注目されることになる。日本では、欧米には乏しい社会教育概念があり、生活に根差したこの種の教育に着目した取組が行われてきた。この点、大学の拡張や民衆大学の設立に成人教育の典型が見られる欧米と同じではない。したがって、欧米では生涯にわたる学習を保障するため、生活の場をはじめさまざまな教育機能の統合を図るとき、生涯教育といった新たな概念が必要となったのである。ところが、この概念を導入した日本では、自治体でよく見られるように社会教育に代えて生涯教育を用いる例が目立ったのである。しかし、日本で不十分であったのは、成人に対するフォーマルな教育であり、生涯教育としては大学など学校教育における成人教育への取組こそが促進されなければならなかった。一方、フォーマルな教育が中心であった欧米諸国では、生涯教育や生涯学習の理念の広がりによって、地域に入り込んで生活課題に取り組む学習グループを形成するコミュニティ教育など、日本の社会教育に近い取り組みが見られるようになっている(7)。そのための専門職員養成は大学の任務である面が大きい。

## 2. 大学開放の現状

確かに、日本でも、1973年の東北大学を皮切りに、教員養成系を中心としたいくつかの国立大学に大学教育開放センター、のちには生涯学習教育研究センターが設置されるようになり、私学でもエクステンションセンター等を設けるところが増えている。しかし、英米やその影響をうけた諸国の大学成人教育部、継続教育センター、拡張部のように、各分野にまたがる多くの専任教員を抱え、事務機構も整備されているところは少ない。したがって、成人教育について研究し、経験も重ねたスタッフによって、成人に対して大学教育としてふさわしいものを提供して、学習主体の教育主体への発展を支えるという役割は容易に果たせない。イギリス等でも近年は全学あげて生涯教育に当たるという趣旨の下、成人教育部よりも継続教育センターの増加が目立つが、その際にも、成人教育に秀でたセンターの教員が大きな役割を果たしているのである。これらの教員は、大学のみならず、成人教育センター、各種学校、刑務所、軍隊、病院など各種機関・団体で成人に対する教育に従事する者—その中には本業は別でパートタイムで成人教育を行う者も多い—、に対しての教育・訓練をも担当し、成人教育者を志す学生の指導も担っている。

1949年に制定された日本の社会教育法にも、学校施設の利用として章が設けられ、その管理機関が社会教育に貢献することがうたわれ、大学等における公開講座等の開設が促されているが、国公立教育機関を念頭に置いた規定であり、また、学校教育と社会教育の区分もあって、大学教育そのものの開放や成人学生の教育についての取組が十分でなかった。25歳以上での学部入学者も、日本は他のOECD諸国に比べ最低である(8)。公開講座も、単発的であったり、毎回テーマや講師が変わる連続講演会の域を出ないものが目立ち、質的にも問題があるものが少なくない。「流れ」というようにタイトルが定まっても、川の流れやお金の流れの話が続くといった、いわば語呂合わせのごった煮プログラムが少なくない。戦前の公開講座の方が、それぞれの科目について回数を重ねて継続的に学ぶことができ、大学教育としての内容を伴ったものがよく見られた。生涯学習振興整備法制定を促す中央教育審議会の答申では、大学等に生涯学習センター、都道府県に生涯学習推進センターを設置するとの考えが出されたが、財政的理由での他省庁からの反対や、生涯学習センターへの移行が考えられた短大からの反発もあって、法にはこの規定は盛り込まれず、都道府県教育委員会の事業の規定に姿を変えている。

英国でWEA(労働者教育協会)と大学が提携したチュートリアルクラスにおいて、30人以下のクラスで年間24回、3年間学ぶことで、難しい経済学でも習得し得るという趣旨で成人教育が展開された。そこでは、学習者の経験とも重ね合わせながら、成人教育担当教員であるチューターが、討論や個別的指導をまじえることで、大学レベルの教育を一般の人にも可能とするといったことがあった。正規の成人学生も増えた今日、一般の成人対象のクラスも3か月程度の短期コースが多くなっているが、基本的なスタンスは変わっていない。

日本では、社会教育職員の養成や現職教育はあっても、一般成人を対象とした講師に対する成人教育はなされていない。欧米で、料理学校にしろ、職業訓練機関にしろ、そこで教え

る者は、それぞれの専門知識・技能だけでなく、成人教育についても学んでいることが期待されているのとギャップが大きい。多様な学習者を前にして、講座をいかに効果的に運営し、学習の援助に当たるかは、講師にかかるところが大きいのであり、そのためにも、講師が成人教育について学ぶことが求められるのである。

### 3. 大学開放の課題

生涯教育の具体化として、1973 年以来OECDはリカレント教育の提唱を行い（9）、教育を若年期に集中させるのではなく、人生の過程で仕事と教育を交互に行う仕組みを整えることを推奨した。その場合、整備された教育機関でフルタイムまたはパートタイムで学ぶことが意識された。のちには、インフォーマルな教育やノンフォーマルな教育も含めてリカレント教育を考えるようになったが、まず大学等学校が成人に開かれ、その後職業生活に戻るものが想定されたのである。現にこの考えを 1970 年代に実践したスウェーデンでは、大学生の半数を社会人としたが、学位の取得よりも特定のコースで職業技術を向上させたり、新たにするために学ぶ成人学生が多かったのである。定められた職種に対応してどれだけの力量を持っているかで採用が決まることの多い雇用慣行の下では、年齢に関係なく、職業技術を高めて、よりよい待遇の企業に移るのである。

その点、日本では、長年、若年一括採用、年功序列、終身雇用がうたわれ、就職でなく就社と言われるように、職種は入社後に決まる例も少なくなく、社内教育が重視された。ここでは、大学等でリカレント教育がなされても、就職に結びつきにくく、退職後教養を高めるといった教育が顕著に見られたのである。しかし、近年、日本でも終身雇用システムが崩れ、期間を切つての不安定就労が多くなっている。職業技術を学ぶ場の保障なしには、職業を得ることはますます困難になる。職種によっては専修学校が多く存在するものの、玉石混交であり、授業料も高い。このような状況の下で、あらためてセカンド・チャンス教育なども含め、リカレント教育において大学の果たす役割が問われることになる。

知識基盤型社会における新たなコンピテンシーの獲得が課題となっている。

大学のほかに、英国では継続教育カレッジが、米国においてはコミュニティカレッジが生涯学習を支えるために、学生・受講者のオープンな受け入れをしている。また、ドイツやオーストリア、北欧諸国では、開かれた民衆大学が、生涯学習のための機関として存在する。日本では、これらに相当するものは乏しく、大学や短期大学がその機能を果たさなければならない面がある。他の諸国にないものとしての公民館は、全国 1 万 6 千館にも及び、法的にも明確に教育機関として位置づいているが、実態としては専任職員数も少なく、外部講師に依存しながらの単発事業や短期コースが目立つのである。地域に根差した社会教育機関として独自の価値は持つものの、体系的な学習においてはやはり大学開放の意義が大きいのである。

現職教育においても、職業団体との連携によって、そのニーズを把握しながら、職業教育に取り組み、さらにその背景にある時代・社会にも視野を広げることで、大学の機能が発揮

されるのである。英米の大学では、成人教育専用の宿泊も可能な施設を持ち、ウィークエンドを利用して専門職等の集中研修が行われているところがあり、また、夏など長期休暇中は、寄宿舍を開放しての講座や研修会も多く見受けられる。

また、生活を支える地域に根差した研究・教育を展開し、住民生活の向上に資することも必要である。その際、地域をよく把握している自治体や社会教育機関との連携が重要である。優れた活動をしている社会教育主事や公民館主事のいるところでは、成人教育についての示唆を得ることも大きい。合同委員会を組織して、広報のあり方、カリキュラム、講師の配置、運営の仕方などを協議し、実施することによって、地域に即した大学開放がなされるのである。1997年に兵庫県では生涯学習研究開発会議を設置し、2年間の検討を重ねて試行に入り、さらに2年後に本格的にいくつかの大学と提携して、健康・福祉、生活環境、人間理解、現代社会、情報などの科目別のいずれかをテーマとして、大学ごとにキャンパス内で社会人対象の専門講座を開いた。県・大学合同のオープンカレッジ実行委員会で予算も組まれ、カリキュラム等の協議を経て、広報・受講者募集は県が担い、講師や施設の提供は大学が行って、修了証は両者の連名で出された。

1996年度より開設の滋賀県と滋賀大学の連携になる淡海生涯カレッジも有名である。県教育委員会と各市の教育委員会が主催で、県内のいくつかの大学が加わって、環境問題などについて、公民館等身近な地域での学習を終えてから高校での実験等体験的学習につなぎ、さらにその後大学で理論的専門的学習を行うのである(10)。大学コンソーシアム京都をはじめとする各地域における大学連携機構でも、大学開放に大きな成果をあげている。自治体等と連携で開く講座の修了を前提として、正規の社会人学生として受け入れる例もある。また、地域にサテライトを配置して、それを拠点に地域と連携した大学教育機能の発揮も見られるところがある。英国ノッティンガム大学で、ボストン、リンカーン、マトリックなどの町の施設に大学教員であるレジデント・チューターを配置し、それぞれの地域に即した講座・学級を開設していたことも想起される。これによってアウトリーチの活動も容易となる。正規教育とのつながりも課題である。

いずれにしても、大学開放を本格的に進めるためには、それにふさわしい機構を整え、学内での位置づけも高めなければならない。そして、そこには、成人教育に造詣の深い専任教員や事務職員を一定数配置し、大学開放の企画・運営や成人教育に携わる教員の研修・サポートに当たることが必要である。

#### 4. 大学における生涯学習の意味

少子高齢化社会にあって、若い学生が減ってくることからも、成人の受け入れが促されてきた。しかし、それは単に学生数の確保のために、大学の生涯教育機関化が必要であるわけではない。すでに述べたように、急速な社会変化や技術革新に対応するとともに、教育の機会の拡大を通じて、民主主義を支える市民形成を進めることが急務となっている。また、このことは、大学のありようにも変革をもたらすものである。真理の追求のためには大学は自

律性を持たなければならないが、このことは社会の現実から目を背けたり、市民のニーズに無関心であることではない。社会問題の解決に取り組み、そのためにも科学知と民衆知とを突合せての知の創造に当たらなければならないのである。

生涯学習を評価するには、イリイチ (I. Illich) の提唱する脱学校化<sup>(1)</sup>と重ねてとらえる立場がある。教育のための学校でなくて、学校のための教育になっている面のあることは、受験学習などに典型的に見られるが、大学も例外ではない。硬直した制度に風穴を開け、より適切なものにすることが求められている。英国の成人教育部は、大学の学部に相当しながら、一般成人を対象とし、学際的な取り組みを行うことで、社会と大学をつなぎ、生活に根差した教育と知の追求を行ってきた。大学開放の部門は、このように大学全体に新たな空気を送り込む機能を持っている。もとより、生きた現実との接点は、そのような部門に任せて、大学全体は変わらないということも起こりかねない。そのためにも、開放部門を大学全体の中で重要な位置に置き、全学的な影響を及ぼすことができる機構とすることが肝心である。

脱学校化と言っても、大学である以上、制度の完全な解体を意味しない。カリキュラムをなくすのではなくて、その再構築が課題となるのである。これまで大学開放では、正規の大学教育の通俗化か、全くそれから離れた内容が多かった。入学式、修了式も、大学行事の模倣である例がよく見られた。日本の大学開放の場合、あまりにも正規教育とかけ離れていて、その接続が難しい状況にあった。その一方で、大学で形式化した講義や儀式にとらわれ、成人としての扱いが乏しいことも目立つ。まさに経験を多く持つ成人の主体性を重視した成人教育学 (andragogy) の立場から新たな教育の展開が必要である。もっとも、近年は子どもの教育学 (pedagogy) にあっても、アンドラゴジーを取り入れることが可能であるとする見解も強い。大学開放部門は、そのような教育を開発し、全学的に生涯学習を推進する重要な位置を占めることが期待される。

このように生涯学習は、学校教育の変量を迫るものである。生涯にわたって学ぶことを継続するには、主体的の学ぶ意欲と術を必要とするのであり、学校教育は、そのための力を養うことに重点を置かなければならない。そこでは、知識の詰め込みや受験の手段としての勉強でなく、学習の意味を実感し、自ら学び続けるための基礎的な知識と学習方法の習得が課題となる。これは、今日の学校教育の現状と大きく隔たるところがある。大学においても、このことを意識しての取り組みを展開することによって、生涯学習時代にふさわしい大学となり得るのである。

注

- (1) Adult Education Committee, Ministry of Reconstruction, *Final Report*, HMSO, 1919.
- (2) 『自由大学の趣旨及内容』信濃自由大学、1923 年。
- (3) R.H.Tawney, *The Radical Tradition* (R.Hinden, ed.) ,George Allen & Unwin, 1964.
- (4) P.Lengrand, *L'éducation permanente*, UNESCO, 1965, 波多野完治訳「生涯教育につ

いて」森隆夫編著『生涯教育』帝国地方行政学会、1970年、245-247頁。

- (5) 高梨昌『臨教審と生涯学習』エイデル研究所、1987年、40-41頁。
- (6) エットーレ・ジェルピ、海老原治善編『生涯教育のアイデンティティ』エイデル研究所、1988年、60頁。
- (7) 上杉孝實『地域社会教育の展開』松籟社、1993年、111頁以下。
- (8) 国立教育政策研究所内国際成人力研究会編著『成人力とは何か』明石書店、2012年、22頁
- (9) CERI、*Recurrent Education: A Strategy for Lifelong Learning*, OECD, 1973.
- (10) 住岡英毅、梅田修、神部純一『地域で創る学びのシステム』ミネルヴァ書房、2009年。
- (11) I. Illich, *Deschooling Society*, Penguin, 1973.



### 第3回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



### 第3回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：5月20日（月）16：00～18：00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：別紙

■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長
2. 第1回検討会・論点メモ、第2回検討会・論点メモ
3. 第3回検討会：起草（案）について
  - （1）内容の検討
    - ・前文
    - ・定義
    - ・方針
  - （2）ワークショップに提示する内容について

■配布資料

- （1）第2回鹿児島大学生涯学習起草委員会議事録（案）
- （2）上杉講師の講演録『生涯学習の理念と現実—大学との関連において—』
- （3）第3回検討会：起草案 ver.1 + 作業シート

## 平成 25 年度 第 2 回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨

■日時：平成 25 年 5 月 15 日（水）16:30～18:30

■場所：生涯学習教育研究センター演習室（共通教育棟 1 号館 4 階）

■素案起草委員：岩元教授（農学部兼生涯学習教育研究センター）、小栗准教授（生涯学習教育研究センター）、酒井講師（生涯学習教育研究センター）、木村教授（水産学部兼社会貢献担当学長補佐）、前田准教授（教育学部 附属教育実践総合センター）、築瀬教授（医学部）。

■出席者：油原部長（研究国際部）、枚田准教授（農学部）、久保田准教授（教育学部）、農中講師（教育学部）、桑原司教授（法文学部）以上。（順不同）

### ■委員会の流れ：

1. 挨拶（岩元生涯学習教育研究センター長）
2. 第 1 回鹿児島大学生涯学習起草委員会での討議の確認：第 2 回検討会（論点メモ）  
（小栗准教授）

小栗准教授は、「大学の生涯学習を『公開授業』からもう一歩進める必要性」「大学の生涯学習実践は非常に多様であること」「高度で専門的な知識だけではなく、よりよく生きる、豊かにするような生涯学習力の必要性」、「地域の規定方法」を第 1 回鹿児島大学生涯学習起草委員会での主な論点として挙げた。

3. 講話「大学生涯学習の到達点とこれから」上杉孝實（京都大学名誉教授）

4. 討論会

築瀬）私は医学部保健学科で専門職を養成しています。資格は理学療法士・作業療法士・看護師・助産師・保健師で数少ない人数を教育しています。大学院の特徴としては、ほとんどが社会人だということです。例えば、責任者になった人がもう一回勉強をするために入ってくるが、そのため学生の年齢は高い。新卒で進学してくる学生は少ない。これまで私達の現状を生涯学習の場として捉えたことは無かった。改めて考えると、実践していることを意味づけることはできるだろう。

専門の医療技術者を養成するので現場での実習が重要視されている。

そのため私達の教育では常に現場を意識している。

例えば、保健学科作業療法学専攻では4年生になると6週間の実習を3回おこなう。スーパーバイザーがいて、受け入れてくれる病院・スタッフがいて 学生、指導教官 この3者の関係がある中で教育の現場をおこなっている。現場を知らずに教育をしたら解離してしまう。

そのため実習現場に行き学生と話し、指導者と話している。その中で現場の人も私に対して教育をしてくれている。私の方からも新しい情報を提供し一応、教育をしている。その中に学生が入り現場を体験した学生の意見を聞き、それが私たちへの教育となる。学生は新鮮な目で現場を見る。その学生が意見を現場にフィードバックする。現場と教育する教員・学生が相互作用でその関係が上手くいくと成長・伸びていくと感じている。

家族に直接関与している職員が多い。精神科のリハでは家族が疲労困憊・辛い思いをしている。私自身、家族の会に出席している。月に一度4～5時間拘束されるが、そこで伺う話は非常にリアリティがあり学ぶことが多い。そのリアリティは学生に伝えることができる。2年に1度調査し報告書を提出しているすが大学院生に手伝ってもらい現場を知らない学部 of 学生教育に役立てている。家族の方々と教員・学生との3者お互いが学びあい教え合っていると思っている。そうした活動をもう一度価値づけ、意味づけると良い社会貢献になり教育にもつながっていくと思っている。

上杉)ありがとうございます。私も最後に務めた大学は畿央大学という私立大学でした。そこに健康科学部があり看護師・理学療法士・栄養士などの養成をしていた。大学院では社会人が多く、その人たちは生涯学習の実践・援助をしている人たちでこちらにとっても励みになった。保健師の方は健康教育の推進をしている。色んな分野を捉えながら考えていかないといけない。

木村) 水産学部では漁師さんと話すことが多く、漁師はとったものをどのように価値づけるか? 技術を入れたいと思っている。社会情勢が変化しているため、彼らのやったことのない流通の仕方に変わってきている。それをやろうとすると彼らは真剣になり聞いてくれ良い話し合いができる。技術をもっと導入したいという考えを持っている。彼らの経験知や生活知は私達の新しい発見につながり勉強になる。学生にとっても同様に、例えば一緒に船に乗り、漁師さんがどういうことをやるのか見ていると非常に勉強になる。そういう意味で、現場を使ってお互いが勉強し学習し合うスタイルがこれから必要になってくる。その辺りが上杉先生の発表を通じて非常に整理された。私たちの話し合いでは、具体的なことまで議論するが20人位の集団が手を挙げて質問する、真剣勝負の場になっている。水産の世界は範囲が広い。色んな先生をあつめてセットで持っていないと彼らが知りたいこと・勉強したいことを提供できない。このようなやり方に大学

も変えていかないといけない。

日本から水産物をヨーロッパに出すとしたら仕組みを入れていないと全く輸出できない。一人の漁師がやろうとしても絶対できない。漁協がやろうと思ってもできない。行政も入り、全員が学習しないとできない。

上杉) 水産・農業に大学がどうかかわっていくか？が大きな問題ですよ

前田) 前回の起草委員会では地域と関係づける言葉を使うかで議論になった。その時、大学はもっと地域にでていくことで自らを変えようという発想だった。先生の話をつかかってフォーマルな形の生涯教育が日本では弱いのでは？方法論として地域に出て行くのではなく、フォーマルな教育として生涯学習を大学がどう担っていくのが大事なのかな？と考えた。そのなかで、いくつか手掛かりをいただいた。大学は職業上の学習として特定のものではなく、「一般的なスキルを提供できるのでは」とおっしゃったが、大学で行う生涯学習は、いわゆる実践的なことではなく（地域と一緒に活動に関わり何かを達成していくものではなく？）、むしろ新しい知の形を地域課題と協働していくことに使命があるのか？私は抽象的な知ではなく実践的な「参加＝学習」という発想で捉えていたが、先生のおっしゃる大学の役割は必ずしも実践とはつながらないのか？という所を教えていただきたい。

上杉) 実践についてどう考えるのかということにもなるが、例えば都市計画や子どものサポート等にしても大学がどうかかわっていくかという問題だと思います。広げてしまうと話がややこしくなるので典型として聞いてほしいです。イギリスが失業者に対しなんらかの教育・援助をする。これは大学がすべきなのか？地域のドロップインセンター等がするのか？という意見がでてきた。リーズ大学がやろうとしたときに大学内でも同じ意見がでた。その時にリーズ大学が出した答え（結論）は、将来的には施設ができればそこがやるべき。しかし、どうしたらやれようまくいくのか？については、パイオニア的に大学に関わるべきじゃないか？という論が強くなった。言い換えれば、実践に関わるのは大事。しかし大学が実践に関わることの意味づけがどこにあるのか？大学が抱え続けるという考え方もありうると思うが、アイデア・ノウハウが両者（大学と地域）の協働の中でつくられ施設（地域）にバトンタッチして行くという考え方もあるのではと私は思っています。大学が関わるところは沢山ある。それは非常に大事であるが、大学が抱え込んでしまって良い場合とそうでない場合がある。大学が抱え続けることの意味づけは要るだろう。研究するということだけでいえば、大学が抱え続けることの意味づけは十分ではないとみられても仕方がない。大学の「知」そのものを変えていく、そのことが人々へ返していくことにつながる。そのような作業があり、大学が実践に関わっていくことの意味がでてくるのではないか、ということが言えると思う。抽象

的な言い方ですみません。

前田) 地域と課題は共有しつつも最終的な目標・方向性は大学の独自の使命ということですか？

上杉) どこかできちんと意識しておくことが必要だろうし、ジョイントコミュニティと言いましたのも大学が一方的に提供したり、請け負ってしまったというのではなく、一緒に考える中で極端な言い方だが「大学が来なくてもやれる」という体制を作ることにも必要な面。大学が楽をするとか手を離すということではなく、むしろ大学が自立を妨げている事がなきにしもあらず。だからジョイントコミュニティで絶えず鍛えながらやっていく。

牧田) 所属は農学部で専門は森林科学や林業です。ここ5年ぐらい社会人を集めて大学院および特別な課程で実践しています。林業は人材育成が課題。専門教育のところは林野庁や農林水産省が実施しており、協力しあっています。

上杉先生の今の話で、大学、農業専門学校、県の大学校、県独自が実施している研修プログラムをどう位置付ければ良いのか。大学だったら何なのか。大学はパイオニアでプログラムをある程度確立したら終わりという考えを持っている。

日本の大学における教育は、教師と受講者という線を明確に引いている。

大学において実施する価値は、教育者の主体と客体が対等、それが本来の大学の関係、両者の対等の関係を得られやすい立場にあるのだから、大学がそれをやるべきだという発想を私は持っている。その辺りを先生はどのようにお考えですか。

上杉) 大学の歴史を踏まえても分かる通り、学習共同体ではじまっている。大学はそもそも民衆のものではなかったのか。我々がみると「えー」と思うが、人々が集団でお互いが教え合い、学びあうのが大学本来のあるべき姿で、本来的な大学の在り方から考えれば、教え合い学びあうのが本来の在るべき姿で年齢は関係ない。

お互い綺麗に分けると、まだ谷間がある。多少オーバーラップしながらでもやっていく必要がある。ただし、お互いがオーバーラップして意味が曖昧になってもよくない。大学と専門学校は、大学従来の考え方が入りにくく、教える側としても「これだけのものは提供しなければならない」という思いがある。したがって、民衆知や大学知を突き合わせるなんていうことを言っているかという感もある。したがって、大学は即効力というよりも自己教育をつけてもらうと言う意味は大きい。そのぶん時間・手間・暇がかかる。実際にできるのかという問いかけも出てくると思う。

牧田) 話の導入は理解できる。現場的実践的な内容から出発し、分析能力や課題解決能

力、総合的に見る力を身につけるのが社会人教育の到達点。そこには専門学校が実施するハウツーの部分も入ってくる。それはバックボーンにある機能をきちんと持ったうえでの話。それが大学教育の違い。そこで教育する場合に、学問的な知（大学の知）と実践知をつなげる人間をどうつくるのかが一番の課題。自分自身はそれを悩んで、間にたって解釈学をやっているかのよう・・・という達周りを実施している状態。その間をつなげる人間をどうつくるのが大学において社会人教育を実施するうえで非常に重要。それがどこまで広がるかによって実施出来る範囲が決まってくると思っている。

上杉) 先生のおっしゃるようにその辺りが課題です。

最近の大学が変っているのは、現場体験を有している人を大学のスタッフに入れている。ただし、それが生きた形になっているかという別問題。お互いに異なった考え方が並存しているだけで、突き合わせてアウフヘーベンしているものがでてきているかというそれは言い難い。しかしもちろん、現場体験を有している人と大学でみっちりやってきた人との議論しつみあげる仕組みが整えば、媒介になる人の養成の問題にもつながってくる。学生指導もその辺りが重要になってくるのではとも考えている。

小栗) 学問領域の関係。違う領域との関わり。例えば、ジョイントコミュニティー。複数教員が絡んでいるかと思うが、その重要性とは？

成人教育部において、専門スタッフがうまくまわすにはどうしたら良いのか。先生のお考えは？

上杉) 専門分野のアプローチとして、異なった分野が交わることで視野が広がる。したがって其々の学部が完結型ではなく、色んな人を巻き込むことが必要になってきている。そうした場合に、複数分野の人たちが一緒に考え合う場が必要。従来の成人教育では、「成人教育を実施する」という意味でインテグレートされていた。ただし、学部でそれぞれが取組んでもらうとした時に、「話し合い」の場というか協働していく論理。発展していくためには、そのコアがしっかりしないと。学際的な取組みも必要。人々に関わったり、特定の産業に関わっている領域からの問題提起が必要。それに特定の学部の人が関わることも必要。

大学教員として、「本務」「本務外」という考え方があった。個人の献身的努力ですまされてきた。現在はそれも1つ。そうなるとう忙しくなるので、それまで本務とされたらたまらない。本務として意味を持つ、授業としてフィードバックされて意味があるということが重要。

イギリスのブリストル大学が生涯学習をすすめていくうえで、各学部には責任者・コーディネーターを配置し全学的な組織をつくった。統括は副学長レベルがかかわった。単に

学部任せではなく、図書館のライブラリアンも巻き込んだ。そういうことも考えていく必要がある。

築瀬) 危惧するのは機能性の問題。組織つくるのは重要。ただし、組織化されることで機能性を失うこともあり得る。非常に難しい。

上杉) 組織としての意味は、情報の共有やゆるやかなネットワーク。そこで決定しないと動けないということではない。各学部の独自性や自由を前提にしなければいけない。これまでは「本務」「本務外」ということではなく、自由度や許容性を踏まえること。それが大学の存在意義につながってくるのではないか。

酒井) 生涯学習を実体概念で捉えようとしなくていいことの必要性。憲章策定にあたっては、生涯学習の事例を単純に集めて位置づけるだけではなく、大学としてどういう方向性を目指していくのか、どうあるべきかという根幹的な問いもつきつめて議論していく必要がある。

上杉) 生涯学習は理念、アイデアとして提起されたので、考え方に沿った場合に事例を検討する論議はありだと思います。例えば、学校教育は生涯学習とは別だと思っている人が多いです。学校教育は、生涯学習という観点からたてば何でもかんでもそこで教えるということではなく、生涯にわたって学ぶ力をつけるということが大きな役割になります。そうすると、しっかりとした基礎知識を身につけること、学ぶ意欲、学ぶ術を学校できちんと提供しないといけないという風になってきます。生涯学習にてらしてどうなんだという発想をとることが重要。

油原) 先生のお話の内容、質疑応答の仕方、お年が生涯学習を生涯おこなっている人のお手本。鹿児島は独自の素晴らしい生涯学習を実践しているところ。全国 31 のお殿様の末裔が藩校サミットで鹿児島にきて、鹿児島を褒めた。

江戸時代が終わったときは 300 もの藩があったのに、それがこれまで減ってしまった。ただし、31 の藩はなぜのこったのかといえば、藩校があったから。人の生き方。どう生きるべきかをみんなで勉強し合っていた。それがうまく機能したところは家が残った。そうじゃないところは藩が消滅した。という話を原口先生がしていた。

翻って見ると、木村先生は与論島等の沿岸で生涯教育、岩元センター長は、元科技厅関連で評価の高い焼酎マイスター養成講座設立、枚田先生の林業者学び直し。先生を通じて理論的なものも学べた。

肝に銘じていることがある。それは現在、希望者全員が大学へ入れるということ。大学は昔と異なる。生涯教育の受益者として学ぶ人。その学ぶ方々のニーズにあったものを

提供していく必要がある。問われているのは自分たちとお話をうかがいながら理解し、心新たにした。

上杉) 元気な高齢者も多い時代。鹿児島もわりあい高齢の方多い地域である。そういう中で色んな仕事をしながら生涯学習の観点からみて学ぶ・見直す営みがずいぶんある。

「地域に根差した」と言えば、京都大学は足元にも及ばない実践が其々の府県にある国立大学にはある。鹿児島大学は独立性の強い風土を持っているし、その中での蓄積は大きいと思う。「地域論」も論議されることになると思うが、地域と言っても広く・狭く捉えることができる。少なくとも県域を鹿児島大学は重視されると共に、沖縄等の近辺も視野にいれながら取組む実践というのは参考になることが含まれているんだなあと思った。農業・水産に関わる TPP の問題。日本の林学もこのままではどうなるのかと私たちでも不安になるところがあるが、その上でもここで色々お話聞かせていただいて、励みになり、学びと材料として活かさなければならぬと思います。

牧田) 酒井さんが発言した内容をここで検討しなければならないのでは。

先生の報告の P. 3 の「イギリスの『趣旨』のもと～」の「趣旨」部分を具体的に教えていただくと参考になるのかなあと。全学あげてというのは難しい。

上杉) 現実論と理念論が両方ある。現実論から言ってしまうと、大学の存在意義とは何か。イギリスはポリテクニックを大学として認めて大学を倍増した。数は増やしている。逆に言えば、学生が多様化しているなかで大学とはどうあらねばならないかと否応なしに考えなければならない。そういう時代において、大学の歴史を踏まえながら、若い学生だけに存在意義を見出すことではないと論議になっていることがあります。

もう 1 つは、いくつかの学部は生涯教育を行っているが、従来、大学としてそれはプラス  $\alpha$  という捉え方が強い。だからこそ成人教育部に任せるという考え方が強かった。それはそれなりの意味がなかったわけではない。成人教育部であらゆるスタッフをそろえるのは大変。それぞれのスタッフをそろえたとしても、社会学、文学、数学 1 人しかいないということになると、ある意味で孤立状況・悪くいえば「独りよがり」が生じる。それぞれの専門スタッフがいる中で相互に鍛え会っていく状況が必要。そうするとそれぞれの学部が直接関わらないといけない。

ただし、全額を挙げて取り組むということは、それは自分たちの「使命」であって「プラス  $\alpha$ 」ではないんだという、共通意識をどう醸成していくかが課題。

そういう意識付けが必要である。しかし、学部の中にコーディネーターや問題提起してくれる人がいないといけない。そういう人たちが集まって全学的に取り組むことが具体的な中身ということになる。

枚田) 憲章においては、「+αではない」という宣言をする。「全教職員がやるべき」という位置づけを大学としてはしないといけない。

実際に直ぐにうごくわけではないが。その上で実践に関しては学部に関係する人間をきちんと配置する。

上杉) 勿論、上手くいくかどうかは難しい。形式的に配置してもうまくいくわけではないので、実績ある人を中心に。

枚田) 科学を深化させる上での現場とフィードバックという意味を宣言に入れないと、大学は研究者の集団であるから、「教育者」の集団といくらいったところで駄目。研究者としてのパッションが湧くような文章・宣言を中に入れないといけない。

上杉) 最近では、研究と教育を分ける傾向があるが本来的に研究・教育は一体。そうした場合、先ほどお話があった通り、現場と触れることによって新たな知の開発がなされるんだという、そのところをきちんといれておかないと、教育のために特別に貢献しなさいと言う意味ではパッションが充分感じるものではない。

岩元) 先生のお話と皆さんとディスカッションをして、鹿児島大学生涯学習憲章を策定する意味がクリアになってきた。そもそもこういうのを作ろうとなったのは当センター強化もあったが、各学部での生涯学習を強めようという目標があった。生涯学習を全体のものとする。

それぞれ既に色んなことをおこなっているんで、それを拾い上げることと、最初に2つ言われた職業教育と教養教育を結び付けるということがあって、それをとにかく宣言の形にする。そうすると別に新しいことをやろうということではなく、生涯学習として読むと先生方のおこなっている活動は意味があると理解でき、さらには先生方の機動性が増すのではないかなと思っている。「生涯学習憲章がここにあるからこれをやる」という説明にある。

部長も仰ったように、鹿児島大学はこれまで色んなことをやってきている。それをワークショップで拾い上げる。宣言した後で何か新しいセンターや部局をつくるということまでは考えていない。宣言によって学内がまとまり、活性化するという。

今日は頭の整理になりました。ありがとうございました。

小栗) まとめに入っているがどうしても確認したいことがあります。現場に関わることに、学問知がかわり、それが地域に還元されていく。それを突き詰めていったときに、敢えて生涯学習として考えていくとそのことで、大学の存在や社会変化をどういう風に見たら良いのか。循環していった時に何なのかということをお伺いしたいが1点。

学生教育はでてこなかったが、我々大学人が現場に出て学び合う事によって、学生教育はどう変わるのか。継続的にやった先に何かあるのか。

酒井) 学生教育だけではなく、SD も入れてご意見いただきたい。

上杉) 学生教育は現場に触れると言う意味は非常に大きい。学生自身が経験不足と言える。それは自然にそうってしまった面もあり、そういう場が用意されてこなかった。現場にべったりということではなく、現場体験を踏まえながら自らを考え大学での学問を身につけるようにしないと、大学の学問がなんなのかということが実感としてわからない。そういう意味で、学生が現場に触れることが非常に重要。松本大学のように学生が野菜売るまでやるかという論議も出てくるが、あれも1つの経験になり、貨幣の問題や科学、流通の問題を考えるきっかけになっている。それを大学がどうつなげていくかということで、FD、SD が教職員がアレンジする力を持たなければならない。ただ現場に出てやればよいという事ではない。スタッフの方がそれをちゃんとアレンジする力を持たないといけない。どのように大学の中でカリキュラムに活かしていくか、工夫が前提になってないと。

小栗) これまでの大学の歴史を踏まえた時に、大学が知を常に生産してきたと理解されている。それを生涯学習概念でとらえることで、より現場に触れることで生成される知が注目される。これは還元されていくことは、大学の延長なのか大学自体をある意味革新させることにつながっていくのか。

上杉) 大学はこれまでどうしてきたかということと関連で考えることになるが、大学はそれなりに意味をもつものを提供してきた。これからは今までと変わったことになるというわけではないが、社会変動や色んな事も踏まえると、もともと科学はある前提の上に成り立っている。仮定の上になりたっている。それだけに絶えず代わっていかなければならないというものが出てきている。相変わらず変わらなくても良い理論もあるが、理論の根底を覆すものもある。大学が自己革新をしていくためには、現場や地域と触れあいをやっていかないとけない。つまり、従来の象牙の塔というのは、確かに、権力や他の圧力から大学が自律性を守るためには必要であったし、そこで生成される知はそれなりに意味をもっていたが、これからの大学像を考え時には、大学は守るという立場からある主アクティブに現場へ働きかけ、自らも変わっていくというそういう存在にならないといけない。理想論と言われればそこまでだが、目指すべきはそういうもの。大学が変わっていかないとけない。

築瀬) 地域に出て行くと地域の人たちが評価する。分かるように説明してくれたかやそういう事に対する配慮等。出て行くというのは、教員としてはリスク。大学内で学生に話をしておけば安全。それを自分の研究したものを地域に出した時にうまく伝わるか、受けいれられるか1つ自分が評価される。

上杉) FDの時にそういった先生の話が共有されることが大事なんだろうね。ありがとうございました。

岩元) 本日は上杉先生の話もまじえて内容に入る議論もできたのではと考えています。第2回起草委員会をこれで終わりに致します。ありがとうございました。

#### 〈配布資料〉

- ・第1回起草委員会議事要旨(案)
- ・第2回検討会(論点メモ)
- ・上杉孝實(京都大学名誉教授)『生涯学習の理念と現実—大学との関連において—』

以上。

## 平成 25 年 5 月 15 日 第 2 回起草委員会

上杉孝實先生講演 in 鹿児島大学

(講演録)

## ■はじめに

ご紹介いただきました上杉です。ここに資料としても私の経歴といいますか、概略を書いていただいていますので、それをご覧くださいと思います。いろんな仕事をして京都大学のほうに勤め、そして定年後も幾つかの大学で仕事をさせていただいて、現在のところはフルタイムの仕事はしておりません。生涯学習とか社会教育とか、こういった領域を中心に研究なり実践なりをやってきたわけですけども、今日、生涯学習にかかわって大学というもののあり方を考えられるということで大変重要な会議にお招きいただいたわけです。どれだけ皆さま方のお考えになっていることと合うのかどうかということもちょっとよく分からないままで失礼することになるかと思いますが、後でまたいろいろ論議の中で一緒に考えさせていただくことができればと思っております。お手元のほうに資料で「生涯学習の理念と現実—大学との関連において—」が配られているようです。実はこれは去年の暮れに全日本大学開放推進機構という組織があるんですが、NPO 法人を取っているんですけども、そのところが開いたフォーラムといいますか、大学で大学開放等に当たっている人たちの集まりで話したものをもとにして私が文章化したものを用意いただいわけです。ただ、このときはどちらかというと大学の継続教育センターであるとか、あるいは生涯学習センターであるとか、そういうところで働いている人たちを中心とした集まりだったものですから、かなりそのことを意識したものになっております。

今日この生涯学習を考えていくときに、従来どちらかといいますと特にイギリスの成人教育なんかの歴史を考えてまいりました場合に、初めはとにかく大学が全体として当たるといふよりも有志が当たるところから始まったと言ってもいいかと思うんです。そのうちに組織的に成人教育を進めるにはやっぱりそれなりのデパートメントがいるだろうということで成人教育部が作られてきたという経緯がございます。ただ近年の傾向としましては全学的にそれは取り組まなきゃならない問題だと、成人教育部に預けてそこでやってもらいたいというのでは不十分だということで、イギリスにおいても成人教育部から次第に継続教育センターとか生涯学習センターであるとか、そういうセンターが設けられるようになりまして、そして各学部が連携しながら生涯学習に当たるようになっていっております。従来、成人教育部の中に例えば社会学であれ、あるいは物理学であれ数学であれ、いろんな専門分野の人たちが包含されていまして、そして成人教育を進めてきた。しかし、当然それぞれの専門学部があるわけですから、そこが直接かかわっていけばいいだろうということになるわけです。ただ、その場合学生の教育というだけでなくて成人を対象として、あるいは一般の人を対象

としての学びというものを進めていく役割を担わなきゃならないわけですから、従来の専門教育をそのまま出すのとはまた違った工夫があるだろうと。そういうことで、そういうセンターとも連携しながら進めていくのが今日的な動きとなっております。そういうようなことを振り返ったときに、今、鹿児島大学でやろうとされていることの意義は大変大きいと思っている次第です。

## ■生涯学習と生涯教育

この資料のほうではいきなり生涯学習・生涯教育の理念というところから始めているわけですが、この辺についてはもうご承知のことも多いかと思います。1965年のラングランの提起が大きな契機になっているわけです。

ただ、もちろんいろんな伏線はあったわけですし、またそれ以後の動きにおいても、大きくは2つの流れというものがあって、この生涯学習とか生涯教育が促されてきたと言っているかと思っております。1つは先ほどもちょっとお話の中に出ましたように職業教育との関連です特に技術革新が非常に激しい中で、従来のように、例えば大学を出るときに身につけたものだけで、生涯それでやっていけるとは到底言えない。絶えず知識・技術を新たにしていかなきゃならない課題が出てきたということが1つあります。それからもう1つには余暇の増大ということも無関係ではないんですけども、仕事だけの社会ではないわけであって、そういう中で市民性を発揮したり、あるいは余暇をより充実したかたちで文化発展につないでいくという課題があり、そのためには学習社会という考え方が必要である。つまり学び続けるといいますか、そういうことの中で生きがいのある社会もできてくるし、あるいは民主衆社会も維持されるんだという考え方が強くなってまいりました。そういう面から簡単に言ってしまうと教養という言い方もできるんだろと思いますが、さまざまな学びをしていく社会を作らなきゃならないということです。この流れとしては、例えばアメリカで言えばハッチンスという人などに、かねてから教養こそが重要だと、もっと言えば大学の使命は教養を身につける機会を用意することだと、そういうとらえ方がありました。これはイギリスの成人教育の歴史の中にはかなり強い考え方で、職業教育を身につけるということは大事ですけども、それだけではこの社会のありようについて考えたり、あるいは自分を豊かにしていくことにはなかなかならない。特に労働者の場合、仕事に追われてしまってそういう機会がないのを、何とか教養を身につける機会にしていく。これはすべての人にとって必要なことであり、決して一部のエリートだけの問題ではないんだと。そうすれば大学がやはりそういう教養教育でやるのには一番適した場であるというとらえ方があったわけで、それをすべての人のものにしていくというか、すべての人に開いていくのが大事だということです。これはトニーといったイギリスの成人教育を進めた、経済学者の言葉でもあるわけです。それに近いものがアメリカでもハッチンスといったような、30代でシカゴ大学の総長にもなった人の考え方にあり、それがこの生涯教育という考え方にもつながっている。だからハッチンスが1960年代に『The Learning Society』という本を書いたのが、いわばこの生涯教育

についての理念を示したものだというような評価を受けたわけです。

さらに 1972 年になりますとユネスコで「フォール・レポート」が出まして、これはフォールというフランスで文部大臣や首相もやったことのある人がまとめたレポートですからフォール・レポートといわれていますけど、ここでやはりこのハッチンスの考え方をかなり受け入れたようなかたちのラーニング・ソサエティの考え方を示して、そこでは特に「Learning to Be」ということを強調したわけで、つまり何か財産とか、あるいは資格を身につけるというだけでなく、人間であるということを考える学びがこれからは必要なんだというものです。それこそが世界をつなぐことにもなるしというような考え方がありました。これは 1972 年のことです。こういうのが生涯教育・生涯学習につながるものとして今まで考えられてきたと言っているかと思います。

ラングランの場合は生涯にわたって統合された教育というように integrated という言葉を最初に入れていました。もともとは *éducation permanente* というフランス語であったものですが、これを英語に訳すときに *lifelong integrated education* と訳したということで、この integrated が 1 つの中心概念として当初、意識されたわけです。

生涯にわたって統合された教育を進めていかなきゃならないということで生涯教育という言葉が提起されたのです。統合されたとはどういうことかということで 3 つの統合を言っておりまして、日本ではこの 2 つの統合についてはよく言うんですけども、その第 1 は青少年教育と成人教育の統合です。それから第 2 には、学校教育と学校外の教育です。それから 3 つ目がありまして、一般教育と職業教育の統合、教養と職業教育、専門教育の統合と言ってもいいかとは思いますが、これを言っています。つまり今までのようにそれぞれがそれぞれでやるというよりも、それを統合して生涯にわたっての学びを保障していく、そういうものとしての生涯教育を提起したわけでありまして。日本ではよく、日本は学校教育偏重だということをいわれますが、学校教育を中心に教育を考えてきたのはヨーロッパも同じでして、そういう意味でこの生涯教育はある意味で教育概念を拡大するといえますか、そういう意味合いを持ったという見方もできるわけです。むしろ日本のほうが社会教育といったようなかなりノンフォーマル、インフォーマルな教育を含んだものを独自概念として持っておりましてから、生涯教育という言葉を使ったときに社会教育と重ねて考えたりとかいろんなことがあって、ちょっとヨーロッパとは違った状況になったわけです。明らかに学校中心で考えてきたところで、しかも社会教育という概念のないところでは、生涯教育というとその教育の概念の拡大という受け止め方もあったということです。もちろん、その前史というものはあるわけですからその辺についても資料では触れてはおりますけど、そこはちょっと省略させていただきまして、この 1 ページの真ん中より後のところにも今、申し上げたようなことを書いております。

ところで、一番ややこしいのは生涯学習と生涯教育という概念の問題ですけども、最初日本で生涯教育という概念を導入するときに、一生涯教育なんて真っ平だという非常に素朴な反応はあったこともこれは事実でありまして、どうしても教育というと何か与えられるとい

う印象が非常に強い。学校教育でさえへきえきしているのに、この上まださらに生涯にわたって教育かというような反発もあったことも事実です。そういうこともあってかそのうちに生涯学習という概念がよく使われるようになっていったのですが、これの大きな契機になったのはやはり臨教審の答申だろうと思いますこれが1ページの下段のほうに書いているところです。ただ、この臨教審の場合は明らかに政策的な意味合いで生涯学習という概念を大きくクローズアップしたと言っていいと思います。つまり教育というと文部省の所管になると。ところが建設省であれ労働省であれ農林省であれ皆かかわっていくという場合に、学習概念ならばどこでもかかわりがあると言えるということがありました。臨教審委員であった高梨さんがそういうことをはっきり証言しておられるので間違いのないと思うんです。そういう中で生涯学習という概念がクローズアップされた。もちろん、その前提として生涯学習と言ったほうが与えられるというよりも主体的に学ぶんだというようにして肯定的に受け止められやすいこともあったことは事実です。ただ、混乱が起きたことも事実でして、これからは生涯教育と言わずに生涯学習だというような非常にシンプルな受け止め方の中で、本来、教育と言うべきところまで学習と言ってしまって混乱が起きたところもあるわけです。例えば生涯学習体系に移行するとい。ところが生涯学習体系を誰がじゃあつくるのか、1人1人が自分で体系を作るのはいいんですけども、国が生涯学習体系を作ると、国が生涯学習をやるのかと、あるいは自治体がそんな生涯学習を、自治体自身がやるのかと。それはそういう見方もできないことはないでしょうけども、明らかにそこで意識されているのは生涯学習は住民1人1人がやるということですから、それをあえて生涯学習体系とかいう言い方をするのはそもそもおかしいというような批判も当然出てきたわけでありまして。さらには生涯学習の対象は子どもだけでなく大人もだというような言い方をすると、混乱が生じる。

生涯学習の主体としての子どもや大人であれば分かるのですが、子どもや大人が学習の対象になるというのでは意味が変わります。学習の対象は社会事象であったり自然事象であったりというのなら分かりますが。そういう概念の混乱が起きてしまっています。文部省も当初、生涯学習局という名前の局を設けて、それでは意味が分かりにくいということで批判もあったんですが、現在では生涯学習政策局ということで少しその辺は是正されているし、自治体も生涯学習推進計画とか、そういう言葉で多少はかつての生涯学習計画なんていう表現は減ってきているだろうと思います。

そういう中で概念整理したのは、ご存じのとおり1981年の中央教育審議会の答申でありまして、2ページの第1段落のところに書かせてもらっていますが、「生涯教育について」という答申です。そこでは生涯学習と生涯教育とを一応定義していて、要するに生涯学習は1人1人が主体的に生涯にわたって学ぶことであって、そういう観点から学習を支えるための教育の仕組みを整えるときに生涯教育という概念が成り立つんだと、そういうとらえ方をしたわけです。だから、あえて言えば生涯学習は1人1人の人たちが主体的に学ぶことであり、生涯にわたって、それを支えるためのいろんな教育の仕組みを整えればそれが生涯教育だということになったわけです。ただ、教育学者の場合は、整った学習は教育だととら

えます。例えば自己教育という言葉を使ったりすることがありまして、自らが意図的・計画的に学習を進めていく場合に教育という概念が成り立つという、そういうとらえ方をする人もあるわけです。そうすると、この中央教育審議会の答申で言うところの生涯教育も、学習の援助というように、やや、自己教育の側面が見えにくいような表現になっているとは思いますが。そういった論議になるところはあるのですが、一応そこで概念整理はなされました。だから私は生涯教育と生涯学習という概念はできるだけ使い分けはするようにはしています。ただ、これもずいぶん誤解が出てきていて、1人1人が主体的に学ぶのが生涯学習だというので、集団で学ぶとかそんなのは生涯学習でないみたいなことを言ったりする人があったりして、社会教育は集団で学ぶけども生涯学習は1人1人が学ぶんだというような、何か個別学習に解釈してしまっている人も中にはあるということがあって、まだまだ混乱が決して取れているわけじゃないとは思いますが。

その後に「1985年の国際成人教育会議で」と書いています。これは12年に1回ぐらいの頻度で開かれてきたものでユネスコが主催であります。その第4回の会議、これはパリで開かれましたのでパリ会議ともいわれますが、そこで学習権宣言が出された。従来、教育という言葉が法律上なんかも表面によく出ていた、日本国憲法でも、教育を受ける権利が規定されている。教育を受けるという受け身的にとらえてしまうような表現になっているんですが、実際は戦後の国際的な文書等では **Right to Education** という表現が多いわけですし、教育にかかわる権利というか教育に関する権利というか、こういう表現になっているので、そういう点では日本国憲法は今、憲法論議があつて改正したほうがいいという意味じゃないんですけれども、教育を受ける権利というよりも、教育にかかわる権利としたほうがいいだろうと思うんです。しかし、要するに学習という言葉があまり表面に出ていなかったのが、この学習権宣言が出ることによって **Right to Learn** で、割合、日本で言う社会教育も含めての学び、

大人の学び、生涯学習についてもピンと来やすい表現がそこでなされたということがあります。ただ、そのころユネスコで生涯教育の責任者でありましたジェルピに聞きますと、彼はここに書いていますように学習概念は大切けれども、それを保障する教育についてはもっときちんと言及すべきであつたんじゃないかと言っていました。彼自身がそこで素案を作ったということではないようで、学ぶということは大事なんだけれども、その学びを作っていくというか、もっと言えば教育の主体になるということも本来は目指すべきだということです。だからすべての人のための教育のみならずすべての人による教育が目指されなきゃならないと彼は言っていました。日本に来て講演もやって、われわれとも話し合ったときにそのことを言っていたんですが、このとらえ方が大事です。その後ろにちょっと例を挙げていますけれども、学習の主体といった場合どうしても、文科省のそのときの担当者の方が、行政などがあるいろんなメニューを用意し、その中から主体的に選んで学んでもらったらそれが主体的な学習なんだと言われたんですが、ちょっと私はひっかかりました。ジェルピなんかのとらえ方とも関連して学んだ者が今度は教育の主体にもなっていくということが目指されるべきであ

る。先ほども言いました自己教育ということも含めてなんですけども、自らも要するに主体的にその学習を意図的・計画的にやっていく。あるいはまたさらに人々とのかかわりの中で教育を進めていく主体にもなっていくことが本当の意味での **Right to Education** ということになっていくし、学習権宣言も本来はそういうところまで見通してのものではないかと思っています。実際、日本の社会教育の実践の中では、学び手が今度は自分たちで自主的に学びのグループを作り、そしてプログラムなんかも作り、自分たちで教育を営んでいくんだということを心掛けてきたわけですから、そういうものが本来的には生涯学習とかいうことになれば必要なものだろうなと思っていますところ。

## ■大学と生涯学習

先ほども触れましたように、その下に書いていますように、フォーマルな教育だけでなくもっとインフォーマルな教育、ノンフォーマルな教育も視野に入れて考えないと生涯にわたっての学びは成立しないわけです。フォーマルな教育は学校教育に典型的なように、教える者、教えられる者、あるいは教材はかなり明確なものです。ノンフォーマルな教育は社会教育でかなり多い形態でありますけども、必ずしもそういう分文化、教育者と被教育者が分かれているとか、教材がしっかりしているとかそういうことにかかわらない、話し合いの学習であるとかそういったようなものがノンフォーマルな教育になるでしょうし、インフォーマルな教育になれば、もっと日常的な営みの中でおのずから教育的な作用がなされているといえますか営まれているというか、そういうものを指すわけです。先ほども触れましたように、むしろ欧米ではかなりフォーマルな教育を中心としていて、例えば成人教育でもフォーマルな教育を成人に及ぼすといえますか、そういうことでやってきたところがあります。ところが日本ではどちらかというと、そのフォーマルな教育が青少年期の教育というところでとどまってしまっている傾向があつて、あとはノンフォーマル・インフォーマルな教育だというような感じが非常に強かったわけです。日本で生涯教育とか生涯学習という概念を導入するのであれば、一番のポイントになるところは、フォーマルな教育をどのように生涯にわたって用意していくかということです。もちろんそのことはノンフォーマル・インフォーマルな教育を無視することではなくて、それとも連携しながらフォーマルな教育の機会を保障していく、そういうことが重要ではないかと思われます。具体的には例えば大学なんかの取り組みを見ても、どうしても青年期に中心が置かれています。成人に対する公開講座は確かに結構歴史が古いわけですし、京都大学なんかでも明治の40年代からやってはいるんです。

むしろ戦前のほうは戦後以上にしっかりと体系的にやっているんですけども、戦後のほうはむしろ場当たり的になっているというような見方もできないことはないぐらいです。しかしどっちにしてもそれはかなり組織立ったものというようには、英米に比べて言えない状況がありますので、そのところが生涯学習・生涯教育ということであれば一番ポイントになるのかなということを考えてきたわけです。大学開放ということになりますと日本では生涯学習関連のセンターが作られるのも比較的最近のことです。各学部での取り組みはもちろんそ

れなりにやられてきた経緯がありまして、特に医学部であるとか農学部であるとかはかなりそういう歴史を持っているところがあります。アメリカなんかの大学成人教育の発達はむしろ農学教育から始まったと言ってもいい、農民教育から始まったと言ってもいいようなところもあります。それから医学部とか歯学部とかいうことになると、これはもう医師の再教育とか、そういうことは絶えずやってこられたところがあつて、これはイギリスなんかでも同じでありまして、継続専門教育はかなりの部分、医歯学部が担ってきたというところがあります。だから、それぞれの学部である程度やられてはきています。ただ、専門教育を学生に対してやりながらということになりますから、どうしてもその継続教育の部分といえますか、そういうところに十分な思いとか、あるいは時間とかを費やすことができてきたかどうかという、それはそう簡単にはいかなかった面もあるだろうということで、それを今、どういように再構築するかが課題です。特に成人に対しての指導ということになれば、社会人と言ってもいいわけですが、若い、まだこれから社会に出ていくという学生に対する指導と同じでいいのかどうかという問題にも直面してくるわけでして、社会人なり成人なりのいろんな経験を生かしながらの学びということになればそれなりの工夫もいるだろうということです。そうした情報なり、あるいはそういう観点からの教員の研修、今、FD、ファカルティ・ディベロップメントばかりですけども、そういうFDなんかも考えなきゃならない面もあるだろうということもあります。

そういう意味で、先ほどもちょっとイギリスの例を挙げたわけですけども、この2ページから3ページにかけまして少しそのことも踏まえて書いているところがあります。例えば3ページの上のところの2行目に、「イギリス等でも近年は全学あげて生涯教育に当たるという趣旨の下、成人教育部よりも」むしろ継続教育センターというかたちでやっていくということがあります。その場合に各学部で成人教育についての意識を持ってやっていただくということが極めて重要になっているし、またいろんな専門職集団なんかとも連携しながらやっていくことが必要になってきているということでもあります。日本の場合、次の段落に書いていますように、社会教育法の中では確かに公開講座とかについての規定はあるわけですが、極めてそういう面については弱い規定ということです。だから成人についての取り組みは今までどちらかといえば非常に弱かったし、今でも成人学生1つとらえても日本はOECDの諸国の中で一番少ない比率というような状況があります。そういう中で成人教育の工夫としてよく挙げられるものとして、イギリスにおけるチュートリアルクラスがありまして、3ページの真ん中よりやや下のところですけども、労働者教育協会で開発された方法としてチューターづきの学級、30人以下で、そして長期間継続的に学びを続けていくことによってかなり難しい学問でも人々のものにすることができんだという、そういう信念みたいなものから成り立っているものです。チューターがつくということは個別指導を加えるということとして、これはオックスフォードであれケンブリッジであれ大学のチュートリアルの仕組みを参考にしたことは間違いないと思うんです。

そういうチュートリアルクラスで、しかもその中身もいきなり概念から入るというよりも、

例えばなぜ賃金がこれだけこういう状況で規定されているのかとか、なぜ景気・不景気は起きるのかというところから入れば、いきなり価値論とか貨幣論から入ったのではなかなかついてこれない人たちも関心を持って学ぶことができるんだというようなことでやっています。最近では3年間にわたってやるというクラスはもう少なくなっていますが、成人教育の指導者は、大学の教員があたってもチューターという言葉で呼ばれることが多いわけですし、そのクラスサイズも今、言いましたようなことで個別指導が可能なような人数にお押さえしていくことをやっているということがあります。だから専門の教育を進めるとともに、成人に対しての教育であることも意識しながらやるという、そういうことを心掛けることが重要な課題になっているということです。

### ■今日の課題

3ページの下の方から「大学開放の課題」ということで書いているところがありますけれども、日本の場合、非常に難しいのは先ほど申しました職業教育との関係のところですし、この4ページの上のところにもちょっと書きましたように、1970年代、スウェーデンなんかで社会人学生の受け入れがどんどん進んでいったということは、やっぱり職業教育との関連が非常に強かったということがあります。つまり、技術革新等で自分自身のスキルをグレードアップしなきゃならない、あるいは職業構造、産業構造そのものの変化の中で、転職しなきゃならないといえますか、そういうことも非常に多く出てきたわけですから、それがかなり社会人学生を受け入れることの意味として強調された。ときには半分、ある段階では半分以上が成人学生になったという時期もあるぐらいです。ところがその成人学生が学ぶのは何もその学位、つまり学士号がいるとか何とかというよりもむしろそのスキルアップですね。そういうコースを選んで学ぶ傾向が強かったといわれています。日本の場合は、放送大学にしろ何にしろ社会人の教育は、あまり職業に直結しない。もちろん現職の方で先ほど医学関係のこともお話ししましたが、再教育は必要だし、新たな知識が必要だという分野では、そういう研修の場として大学が大事だということはかなり理解いただける面があるんですが、いわゆる職業のスキルアップ、あるいはその転換で、大学を利用するとか、大学がその役割を果たしているんだというようになかなかないところがある。それは雇用形態の違いが一番大きく関係しているんだろうとは思えます。日本のように若年一括採用で、もう今、崩れつつあるんですが一応、終身雇用みたいな考え方が支配的であった時期を考えますと、要するに今すぐ役立つ技術をどう持っているかということで採用するというよりも、極端な言い方をすれば学習可能性というか、そういうかたちで学卒を採る。つまり企業でトレーニングする。そのためにその企業でのトレーニングについていける学生を採ることが大事だと考えていました。それが受験で難関校といわれているところの学生を採用するという、そういうことともつながっていたと思うんですが、最近はだんだんそのメッキがはがれたというか、それに近い現象も出てきています。雇用形態が日本でもかなり流動的になってきて、従来型ではなくなってきました。欧米の場合もともとそういう仕組みでありまして、欠員が

できたらその職種で優れた人を契約期間を定めて採るということになりますから、そうするとそのときにどれだけそのスキルを持っているかということが問われるわけで、それは年齢に関係なくです。まったく関係ないかどうかは別ですが。そうすると、絶えずスキルアップしている人でないと採用もされない。そうなればスキルアップする機会を提供する、大学等で学ぶ意味が非常に大きいということになります。

日本の場合は企業内教育でやってきたわけですけども、たぶんこれから先のことを考えますとそういう企業内でそういった教育というもの、まったくなくなるわけじゃないけれども以前に比べれば希薄になってくる可能性もある。雇用形態が変わってまいりますと外でどこかでしっかりしたトレーニングを受けて職業技術を持っていないとなかなか就職もできないということになってくるでしょうし、さらに企業内教育に委ねているかぎり、その企業にとっては役立つ人間であっても、どこのところへ行っても通用する知識・技術を持つということにはなかなかつながりにくい。

もちろん大学で学ばばそれがどこでも通用するんだということにはなりにくいかと思いますが、しかしそこに大学というものが加わることによって単に特定の企業に役立つ人間というのではない、ある種、横断的にその職業技術を行使する、そういうような人が育つ可能性は持っているわけであります。専門職はだいたい特定の企業だけで働くんじゃないで、横断的に動くようになっていきますから、大学がそういう教育として提供したものが生きてきているんだろうと思います。そういう分野が広がっていく可能性はあるだろうし、またそういう方向がこれから多くなってくるのではないだろうかということも考えてわれわれは見ていかなければならない。しかも職業技術を学ぶだけでなく、それが幅広い視野を伴ったものである必要があります。最近では企業なんかでもアイデアが勝負だから、あまり狭い考え方の人間では困るといわれています。むしろ多様な見方のできるような人を求めるようになっていく。ダイバーシティ・マネジメントなんていうような言い方で多様性を企業も考えていかないと発展性がないというので、いろんな種類の人といえますか。民族的にもいろんな人が入り混じる、あるいは男女が入り混じる、そういったかたちで人を採用していかないといけないんだという考えも強まっているわけですし、そういうことともつないで私たちはこの職業教育についても教養とインテグレートされたような知識・技術を身につけていただくような、そういう機会を考えていかなきゃならないことが課題として挙がってくるということです。もちろん日本の場合、専門学校等もありますので、そういうところが果たす機能もあるわけです。ただ日本の専門学校はほとんどが私立であり、営利的なものを無視してやるわけにはいかないところもありまして、だから今、私が申し上げたようなことが必ずしも十分できる体制にあるとも言えないところもあります。

それから、もう1つ考えておかねばならないのは、大学が生涯学習に関わるというときに、今、大学がとにかく取り組んできた専門教育をそのまま出せばよいのだと言い切れないところがあるということです。成人が対象であり社会人が対象であるということもあると同時に、今、大学自体が問われてきているのが、いわゆる科学知とか専門知というものがそのまま

いいのかということです。もちろん、それが駄目だということではなくて、それも非常に大事ななんだけどもっと人々の持っている生活知であったり経験知であったり、そういうものと接合を図らないと、今回の東北の大震災でもそういう場面がいくらかあるかと思うんですが、つまり人々の持っている知恵であるとか、あるいは生活の中で培ってきた知恵であるとか、そういうものと専門知、科学知とをぶつけ合うとか、あるいは重ね合う中で新たな知の開発もできる。医学の世界だって脳死の問題とか臓器移植の問題ということになると、専門的な見地だけではすまない判断が必要になってくるわけでして、そういうようなことも含めて考えた場合に、大学が生涯学習を人々の間で進めていくことに寄与するとするならば、やはりそういう生活知との触れ合いという中での自らの専門知、科学知を鍛え直すという面もあるでしょう。

あるいは民衆の持っているものをさらに洗練したものにしていくという課題も出てくるかと思うんです。そういうようなことも大学での生涯学習と言った場合には視野に入れなきゃならないことがあるだろうということです。そうやってまいりますと人々との触れ合いの機会ということが非常に重要になってくるわけでして、その辺が5ページあたりにも書いているところとつながってくるかと思うんです。自治体との共同の活動であるとか、いろんなものを書いているわけですが、必ず、大学の一方的な思いだけでなく自治体とのジョイントコミッティーみたいなものを作っていくとかも大切です。イギリスの成人教育でも先ほども言いましたチュートリアルクラスは、ジョイントコミッティー、つまり合同委員会のようなものを作って労働者教育協会からも大学からもスタッフが出て協議しながらやっていくという、そういう仕組みを整えていくことが有効だと考えられてきました。私が関係した兵庫県のオープンカレッジという取り組みをちょっと4ページの下の方にも書きましたが、これは兵庫県と大学とのタイアップで行ったもので、まさにジョイントコミッティーで、実行委員会という名前で運営を一切やってきました。大学の知恵と、自治体の持っているノウハウの接合です。自治体ですと住民との接点が、広報紙1つにしてもしっかりしたものを持っていますので、そういう中で、募集は県のほうでやる、それから会場提供とかスタッフ提供は大学のほうでやる、カリキュラム編成は両者が協議しながらというようなかたちでやってきたということがあります。今はちょっと形態がまた変わってきていますが、パイオニア的な役割を担ってきたということがございます。5ページの上の方には有名な淡海生涯カレッジというので、滋賀県の自治体と大学との連携を書いております。これは地域で学んだものをさらに高校で実験なんかを加えて深めていき、さらにその上に大学において理論的な学びをするというもので、環境問題が中心でしたが、その例もここに書いております。そういうようないろんな取り組みがまさにいろんなジョイントという観点で進められてきたものだと言っていいかと思うわけです。和歌山大学なんかになりますと、各地域に拠点のようなものを置いて、そして、すべてフルタイムの人とは言えないんでしょうけれども、生涯学習促進、あるいは地域との連携を促進するような役割の人を定めて置いています。ここにはノッテングラム大学のレジデント・チューターというものが例に挙げていますが、これ

は文字通りフルタイムの大学教員でした。ここまではなかなか難しいかと思いますけれども、地域でそういう生涯学習推進に当たって大学と地域の人々の懸け橋になるような人の配置も何らかのかたちで考えることができればいいんじゃないかということも思うわけです。

先ほどのところでもう申し上げてしまったところがありますが、5ページの下のところイリイチなんかを持ち出したりしております。イリイチはご存じの方も多いうに『Deschooling Society』という本を書きまして、要するに今、学校が独り歩きしてしまっていて、教育のための学校なのに学校のために教育があるようになってしまっているといっています。受験教育のために高校が機能を果たすみたいなところを考えれば確かに当てはまるようなところがあります。脱学校というのは少し極端としても、絶えず、新たにカリキュラムを再構築していくといいますが、そういう必要は高まってきている。どうしても制度化されますと、その制度がある種の硬直性を持って、手段が目的化してしまっている、ということがあります。

従来は手段であったものが目的になって、存続そのものが目的になってしまうものがある。それをどのように絶えず刷新していくか。刷新ばかりがいいのではなくて継続も必要なんです。絶えず点検していくようなことをしないと制度の独り歩きというような問題が出てきます。そういうことを考えることも生涯学習を視点に入れることによって、可能になってくるのではないかということも思ったりするわけです。そのようなことで、いろんなことをだらだらと並べているということとはございますけれども、当然、先生方がいろいろとご苦労なさっていることであるとか、この地域に則したことについてはまだここで十分触れるようなことはできておりません。そういうことも含めまして後の論議の中で一緒に考えさせていただいたり学ばせていただくことができればありがたいと思っている次第であります。どうも失礼いたしました。

## 第3回検討会（論点メモ）

## 第1回起草委員会からの論点

## 目的：憲章内容の大きな方向性の確認、その結果

- (1) 「地域」は重要なキーワードである。
- ・ 地域をどう規定するか
- (2) 「地域社会から自発的に出てきたものでもない大学」と「地域」との関係づくりが大事

## 主な論点：

- (1) 本学と地域との具体的な関係性を表現するキーワード、言葉
- ・ 一般論としての「地域とともに社会の発展に貢献する大学」や、大学生涯学習ではなく、鹿児島らしい個性を打ち出す。すなわち「鹿児島大学は地域と共にどう生きるのか、地域とどうかかわるのか・どう向き合うのか」（ほかと違う憲章、新規性を出す）。

具体的な関係	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現場と一緒に仕事・研究（共同研究）をやる ことが勉強になる</li> <li>・ その場に学生を連れて行くと学生も物凄く勉強になる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アクティビティ（活動）を高めていく</li> <li>・ プロジェクトを新しく作り上げる学び</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知の循環</li> <li>・ 自己変革</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロ同士（現場と大学）が学習し合うことが大切</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学の先生自身も自分を変える</li> <li>・ 学生が地域と対話し、交流する</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一つの具体的なテーマにしたがって議論をするやり方</li> <li>・ 大学のプロ集団が連携して生涯学習に対応していく（現場は総合的な技術を使って行う世界）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域の人がもっと大学を知る／大学をもっと使う</li> </ul>

(2) 実社会で働くときに役立つような高度で専門的な知識だけでなく、よりよく生きる、豊かにするような生涯学習力（⇔学習者が高度化した技能や考え方を深めて理解し、その技術を応用していけるような生涯学習的取組み）

- (3) 「あっ！これが生涯学習だ」と一語で象徴される言葉。
- ・ 学問分野からのキーワード

## 第2回起草委員会からの論点

### (1) 本学の生涯学習を定義するにあたり、踏まえるべき内容や論点について

講話「大学生涯学習の到達点とこれから」（上杉孝實京都大学名誉教授）

- ・生涯教育・生涯学習概念の形成史、および、その基本的内容（論点）
- ・日本社会に特有の生涯教育・生涯学習概念の受容と、特に大学における生涯学習の展開にみる課題と可能性

#### □講話のポイント

- ・3つの統合

青少年＋成人

学校＋学校外

職業＋学校（教養）

- ・概念をめぐる混乱：生涯教育／生涯学習
- ・フォーマル教育を生涯にわたって用意することが一番のポイント
- ・知をめぐって  
職業技術＋教養  
専門知・科学知＋生活知・経験知
- ・大学はもともと学習共同体で始まっていた

#### □議論のポイント

- ・やっていることの意味を「生涯学習」概念から捉えなす、位置づけなおす
- ・大学が実践に関わること
  - 「実践」をどう考えるか
  - パイオニア
  - 新たに得た知を還元する
- ・プラスアルファではない、本務である

## 鹿児島大学生涯学習憲章（案 ver. 1）130520

## ■前文（案）

われわれは先に鹿児島大学憲章を定めた。鹿児島大学はその憲章の精神を受け継ぎ、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学の実現に向けて、本学の生涯学習の理念をここに定める。

## ＜鹿児島大学の個性＞

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、南西に連なる島々とともに、海上の道の要所として多彩な文化を集積し、雄大で多様な自然の上に、厚みのある歴史を刻んできた土地に存立し、新しい時代を切り拓く力を備えた人物を育てる風土と教育的伝統を基盤に発展してきた。

## ＜時代認識＞

世界は今、激しい科学・技術の革新と激しいグローバル競争に見舞われ、日本においても国のかたちを根幹から揺るがす人口構造の変動が急速に進む。大学の歴史的本来の本質は、時代や社会の制約を免れ真理を探究する志向性にあるが、同時に社会的存在という側面を大学はあわせもち、大学の姿勢が問われている。

## ＜鹿児島大学の姿勢＞

鹿児島大学は、地域の知的拠点たる大学としての自覚をもち、成熟社会に向けて新たな社会像、地域像、大学像が求められている状況に鑑み、これまでの本学の歴史的蓄積を活かしつつ、大学と地域との新たな関係を紡ぎ、大学の自己変革を促す営為として生涯学習に取り組む。

## ■定義（案）

ここでいう生涯学習とは、すべての人の生涯にわたる学習機会を保障するために、大学を地域に開放し、教養と技術教育を統合した場を準備し、学習者が自己変容をとげる全過程をいう。同時に、大学及び大学人が、これらの実践や地域との交わりを通じて、研究と教育の新たな視点と意味を発見していくことをも意味する。われわれは、これらの相互作用の全体を、生涯学習と定義する。

ここでいう地域とは、大学を取り巻く人々の暮らしや生業（なりわい）、意識の総和としての現場であり、同時に、歴史が形成した文化、および、そこに存する自然のすべてをいう。

■鹿児島大学生涯学習の基本方針（案）

1. 鹿児島大学は、制度化された公的な高等教育機関として、青年期の者を対象とした教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障することを基本的責務とする。

2. 鹿児島大学は、職業教育と教養教育の分離を克服し、統合することを尊び、専門技術だけではない幅広い視野と深い造詣を備えた職業人教育とともに、激動の時代を他者とともに主体的に生きていくための教養教育の機会を用意し、地域を積極的に応援する。

3. 鹿児島大学は、地域との対話と交流を重視し、大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知と相互に重ね合うことで、自らの専門知と科学知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにするすることで、知の開発を進め、広く社会に還元していく。

6月1日ワークショップ前の臨時  
鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会（メール会議）



**6月1日ワークショップ前の臨時  
鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会（メール会議）**

■日時：5月21（火）～5月28日（木）

■協議内容：

第3回鹿児島大学生涯学習起草委員会の検討会結果を踏まえて、5月23日（木）と5月24日（金）に開催するファシリテーション事前会合に提示する憲章案（憲章骨子）の確定、並びに、6月1日のワークショップに提示する骨子案の確定

■関係資料

- （1）第3回鹿児島大学生涯学習起草委員会議事要旨（案）
- （2）鹿児島大学生涯学習憲章案 ver. 2（130521）
- （3）5月22日現在、起草委員から憲章案 ver. 2に対する意見
- （4）鹿児島大学生涯学習憲章案 ver. 3（130523）
- （5）鹿児島大学生涯学習憲章案 ver. 4（130528）

※5月23日と24日のファシリテーション事前会合の結果を踏まえて

**平成 25 年度 第 3 回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨**

■日時：平成 25 年 5 月 20 日（月）16:00～18:00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室（共通教育棟 1 号館 4 階）

■素案起草委員：岩元教授（農学部兼生涯学習教育研究センター）、小栗准教授（生涯学習教育研究センター）、酒井講師（生涯学習教育研究センター）、木村教授（水産学部兼社会貢献担当学長補佐）、前田准教授（教育学部 附属教育実践総合センター）。

■委員外出席者：油原部長（研究国際部）、枚田准教授（農学部）、金子准教授（教育学部）、安楽教授（水産学部）以上。（順不同）

■委員会の流れ：

1. 起草委員長である岩元教授から、挨拶があった。
2. 小栗准教授から、第 1 回検討会・論点メモ、第 2 回検討会・論点メモの確認がなされた。
3. 小栗准教授から、第 3 回検討会として、起草（案）の前文・定義・方針に関して説明がなされた。主な意見は下記のとおりである。

・「知」について

木村委員から生涯学習憲章に明記されている知の議論に関して生活知・経験知・暗黙知を洗練させる営みを大学が行う必要があるとの指摘があった。

前田准教授から、知の議論では民主的な社会や平和な市民生活をつくるといった、ある種の「価値」が提案されたのではないかと、という指摘があった。

小栗准教授から、今は知を還元するところにとどまっているので、知を還元することでどうしていくのかと考えた際に、憲章に描かれている新しい地域、社会、大学像と結びつけて考える必要性が指摘された。

・わかりやすさについて

岩元教授と油原部長から、生涯学習憲章はそもそも誰に読まれるものなのか、その憲章における主体は誰なのか明確にする必要があるとの指摘があった。また、憲章を全体的にシンプルに分かりやすくする必要があるとも指摘された。

それに対して小栗准教授から、まずは鹿児島大学の人間が「鹿児島大学の生涯学習は〇〇です」と語り、学外の人もそれを理解できる内容だと説明がなされた。

#### ・生涯学習憲章の独自性について

前田准教授から、大学憲章と生涯学習憲章の関係性と生涯学習憲章の独自性を考える必要があるとの指摘があった。

小栗准教授から、「地域と共に発展する大学」ことが具体的に何を意味するのか考え必要があるとの指摘があった。

#### ・地域の個性について

岩元教授と木村教授から、定義に明記されている生涯学習憲章の地域性について、大学憲章にも鹿児島大学の地勢的特徴が書かれているのであえて言及する必要があるのか、という問いがあった。

酒井講師からは、鹿児島の地域性は基本方針に入れる方が分かりやすいとの指摘があった。また、カントの「諸学部の争い」における社会的有用性の上級学部と、理性の自由を下級学部による弁証法的関係を踏まえて宗教や社会によって大学は常に規定され続けてきた例を踏まえ、敢えて前文3段落目の（時代認識）において、歴史的認識・社会的認識について言及しない方が良いのではと指摘があった。

その一方で前田准教授からは、「厚みのある歴史」「多彩な文化」として地域像が厚みを持って描かれていることと、また地域の定義と基本方針を突き合わせることが重要だとする指摘があり、地域性を規定する必要性が指摘された。

小栗准教授から、大学憲章に足りない部分を補完する形で地域性を説明したい、との要望があった。

#### ・生涯学習憲章の性格と盛り込むべき内容について

前田准教授から、生涯学習憲章として本学で取組まれている生涯学習実践を拾い集めフォーマルな生涯学習としての具体像を描くのか、もしくは生涯学習の価値論や指針にまで踏み込んで議論するのか整理する必要があるとの指摘があった。また、「地域と共に」の「共に」の部分を理解する必要性と、地域と知に関する関係の転換を踏まえるのであれば、憲章は何かの宣言というよりは、日々の仕事を生涯学習の観点から編成する時の指針的な位置づけになる役割を担っていると言及した。大学が行う形式的な生涯学習を生涯憲章で述べるのであれば、敢えて定義を行う必要はない、との指摘もなされた。

枚田准教授から、前文の（時代認識）に関して、大学が社会的存在であることを前に出さないと一般論すぎるとの指摘があった。また、文章全体を短くした方が分かりやすいとの指摘があった。

岩元教授から、大学の社会的存在に関連し、生涯学習の定義と大学の定義の両方をす

る必要があるのかという問いがなされ、大学憲章のように柱を決めていく議論を行った方が良いのではとの提案があった。

#### ・表現方法について

木村教授から、前文の2文は最後に来るのが適当との指摘があった。

岩元教授と油原部長から、生涯学習憲章は「責務とする」といった表現や抽象的な言葉は用いずに、「教えるだけではなく地域の人から学ぶ」という姿勢を明記したうえで、市民の人が憲章を読んで、鹿児島大学に行ってみたいと思えるような内容が良い、との指摘があった。また、岩元教授から学生教育にも触れたい、との要望があった。

#### ・ワークショップに向けて

最後に、小栗准教授から、6月1日のワークショップで掲示する内容について確認があった。

木村教授から、ワークショップには多様な人が参加するので分かりやすい言葉で憲章を説明する必要があり、ワークショップでは、具体的な議論を踏まえて分かりやすい言葉が出てくるので、それを拾い上げる必要性があるとの指摘があった。

以上の木村教授による意見を踏まえ、小栗准教授から、具体的な実践から積み上げることによって、憲章の文章が「そういう意味だったんだ」と分かる様になり、また多様な取組みが点でバラバラにあるだけでなく、それを束ねるのが生涯学習憲章の文章だと認識しているとの説明があった。また、ワークショップでは本生涯学習憲章を加筆修正したものを提示するとの説明があった。変更された憲章の内容についてはメールで対応するとの連絡があった。

#### ・その他の意見や要望

金子准教授から、今地方大学の地域貢献は命題であり、知に関する議論も頻繁になされているので、地方だからこそ最先端といった、既存の枠組みにとらわれない前向きなチャレンジをしてほしい、との要望があった。

安楽教授から、生涯学習憲章策定の趣旨もだんだん理解でき、解釈や言葉の問題だけが整合しないのかなという印象が語られた。また、水産学部の教員がやっている履修プログラムや国際研修はボランティアとしての扱いだったが、これらが生涯教育の一環として位置付けられることに対して大きな希望を持っている、との発言があった。

## 鹿児島大学生涯学習憲章（案 ver. 2）130522

## ■前文

鹿児島大学は、先に定めた憲章の精神を受け継ぎ、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学として、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を通して、成熟社会に向けて新たな社会像、地域像、大学像を獲得していくことをめざす。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地に存立する。そこでは、多様で厳しい自然のなかで、たくましく人びとは生き、知恵を継承し、厚みのある歴史が刻まれてきた。

地域のもつ生活知と経験知は、大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫である。現場の人と教員、学生、職員がともに学び合い、教え合う関係から互いが成長し、知の循環を促すことが、激動の時代を地域とともに歩む、知的拠点としての大学の姿である。

## ■定義

ここでいう生涯学習とは、すべての人の生涯にわたる学習機会を保障するために、大学を地域に開放し、教養と技術教育の場を準備し、学習者が成長していく全過程をいう。同時に、大学及び大学人が、これらの実践や地域との交わりを通じて、研究と教育の新たな視点と意味を発見していくことをも意味する。われわれは、これらの相互作用の全体を、生涯学習と定義する。

ここでいう地域とは、大学を取り巻く人々の暮らしや生業（なりわい）、意識の総和としての現場であり、同時に、歴史が形成して文化、および、そこに存する自然のすべてをいう。

## ■鹿児島大学生涯学習の基本方針

1. 青年期の者を対象とした教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障する。
2. 職業教育と教養教育の分離を克服し、統合した教育の機会を用意し、地域を積極的に応援する。
3. 大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知とぶつけ合い、学問知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにする。そのことを通じて、知の開発を進め、社会に広く還元していく。
- 4.
- 5.

鹿児島大学は、ここに生涯学習の理念を定め、これらの実現に向けて大学の総力を結集する。

## 5月22日現在、起草委員から憲章案 ver. 2に対する意見

## (岩元委員長)

- 1) 学生の生涯学習をもっと入れたい感じがります。
- 2) 違和感を覚える言葉：「青年期の者」、「職業教育と教養教育の分離を克服し、統合した教育」、「地域を積極的に応援します」
- 3) 構成・イメージに対する意見：「生涯学習を推進します、〇〇に学びます」という流れ、定義は削除

## (酒井委員)

- 1) 地域の個性あり ver で。
  - 2) 全体構成としては特にありません。
- ただし、方針3にある知識論に関しては、もっとよりよい言葉を紡ぎたいと思う。

## (築瀬委員)

- 1) なかなか難しいのですが、「地域の個性あり」案の方が、大学が行う生涯教育の私のイメージと合致するようです。
- 2) やはり大学は「知的拠点」であるということはきちんと押さえるべきで、その上にこれまで大学が蓄積した知に地域の持つ生活知と経験知を加え、住民、教員、学生、職員が成長し合う知の循環ができあがるという論理が良いのかと思います。

## (木村委員)

- 1) ver2 は、解り易いと思います。また、小栗先生らしい表現もあり、読むと、気持ちが前に出ているなと思います。(例えば、“ぶつけ合う”など) ただし、言葉を選ぶ、あるいは整理する必要がある(現場と地域など)かなと思いますが、推敲している時間はありません。
- 2) ファシリテータの方には、現段階の検討状況を説明し、ご理解いただけるものと思います。(両書類の呈示もかまわないのでは。)

## (前田委員)

- 1) 「地域の個性あり」の方がいいと考えます。理由は、(1)大学憲章には十分に書かれていない地域についての規定であること、(2)一般的な生涯学習ではなく鹿児島大学の目指す方向性を明示していること、の二点です。
- 2) 「前文」の第一段落は、目的をより焦点化するため、「大学と地域をつなぐ営みである」と「社会像、地域像、」は削除してもいいのではないかと思います。前者については定義等でも書かれていること、後者は「大学像」に焦点化して示すことで十分ではないかと考えられることが理由です。

## 鹿児島大学生涯学習憲章（案 ver. 3）130523

## ■前文

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学として、先に定めた憲章の精神を受け継ぎ、生涯学習を通して、成熟社会に向けて新たな大学像を獲得していくことをめざす。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地に存立する。そこでは、多様で厳しい自然のなかで、たくましく人びとは生き、知恵を継承し、厚みのある歴史を刻んできた。

地域のもつ生活知と経験知は、知的拠点である大学が、これまで蓄積してきた知を鍛え直す土壌であり、大学及び大学人に、新たな知的発見をもたらす宝庫である。地域の人々とともに大学の教員、学生、職員が、互いに学び、教え合うことで成長し、知を磨き、学ぶ喜びをすべての人と分かち合うが、

## ■定義

ここでいう生涯学習とは、すべての人の生涯にわたる学習機会を保障するために、大学を地域に開放し、教養と技術教育の場を準備し、学習者が成長していく全過程をいう。同時に、大学及び大学人が、これらの実践や地域との交わりを通じて、研究と教育の新たな視点と意味を発見していくことである。われわれは、これらの相互作用の全体を、生涯学習と定義する。

ここでいう地域とは、大学を取り巻く人々の暮らしや生業（なりわい）、意識の総和としての現場であり、同時に、歴史が形成して文化、および、そこに存する自然のすべてをいう。

## ■鹿児島大学生涯学習の基本方針

1. 青年期の者を対象とした教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障する。
2. 職業教育と教養教育の分離を克服し、統合した教育の機会を用意し、地域を積極的に応援する。
3. 大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知とぶつけ合い、学問知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにする。そのことを通じて、知の開発を進め、社会に広く還元していく。
4. 学生について
- 5.

鹿児島大学は、ここに生涯学習の理念を定め、これらの実現に向けて大学の総力を結集する。

## 鹿児島大学生涯学習憲章の考え方（案 ver. 4） 130528

## ■前文

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学と定めた、大学憲章の精神を受け継ぎ、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していくための大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地に存立する強みを生かして、生涯学習を全学で取組みます。そこでは、多様で厳しい自然のなかで、たくましく生きてきた人びとの知恵を継承し、厚みのある歴史に学びます。

地域のもつ生活知と経験知は、大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であるとの認識のもと、現場の人と教員、学生、職員がともに学び合い、教え合う関係から互いが成長し、知の循環を促し、学ぶ喜びを分かち合っていくことが、知的拠点としての鹿児島大学の目指す生涯学習です。

## ■定義

ここでいう生涯学習とは、すべての人の生涯にわたる学習機会を保障するために、大学を地域に開放し、教養と技術教育の場を準備し、学習者が成長していく全過程を意味します。同時に、大学及び大学人が、これらの実践や地域との交わりを通じて、研究と教育の新たな視点と意味を発見していくことも含みます。わたしたちは、これらの相互作用の全体を、生涯学習と定義します。

ここでいう地域とは、大学を取り巻く人々の暮らしや生業（なりわい）、意識の総和としての現場であり、同時に、歴史が形成した文化、および、そこに存する自然のすべてを意味します。

## ■鹿児島大学生涯学習の基本方針

1. 青年を対象とした教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障します。
2. 職業教育と教養教育の調和が保たれた教育の機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人々が、共に支え合い、暮らしていけることを支援します。
3. 大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知とぶつけ合い、学問知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにします。そのことを通じて、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。
4. 鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 地域に根ざし、地域に貢献する鹿児島大学の生涯学習活動を通して、世界に発信できる「知の拠点」の形成を目指します。

鹿児島大学はここに生涯学習の理念を定め、これらの実現に向けて大学の総力を結集します。

第2回ファシリテーター（分科会1 & 2）

第4回起草委員会 合同会合

第4回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



## 第2回ファシリテーター（分科会1＆2）

### 第4回起草委員会 合同会合

■日時：6月6日（木）13：00～15：00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：別紙

#### ■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長
2. 自己紹介
3. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの報告  
…資料1、資料2 資料3
4. 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップ 各班の成果確認  
(1) 班活動のアウトプット：期待と結果（憲章の検討＋具体的な提言）  
(2) ファシリテーターとしての所見
5. 鹿児島大学生涯学習憲章（案 ver.5）の提示と意見交換 …資料4
6. 今後のスケジュール …資料5

#### ■配布資料

- |     |                                |
|-----|--------------------------------|
| 資料1 | 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの成果      |
| 資料2 | 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップのアンケート結果 |
| 資料3 | 新聞記事等                          |
| 資料4 | 鹿児島大学生涯学習憲章（素案）※解説メモ付          |
| 資料5 | 今後のスケジュール                      |

## ファシリテーターの出席名簿

No	分 科 会	班	参加枠	氏 名	所 属	職名	出欠
1	1	1	地元	牟田 京子	モノづくり工房"響"		○
2		2	教員	李 哉ヒョン	農学部	准教授	×
3		3	教員	伊藤 奈賀子	教育センター	准教授	○
4		4	地元	志賀 玲子	志學館大学 法学部	准教授	○
5		5	理学部	西尾 正則	大学院理工学研究科（理学系）	教授	○
6		6	外部講師	亀野 淳	北海道大学高等教育推進機構	准教授	×
7	2	1	外部講師	西原 亜矢子	新潟大学大学院保健学科研究科	講師	×
8		2	地元	大迫 香寿枝	Coaching STEP 代表・岳の学び や代表		○
9		3	教員	寺岡 行雄	農学部	教授	×
10		4	教員	桑原 季雄	法文学部	教授	○
11		5	教員	福満 博隆	教育学部	准教授	×
12		6	教員	佐久間 美明	水産学部	教授	○

## 起草委員会 出席名簿

1. 生涯学習教育研究センター長 岩元 泉 教授
2. 生涯学習教育研究センター 専任教員 小栗有子 准教授
3. 生涯学習教育研究センター 専任教員 酒井佑輔 講師
4. 生涯学習教育研究センター 運営委員 築瀬 誠 医学部保健学科教授（本日欠席）
5. 社会貢献担当学長補佐 木村郁夫 水産学部教授
6. 大学開放事業（公開講座・公開授業等）実施教員 前田晶子 教育学部准教授

## 鹿児島大学生涯学習憲章（案 ver. 5）130606

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学と定めた、大学憲章の精神を受け継ぎ、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地に存立する強みを生かして、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していける生涯学習を全学で取組みます。そこでは、多様で厳しい自然のなかで、たくましく生きてきた人びとの知恵を継承し、厚みのある歴史に学びます。

地域のもつ生活知と経験知は、大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であるとの認識のもと、現場の人と教員、学生、職員がともに学び合い、教え合う関係から知の循環を促し、学ぶ喜びを分かち合い、お互いが成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学の目指す生涯学習です。

※地域から世界へ、世界から地域への双方向を踏まえて

鹿児島大学は、地域と世界を結ぶグローバルな視野に立って、生涯学習を組織的に進めるために、次の方針を掲げます。

※組織の問題や組織的に取り組むことの必要性に応じて

1. 青年を対象とした教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障します。

※社会人学生の多様なニーズ、3つの類型を踏まえて

2. 職業教育と教養教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人々が、共に支え合い、暮らしていけることを支援します。

3. 大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知とぶつけ合い、学問知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにします。そのことを通じて、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。

※学生の主体性を保障することの大切さを踏まえて（分科会1の基調）

4. 鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学生の主体性を支援、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。

5. 大学及び大学人が、地域との相互理解を深める機会を促進するとともに、大学職員のキャリア形成を支える環境を積極的に整えます。

※お互いのニーズをよく理解し合うこと、及び、

職員のキャリア形成の重要性にかんがみて

鹿児島大学は、ここに生涯学習の理念を定め、これらの実現に向けて大学の総力を結集します。

## 第4回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：6月6日（木）13：00～15：30

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：別紙

### ■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長
2. 鹿児島大学生涯学習憲章（案 ver.5）の検討と鹿児島大学生涯学習憲章第1次案（案 ver.6）の作成
3. 今後のスケジュール

### 第4回起草委員会の成果

#### ■関係資料

- ・平成25年度 第4回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会と6月1日ワークショップファシリテーター合同会議議事要旨

#### ■第4回起草委員会成果資料

- ・鹿児島大学生涯学習憲章 第1次案（案 ver.6）

平成25年度 第4回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会と  
6月1日ワークショップファシリテーター合同会議議事要旨

■日 時：平成25年6月6日（木）13:00～16:00

■場 所：生涯学習教育研究センター演習室（共通教育棟1号館4階）

■出席者：岩元教授（農学部兼生涯学習教育研究センター）、小栗准教授（生涯学習教育研究センター）、酒井講師（生涯学習教育研究センター）、木村教授（水産学部兼社会貢献担当学長補佐）、前田准教授（教育学部 附属教育実践総合センター）、伊藤准教授（教育センター 高等教育研究開発部）、牟田氏（モノづくり工房”響”代表）、志賀准教授（志学館大学 法学部）、西尾教授（大学院理工学研究科）、大迫氏（Coaching STEP 代表・岳の学びや代表）、桑原教授（法文学部）、佐久間教授（水産学部） 以上。（順不同）

■合同会議の流れ

議 題

1. 起草委員長である岩元教授から挨拶があった。
2. 小栗准教授ならびに酒井講師から、配布資料に関する説明があった。
3. 6月1日ワークショップについての意見（敬称略）

- ・ワークショップの部屋は広い方が良かった、各班の議論方法を事前に議論しても良かった。（佐久間（分科会2 6班））
- ・限られた時間で様々な話題が詰め込まれていたため、休憩時間や他分野の人をつなぐ時間、事例報告等のつながりが事前につくりこめれば良かった。（大迫（分科会2 2班））
- ・ワークショップの議論へつながるような事例報告があれば良かった。（西尾 分科会1 5班）
- ・色んな人が自由に意見を発言できたので良かった。最初に目標としていたことはできたが、まとめの時間がなく、尻切れトンボになってしまった。両分科会で議論した思いを共有できる時間があれば良かった。（木村）
- ・話したいことが多く時間の足りなかった参加者がいた。会場が混雑していたため聞き

取りにくく、ゆったりとした場所で議論をできた方が良かった。(桑原(分科会2 4班))

- ・班内の議論は盛り上がったものの、学生にとって本当に必要な力を自分たちが考え議論することと、生涯学習との関係性を全員が腑に落ちる状態にもっていけなかった。参加者数が多かった。(伊藤(分科会1 3班))
- ・ファシリテーター間で、生涯学習がすべてを包括する概念であると共通項としてあればやりやすかった。分科会ではバランスよく言いたいことも言ってもらえ楽しい空間になった。ワークショップの時間が1時から5時で長時間なのに、これだけのメンバーを拘束するのは難しい。このような取り組みは鹿児島県内初であり、生涯学習に関する核となる一歩を踏み出したのはすばらしかった。(志賀(分科会1 4班))
- ・分科会全体で議論をした後すぐに発表だったので、考えをまとめることができず、参加者に重要な点を確認できなかった。意見が出すぎてどこにポイントをあてて発表すれば良かったのか分からなかった。席が遠く聞きづらいこともあり、聞き直すことが多かった。人数配分に問題があった。(牟田(分科会1 1班))
- ・4班職員チームによる学生のロールモデルとしてキャリア教育に積極的に関わりたいという思いは非常に感銘を受けた。時間があれば各班の意見を交換できればと思った。学部によって学生が鹿児島に残るものとそうでないものとに分かれるため、鹿児島で学生を育てるという位置づけがどの分野の先生においても重要であり、大学教員としての地域の捉えかたが課題だと思った。(前田)
- ・少しでも前向きな意見がでて議論ができたのは良かった。みなさんにはご迷惑おかけしたが、実施して良かった。ご指摘いただいた点は真摯に受け止めて憲章または課題提起としてこちらで引き取りたい。(酒井)
- ・ワークショップはファシリテーターなしでは成り立たなかった。いただいた反省点を次へどうつなげるか、ということが大事。「次回はこうしよう」という意見がでたことは次回につながるので、これをスタート地点にして次にすすみたい。(小栗)
- ・非常に充実したワークショップであった。外から見ていて狭いというのは感じた。(岩元)

#### 4. ワークショップの成果速報についての確認

- ・小栗准教授から、配布資料に基づいて各班の議論のまとめについての説明があった。

#### 5. 憲章の検討並びに鹿児島大学が取り組む生涯学習に対する具体的な提言

- ・班の学部には所属する先生2名は学部外の活動に比較的積極的だった。どの先生が学生を地域へ連れて行くのかよく分かっていないので、学内で活動をつなげる、情報を共有する場所も必要。学生を地域に連れて行くには責任・リスクもあり。地域へ出て行く際、誰にアポイントをとれば良いのか。どこで情報が得られるのか。学内外で分か

らないため、HP 等で分かるが良い。(牟田 (分科会 1 1 班))

- ・具体的な内容として費用とカリキュラムの問題が指摘された。カリキュラムに関しては、現場に学生を連れて行く・行かない先生の立ち位置がバラバラ。学生が低学年の場合、連れて行く時間を確保するのに苦労する。集中講義だと良いかと言えば、制度上受けられないということがどうしても出てくる。積極的に連れて行こうと意欲のある教員がもう少し取組めるようにカリキュラムに反映できないか検討する必要がある。また、高校生の意識のまま大学へ入学した学生が多いので、その学生に「意識を変えない」と自覚できる場を用意する必要がある。そのためには社会との接触が重要であり、そういったことが柔軟にできると良い。(伊藤 (分科会 1 1 班))
- ・学部 1 年生と学生憲章を読んだら 3 班の議論も入っている。そこをうまく使いながら生涯学習のところで学生教育を生涯学習憲章で位置づけると良いと話を聞いて思った。(前田)
- ・学生教育については憲章の 4 番で取り上げているが、生涯学習憲章でフォローできているのか疑問。(岩元)
- ・「学生の主体性を支え・・・」とあるが、主体性のある学生が少ない、という問題意識が教員にある。そもそも主体性があれば支えられるが、実際にあるのか？という学生が目につく。(伊藤 (分科会 1 3 班))
- ・「自学自習」と前田学長が仰っているが、チームを組んで真剣に実施する必要がある。(木村)
- ・「学生第一」と言うが、学生と全く接しないところはどうしたら良いのかが課題として挙げられた。「甘やかし」となると依存型キャリア形成になってしまう。甘やかしは良くないが、学生のためにある教育機関だという理解をすべき。また、鹿児島大学に入学し卒業して良かったと学生が最終的に思えるよう職員も尽力すべきという意見もあった。生涯学習憲章との関連で、生涯学習事業や取り組みを支える部分は事務職員であるため、具体的な提言は運用面に関わってくる。こういうワークショップに参加する先生方が現場に出て、フィードバックしていくことが重要である。あえて言えば、リスクを負いながらも動いている教職員を重視し、鹿児島大学が動いていけたら県内全体も盛り上がっていく。また、他部署の職員同士、他大学の教員、異質な部分と接触すればするほど生涯学習の理念に近づいていくのではないか。(志賀 (分科会 2 3 班、))

・担当した班の参加者は大学院生が多く研究が主体で「生涯学習」というキーワードで括りづらい。学部生レベルだともっと広く生涯学習に関われるが、大学院レベルは難しい。生涯学習の提案を基に考えると、サポートしている学生の方が生涯学習に関わっているかもしれない。来ている学生は先生に勧められた、一般的に言えば先生たちとコミュニケーションがとれて成績の良い学生が多い。そうした学生に生涯学習の位置づけ等をきくと希薄に感じる。憲章を基にして「これが生涯学習だ」と具体的に提示し、それが自分たちにとってどういう意味があるのを伝えることができれば根拠づけになる。そういう点でも本憲章には賛成。憲章素案の内容はこれで良いのではないか。他の箇所にも出てきたが、学生が多様で全員が生涯学習に関わりなさいというのは無理。違うことをやりたい学生もいる。ワークショップに参加した学生がまとめた「学生が教員を選べるシステム」という文言は何の事だか意味が分からないが、彼らが言うにはそういうことを積極的にしている教員していない教員両方がおり、システムによっては、研究室へ配属される際に成績順等で不本意で研究室を選べないという現状がある。

・「オープン・キャンパスの評価」とは、学生が一般人とやり取りをする中で自分たちに関わるという考え方であり、関わっていくのは良い。(西尾 分科会1 5班)

・多様な経験を積んだ社会人が大学にくると教えるもの、教わることが多い。普通の大学の授業とは異なり、質問の内容が多岐にわたる。共同研究の発表の場ではあるが、学習の場でもあり、彼らから得ることは多い。大学で専門の人と地域の人とで学習の場を作るとなった場合に大学はチームとして動く必要でくるため、大学内でチームを組んで生涯学習に取り組まないといけない。生涯学習に取り組むということは、真剣にする必要があり、大学の授業を公開するというレベルではない。課題を絞り込み彼らが知りたいことをやる場を設ける必要がある。公務員、地方行政者も世の中に出てからますます勉強したいという意志を持つ人が増えている。専門分野は特に学びなおしが必要。自分のスキルアップということで意欲のある人間は沢山いる。

(木村)

・若い職員を中心に構成された班で采女先生のみ世代が異なっていた。参加者の印象としては「言いたいことを言った」である。ワークショップのような場がなければ、言いたいこと望んでいたことを認識できなくなることがある。まずは語ってもらおうということで、2-3人で自分の言葉で語る時間を設けたが、ストレートで若さにあふれる表現になっている。大学で働くなかで職場への愛着は形成されていく。そうでない外部の人が入ってくると、自分たちの積み重ねたものがあるのに自分のキャリアの流れが分からなくなり見失う。それをどうするかがメインのテーマだった。キャリア形成を扱う中でのポイントは「働き甲斐」。働き甲斐が向上すると大学運営そのものに

良い影響を与えるのではないか。「生え抜きで局長になる」という発言の真意としては、長年勤めてきた人間が活用されずに外部からというのはやる気を削がれる。

議論の後に寺岡先生と話した内容として、若い職員たちは周りからどう見られているのか。職員の関係の中でどんな意見があるのかということまで考えないと、キャリア形成の議論は不十分かもしれない。なお、キャリア形成していきたい気概のある職員とそうでない職員の間に温度差があり、その温度差の解消がされていない。職員のキャリア形成で言うと、公開講座や講演会は、教員は自由に行けるが職員は許可を取らないといけない。大学で生涯学習の場があるのにそれを活かさない、職員が自由に参加できないのは課題である。参加したいという意識が評価されないことも問題。(大迫 (分科会2 2班))

- ・教員には時間はないというが、社会人もない。高校の先生は平日仕事。大学院は昼間開講されるがゆえに、土日に別に時間をとって対応しなければならない。土日しか時間がないが、普通のカリキュラムでは難しい。学位・資格を求めている学生、専門的なことを学びそれを職場に活かしたい学生、知的好奇心を満たす学生。目的が多様なのでそれに見合った対応は難しい。そういう専門の学生と向き合う・対応するようなコーディネーター・スタッフが必要。(桑原 分科会2 4班)

- ・メンバーは市町村の職員。2, 3年おきに職場が変わるので周りの人に聞くほかない。それが本当に良いやり方なのか。大学でいろいろ教えてもらえると良い。そうすると生涯学習によるキャリア形成も考えられるのでは。卒業研究等で地域に入ってくれる人がいたら嬉しい。それが共同研究となり、その成果を地元へ還元することができる。生涯学習憲章との関係として、自治体だけではなく、リタイアしている人たちもすれば学生にも刺激になる。つまり、憲章・規程の解説版がある。それを踏まえて、別の文章であると幅広い対応であることを見せることができる。憲章の解説で説明することができればなあ。(佐久間 (分科会2 6班))

## 6. 憲章内容の確認 (ワークショップを受け手直したものが資料4 (素案 ver.5))

- ・学生の主体性と自主性は学生チームからも出ていた。それだけだと分かりにくい。学生の主体性、学びの主体性という言葉を入れないと難しい。高校時は学びの主体性が制限されてきた。彼らの学びに対する主体性をはぐくむ必要性。(前田)
- ・学生の主体性、ではなく学びの主体性に変更するが良い。(佐久間)

- ・キャリア形成という言葉の印象もあんまりよくないという参加者が多い。職業経験、職務技能と置き換えたらスムーズになるのではないかな。キャリアだと差別的な印象を受ける人もいた。この表現をどうするかが重要で検討事項である。(大迫)
- ・「鹿児島大学生涯学習憲章のターゲットは誰か」というのは、ワークショップでも議論になった。例えば生涯学習憲章も学生を含めた一般の人を対象となると変わる。それで大学も変わるという。宣言している部分、生涯学習をしたい人はどうぞ、という・・・大学が変わるんだというのは同じなのか違うのか。など明確にしておかないと生涯学習憲章の発信先が異なる。大学が変わるといふ、一般の人へのアピールにも繋がる。(木村)
- ・憲章の文言について、大学人にいえば、職員のみと言及しており、教員は変わらないのかということになる。(佐久間)
- ・「大学人」の中には教職員両方入っているにも関わらず、「大学職員の」と出てくるのは違和感・唐突感がある。職員も重要だとすると言い方を考える必要がある。(伊藤)
- ・教職員のキャリア形成でピンとくれば良いが。(小栗)
- ・そもそも教員自身が「キャリア形成」をあまり考えていない。(伊藤)
- ・男女共同参画や女性教員・非常勤職員におけるキャリア形成はある。(前田)
- ・教員のキャリアと生涯学習は結びつきにくい。(西尾)
- ・思いとしては、生涯学習をするということは大学自体も大きく変わる必要がある。そういう宣言の場にするというのがこの憲章策定の目的の1つ。(木村)
- ・憲章において、大学が「一緒にやりましょう」というメッセージは、木村先生はどこで読み取ったのか(小栗)
- ・知のぶつけ合いの文言を通じて分かる。生涯学習の位置づけを大学として明確にする宣言。  
そうしたことを明確にしておかないと「大学憲章は誰に向けたものなのか」という点で質問が出てくる。(木村)
- ・学生憲章であれば対象は学生。生涯学習憲章は大対象大学だけではない。そこは意識しておかないと、必ず議論点となる。(木村)

- ・提起は消した。提起の中に相互作用の全体、という文章を入れた。そこは説明する際に工夫しないといけない。(小栗)

前文の2段落目。誰が新しいイメージを獲得するのか。わたしは講師の先生にもあった通り、大学という場所に限定して大学自体が変わるということで焦点化し議論しても良いと思う。(前田)

- ・3段落目のお互いの成長していくことが鹿児島大学の目指す生涯学習だと言える。その目標を達成するための方針がある。そうすると両方に関わってくる。(佐久間)
- ・大学憲章と並んで1－5すべて「鹿児島大学は」と入れてある。「鹿児島大学は」と入れた方が良い。(岩元)
- ・「鹿児島大学は」と入れることによって、木村先生の疑問は解決するのか？(小栗)
- ・5番目のところに違和感を覚える。言葉自体が一般的じゃない。生涯学習に取り組むために、大学自体が変わる、「これまでとは異なった取組みを始める」ということの方が、生涯学習をきちっととらえて異なった形ではじめるという方が良いのではと感覚的に思った。(木村)

- ・酒井さんと話していたが、職員は必ず落ちる。職員は絶対でてこないで、これまでの大学論自体の新規性で入れたものの、位置づけをどうするかが難しい。(小栗)
- ・大学憲章は一般的なもの。その中にキャリア形成という言葉自体が突然出てくると不自然ではないか。生涯学習憲章とは一般的で色んな方が読む。その時に、大学の課題が入ってくると少し違和感がある気がします。憲章は誰向けに出ていますか、ということ。(木村)

- ・我々の宣言が学内向きでないとすると、誰を対象とするか。5番目は大学職員「の」というのは、自分が受ける方ではなく、職場を移動しても生涯学習の方向の話かと誤解していた。今の議論をきくと、むしろ、プレーヤーとしての大学職員の位置づけがあった方が良いと思う。(西尾)。
- ・1～3は鹿児島大学の生涯学習のスタンスを示している。4, 5は「学生」「職員」と特化され階層が異なる。(伊藤)
- ・4, 5は一般の人が読むと分からない。4, 5は解説へ充実する方が相手も理解しやすい。(佐久間)

- ・1の頭と5の最後が重なっているなのでそれを統合する必要性。4段落目の「鹿児島大学は、地域と世界を結ぶグローバルな」というのと、最後の「鹿児島大学はここに を定め」が重なっている感じがするので、どちらかに統合する必要性がある。「鹿児島大学の教職員は生涯学習の理念を共有し地域と世界を結ぶ視野にたって・・・」と、こ

の主語の中に教職員を入れて5をとる。4の学生に関しては、学生憲章との整合性を意識してほしいという執行部の話を踏まえてここに入れたので、これは入れていても良いかもしれない。(岩元)

- ・教員職員は同等でも良いが、学生は対立する別物だと思われるのでは。学生たちが生涯学習に携わることの意義はあっても良いのでは。外から見た時に我々はどうかとえられているか、という視点を冷静に分析する必要がある。(西尾)

具体的な文言に入れる話で言うと、「鹿児島大学は教職員・・・」で5番はなくても良いのかも。(小栗)

—合同打合せ終了—

#### 1. 第4回起草委員会起草委員会開催（15時～16時）

- ・鹿児島大学生涯学習憲章 ver.6 の作成

## 鹿児島大学生涯学習憲章 第1次案（案 ver. 6）130606

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学と定めた、大学憲章の精神を受け継ぎ、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していける生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は、大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、現場の人と教員、学生、職員がともに学び合い、教え合う関係から知の循環を促し、学ぶ喜びを分かち合い、お互いが成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学の目指す生涯学習です。

鹿児島大学の教員と職員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶグローバルな視野に立って、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたって学習の機会を保障します。
2. 鹿児島大学は、職業教育と教養教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人々が、共に支え合い、暮らしていくことを支援します。
3. 鹿児島大学は、大学のもつ専門知と科学知を、現場のもつ生活知と経験知とぶつけ合い、学問知を鍛え直し、同時に地域のもつ知をさらに洗練したものにします。そのことを通じて、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。
4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域との相互理解を深める機会を創出し、生涯学習を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。



※ファシリテーター＋起草委員会合同会議において、職員のキャリア形成や学内に関する記述を削除することを受けて追記。



## 第5回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



## 第5回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：6月18日（火）13：00～15：00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：裏面

### ■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長

2. 報告事項

（1）地域貢献室会議における「鹿児島大学生涯学習憲章（素案）」に対する意見について

（2）今後のスケジュール

・第1次素案・第5回起草委員会（6/18（火））

・第2次素案・第6回起草委員会（7/8（月））

・第3次素案・第7回起草委員会（7/23（火））

※①地域貢献室会議、②理事懇、③執行部会議、④役員等会議、⑤大学運営会議、⑥教育研究評議会、⑦役員会？の構成員については資料3参照のこと

3. 修正作業・起草委員会の活動方針について

・修正意見に対する起草委員会のスタンス

・意見の記録方法・整理作業について

4. 第1次案の修正作業について

### ■資料

資料1 地域貢献室会議における意見

資料2 「鹿児島大学生涯学習憲章」策定に向けたスケジュール

資料3 各種会議の構成員

資料4 第1次素案の修正作業について

資料5 素案 ver.6 と意見対照表

### 第5回起草委員会の成果

#### ■関係資料

・平成25年度 第5回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨

#### ■第4回起草委員会成果資料

・鹿児島大学生涯学習憲章 第1次修正案（案 ver.7）の作成

・鹿児島大学生涯学習憲章 第1次修正案（案 ver.7）解説付の作成

## 6月11日（火）の地域貢献推進室会議における主な意見

	該当箇所	修正	理由
第1項に 関して	貢献する総合大 学と定めた	貢献する総合大学をめ ざし、	「定めた」わけではない。大学憲章で は「めざす」となっている。
	大学憲章の精神 を受け継ぎ	大学憲章の精神に則 り、または 沿って	「受け継ぎ」だと、大学憲章は過去のも のを受け取られる
第2項に 関して	第2項全体		すでに大学憲章に地域性はうたって ある。大学憲章を修正することは出来 ない
第3項に 関して	教員、学生、職員 が...	この並びでよいか？	普通は、教職員、学生
	現場の人	この表現でよいか？	地域の人に受入れられる表現か？
第4項に 関して	教員と職員	教職員	普通は、教職員と表現する
	グローバル	再考	必ずしも、定着した用語とは言えな い。憲章だと長く残るので、その時 こっている用語か？ここだけカタカナ
1. について	保障します	そう言えるか？	保障するとはかなりきつい用語。金銭 を伴うような保障という感覚がある。
2. について	人々	人びと、または、ひと	横書きの場合はこのように書く
	支援します	再考	上から目線ではないか？
3. について	洗練したものにし ます	再考	上から目線ではないか？
	ぶつけあい	再考	上から目線ではないか？
4. について	保障します	同上	同上
全般に ついて	知という用語の使 い方	統一感がない。色々な 知が出てきてわかりにく い。使い分け？	「地域に学び」と「地域のもつ知」
			「専門知、科学知」と学問知
			「地域のもつ知」と「生活知と経験知」
	著しく句点が多い		

平成 25 年度 第 5 回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨

■日時：平成 25 年 6 月 18 日（火）13:00～15:00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室（共通教育棟 1 号館 4 階）

■素案起草委員：岩元教授（農学部兼生涯学習教育研究センター）、小栗准教授（生涯学習教育研究センター）、酒井講師（生涯学習教育研究センター）、木村教授（水産学部兼社会貢献担当学長補佐）、前田准教授（教育学部 附属教育実践総合センター）。

築瀬教授（医学部）。以上。（順不同）

■委員会の流れ：

1. 起草委員長である岩元教授から、挨拶があった。
2. （1）岩元教授から、6 月 11 日に実施された地域貢献室会議における「鹿児島大学生涯学習憲章」1 次案報告に対する意見について確認された。  
（2）岩元教授と小栗准教授から、今後のスケジュールについて確認された。
3. 起草委員会により第 1 次案（案 ver. 6）の修正作業を行った。

以上。

## 鹿児島大学生涯学習憲章 第1次案（素 ver. 7）

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していける生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、地域に生きる人びとと教員、職員、学生がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学のめざす生涯学習です。

鹿児島大学の教員と職員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野に立って、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 鹿児島大学は、職業教育と教養教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、現場の生活知や経験知と向き合い高めあうことを大切にします。そのことを通じて、学問知を鍛え直し、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。
4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域との相互理解を深める機会を創出し、生涯学習を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

## 鹿児島大学生涯学習憲章（第1次案）解説

	案	解説
第1段落	鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みである生涯学習を推進します。	第1段落は、鹿児島大学憲章との関連を明確にし、生涯学習憲章を鹿児島大学として推進することを明記したものです。
第2段落	鹿児島大学は、古来より黒潮の恵みを受けて、海上の道の要所として多彩な文化を集積してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得していける生涯学習に全学で取り組みます。	第2段落は、生涯学習憲章を策定するに当たって鹿児島大学の地域性を明確にするために述べたものです。なお、地域性の表現については、本学の位置がより特定できるような工夫をしたいと考えています。
第3段落	地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学のめざす生涯学習です。	第3段落は、生涯学習の理念を述べたもので、地域と大学との相互作用であることを唱ったものです。
第4段落	鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野に立って、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。	第4段落は、鹿児島大学の全構成員が生涯学習に取り組むことを明確にしたものです。
方針1	1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。	方針の1は、生涯学習が、学生を含む青年期の教育と成人教育をともに含むものであることと述べています。
方針2	2. 鹿児島大学は、職業教育と教養教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。	方針の2は、生涯学習は、専門職のキャリアアップや社会人大学院などの職業教育と、公開授業受講生など知識教養のための教育の両方を含むものであり、それによる地域への貢献を明確にしたものです。

方針 3	3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活知や経験知と向き合い高めあうことを大切にします。そのことを通じて、学問知を鍛え直し、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。	方針の3は、教員や学生が、地域に向き、地域と交流することでお互いの知を交流し、高め合うことも広い意味での生涯学習と位置づけています。
方針 4	4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。	方針の4は、生涯学習憲章と学生憲章との関係を明確にしたものです。
方針 5	5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域との相互理解を深める機会を創出し、生涯学習を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。	方針の5は、生涯学習を鹿児島大学として推進し、地域に貢献する大学づくりの柱に位置づけると宣言したものです。

以上解説を付しておきますので、参考にしてご意見をいただければ幸いです。

## 第6回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



## 第6回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：7月8日（月）15：00～16：30

■場所：生涯学習教育研究センター長室

■出席者：裏面

### ■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長

2. 報告事項

（1）「鹿児島大学生涯学習憲章（第1次案）」への意見照会結果について

全9名から意見あり：運営委員2名、ワークショップ参加者4名、ほか3名

（2）今後のスケジュール

・第3次素案・第7回起草委員会（7/23（火））…解散を予定

（3）欠席委員の意見について

3. 第2次案の作成について

### ■資料

資料1 今後のスケジュール

資料2 欠席委員からの意見

資料3 「鹿児島大学生涯学習憲章（第1次案）」への意見照会の結果

資料4 「鹿児島大学生涯学習憲章（第2次案）」のたたき台

### 第6回起草委員会の成果

#### ■関係資料

・平成25年度 第6回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨

#### ■第4回起草委員会成果資料

・鹿児島大学生涯学習憲章 第2次案（案 ver.8）の作成

## 欠席委員からの意見

### (1) 築瀬委員

#### ■7月6日到着分

今回寄せられた意見に基づく修正は、起草の意図を損なわず、よりわかりやすい表現に替えられる指摘は受け入れるという方針ではいかがでしょうか。

例えば、A先生の「視野に立って」を「視野を持って」または「視点に立って」へ言い換える可能性がかもしれません、という指摘は受け入れ、修正してもよいと思います

#### ■7月8日到着分

新たに寄せられた意見を確認いたしました。

Y先生の“「学びの主体を支え、」のあとに、少なくとも『向上心をもって自ら困難に立ち向かう態度（進取の精神）を養い、』を挿入すべき“

とのご意見がありますが、「学びの主体を支え」を「向上心をもって自ら困難に立ち向かう態度（進取の精神）を養い」に変更することでもよいと思います。

他の指摘には、この時点で大きく変更することは難しいのではと思われるものもあります。

### (2) 木村委員

#### ■7月8日到着分

今日は出張中で、落ち着いて各先生のご指摘事項を読む事ができません。斜め読みをしたところでは、いずれも参考となるご意見と思います。良いところ取りをさせていただく事で如何でしょうか。

方針3に関するS先生のご意見はきつく書かれているものの、A先生のご意見を参考に修正を検討されては如何でしょうか。

憲章に入れにくい内容については、解説でフォローすることで如何でしょうか。

## 学内意見収集の結果

## &lt;全般意見&gt;

日付	名前	所属	意見
6月 26日	S	水産学部	<p>大学憲章や学生憲章がいわば「当たり前の事」を宣言しているのに対し、生涯学習憲章は「学問的蓄積を踏まえて日常用語よりよりかなり広い意味で「生涯学習」という用語を用い、地域における大学の役割を宣言する」という挑戦的な宣言を行っています。内容はこれでよいと思いますが、誤解を避けるためには本文よりもかなり長い解説が必要だと思います(学生憲章の解説の一例ではなく、正式な解説)。参考までに、日本技術士会による「技術士倫理綱領の解説」をご覧ください。</p> <p><a href="http://www.engineer.or.jp/cmtee/rinri/kouryoukaisetsu.pdf">http://www.engineer.or.jp/cmtee/rinri/kouryoukaisetsu.pdf</a></p> <p>末筆ながら短期間でここまでまとめた事務局の皆様に敬意を表します。</p>
6月 26日	N	臨床心理学研究科	<p>気が付いたところや感想をコメントいたします。理解不足もあるかと思ひますことご了承ください。憲章文の組み立て方や文言など一定に様式があると思ひますので、あくまで読み手として感じたところとしてご理解の上、参考にされてください。</p> <p>別添あり</p>
6月 28日	K	水産学部	<p>拝読させていただきました。良いと思ひます。添付ファイルで一部加筆訂正(案)を送ります。</p>
6月 29日	A	医歯学研究科	<p>全般：非常に良い活動及び、憲章であると思ひます。</p>
7月5 日	Y	稲盛アカデミー	<p>鹿児島大学は、「鹿児島大学教育目標」、「鹿児島大学学生憲章」や「第2期国立大学法人鹿児島大学の基本的な目標」を、大学の基本理念である「鹿児島大学憲章」を十分に踏まえて策定しています。</p>
7月5 日	K	稲盛アカデミー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鹿児島大学憲章との整合性をつめてほしい。</li> <li>・自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざすということを生涯学習憲章としてどう受けとめていくか。</li> <li>・社会貢献の理念と生涯学習の理念： <ul style="list-style-type: none"> <li>鹿児島大学は、南九州を中心とする地域の産業の振興、医療と福祉の充実、環境の保全、教育・文化の向上など、地域社会の発展と活性化に貢献する。</li> </ul> </li> </ul>

			<p>鹿児島大学は、アジアや太平洋諸国との連携を深め、研究者や学生の双方向交流および国際共同研究・教育を推進し、人類の福祉、世界平和の維持、地球環境の保全に貢献する。</p> <p>・鹿児島大学の生涯学習憲章の特徴を明示できるようにしてほしい。</p> <p>南九州の地域をフィールドとする生涯学習、地域に積極的に足を運んで、持続的な地域社会の発展に寄与する生涯学習、アジアや太平洋諸国との連携する生涯学習など。</p> <p>具体的に鹿児島大学として国連の提唱するESDの宣言を生涯学習憲章としてできないか。抽象的な生涯学習宣言から、具体性をもった生涯学習憲章として、考えてほしい。</p>
--	--	--	--

<個別意見（前文）>

該当箇所	日付	名前	所属	意見
第1段落	6月28日	K	水産学部	鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域【・社会】をつなぐ営みである生涯学習を推進します。
	6月29日	A	医歯学研究科	大学と地域をつなぐ営みである生涯学習：生涯学習とは大学と地域をつなぐ営みである 少し違和感がありますが。
第2段落	6月29日	A	医歯学研究科	・海上の道の要所：海上交通 ・大学像を獲得していける：する あるいは できると言い換えることが可能かもしれません。
	7月5日	Y	稲盛アカデミー	前文の「道の要所」→「道の要衝」もしくは「海上交通の要衝」が良いのではないかと思います。
第3段落	6月28日	K	水産学部	地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、地域に生きる人びとと大学人が【共とも】に学び教え合う関係から知の循環を促し相互に【作用し】成長していくことが、知的拠点としての鹿児島大学のめざす生涯学習です。
	6月29日	A	医歯学研究科	・地域のもつ知は大学及び大学人：大学 あるいは 大学人のどちらかにすることが可能かもしれません。 ・地域に生きる人びと：人々と言い換えることが可能かもしれません。

				・知的拠点としての鹿児島大学のめざす生涯学習です。: 知的拠点としての鹿児島大学がめざすと言い換えることが可能かもしれません。
第4 段落	6 月 29 日	A	医歯学研 究科	地域と世界を結ぶ視野に立つて: 視野をもって あるいは 視点に立つてと言い換えることが可能かもしれません。

< 個別意見（方針） >

該当 箇所	日付	名前	所属	意見
方針 2	6 月 28 日	K	水産学部	2. 鹿児島大学は、職業【専門】教育と【知識】教養教育の調和 が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地 域の人びと【とが、】ともに支え合い、暮らしていくことに貢献し ます。
	6 月 29 日	A	医歯学研 究科	・鹿児島大学は、職業教育と教養教育の調和: 教養教育と 職業教育と順序を換えることが可能かもしれません。 ・保たれた多様な教育機会を用意し: 提供しと言い換えるこ とが可能かもしれません。 ・激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮 らしていく: 豊かに暮らしていくと修飾することが可能かもし れません。

方針 3	6月 25日	S	水産学部	<p>方針3において「鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活知や経験知と向き合い高めあうことを大切にします。そのことを通じて、学問知を鍛え直し、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。」とあるが、それぞれの「～知」の定義が認識論の専門家でもなければ即座には分からないだろう。やたら「～知」がでてきてなにやら胡散臭い印象を受ける。「知」という言葉を濫用しすぎなのではないか？「地域の生活や経験」ではだめなのか。そもそも「知」とは「鍛え直し」たり「開発」したりするものか？読む人を煙に巻く文章となっていないか。崇高で格調高い「雰囲気」はするが、私の無知のせいなのかこの文章の意味は高邁すぎてよく分からない。「社会に広く還元していきます」と謳うにもかかわらず、それを実現する文章にはなっていないと思われる。この憲章が大学の内部や文科省に対してのみ向けられるものならどうでも良いのだが、それこそ地域に向けて発信されるものであるならば、地域の人を読んで即座に理解できるような平易なものであるべきではないのか。大学による自己完結的なものとなっており、まさに生涯学習的ではないものになってしまっているのが残念である。</p>
	6月 29日	A	医歯学研究科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の専門知と科学知が、地域の生活知や経験知と向き合い:と融合しと言い換えることが可能かもしれません。</li> <li>・高めあうことを大切にします。:新たな知が創造されることと言い換えることが可能かもしれません。</li> <li>・を大切にします。そのことを通じて:大切にし、と言い換えることが可能かもしれません。</li> <li>・学問知を鍛え直し、知の開発を進め、社会に広く還元していきます。:広く社会に還元していきます。(学問知を鍛え直し、知の開発を進め、は省略)と言い換えることが可能かもしれません。</li> </ul>
方針 4	6月 28日	K	水産学部	<p>4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学でおさめる学問を基礎に、地域とともに【生涯を通じて】成長できる機会を保障します。</p>

	6月 29日	A	医歯学研究科	・学生が大学でおさめる学問を基礎に：修めると言い換えることが可能かもしれません。
	7月5 日	Y	稲盛アカ デミー	<p>鹿児島大学は、「鹿児島大学教育目標」、「鹿児島大学学生憲章」や「第2期国立大学法人鹿児島大学の基本的な目標」を、大学の基本理念である「鹿児島大学憲章」を十分に踏まえて策定しています。鹿児島大学生涯学習憲章の作成においてこの点に留意すべきと考えます。</p> <p>例として、鹿児島大学憲章（前文、教育）、鹿児島大学学生憲章（学生憲章1.）および鹿児島大学教育目標（前文、2）より明らかのように、本学の教育目標と学生の学習目標において最も重視されているものは、進取の精神の涵養であります。また、「鹿児島大学の教育目標」において、前文に自主自律と進取の精神を有する人材の育成を一般目標として掲げ、そのもとに4つの行動目標を定めています。したがって、4の文章において、「学びの主体を支え、」のあとに、少なくとも『向上心をもって自ら困難に立ち向かう態度（進取の精神）を養い、』を挿入すべきであります。</p>
方針 5	6月 29日	A	医歯学研究科	<p>・柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域との相互理解：大学と地域の相互理解と言い換えることが可能かもしれません。</p> <p>・生涯学習を地域とともに：生涯学習の推進を地域とともに</p> <p>・大学づくりの：大学の あるいは 大学の役割のと言い換えることが可能かもしれません。</p> <p>・大学づくりの柱：重要な柱 あるいは 重要な使命と言い換えることが可能かもしれません。</p>

平成 25 年度 第 6 回鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会議事要旨

■日時：平成 25 年 7 月 8 日（月）15:00～16:30

■場所：生涯学習教育研究センター演習室（共通教育棟 1 号館 4 階）

■素案起草委員：岩元教授（農学部兼生涯学習教育研究センター）、小栗准教授（生涯学習教育研究センター）、酒井講師（生涯学習教育研究センター）、前田准教授（教育学部 附属教育実践総合センター）。以上。（順不同）

■委員会の流れ：

1. 起草委員長である岩元教授から、挨拶があった。
2. 「鹿児島大学生涯学習憲章（第一次案）」への意見照会結果ならびに欠席委員の意見、今後のスケジュールについて、小栗准教授から説明がなされた。
3. 第 2 次案（案 ver. 8）の作成を行った。

以上。

## 第7回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会



## 第7回 鹿児島大学生涯学習憲章起草委員会

■日時：7月26日（金）9：00～10：00

■場所：生涯学習教育研究センター演習室

■出席者：裏面

### ■スケジュール：

1. 挨拶 生涯学習教育研究センター長

・第7回起草委員会（7/23（火））をもって解散を予定

2. 報告事項

（1）スケジュール変更と今後の予定

・パブコメの前倒し、及び、学内意思決定プロセスの簡素化

（2）運営委員会における意見

参加委員から、憲章案中にある「世界に無二」という表現がふさわしいかどうか、学外有識者に意見を聞いた方がよいとの意見があった。その後、審議され了承された。

（第3回生涯学習教育研究センター運営委員会議事要旨より一部抜粋）

3. 第3次案の作成と解説文（パブコメ用）について

4. パブコメについて

・パブコメの目的・範囲・方法等について

【目的】地域と共に作ったという実績？憲章精神の実践？大学生涯学習推進の地域応援団？

【範囲・方法】大学HP以外：センターメルマガ、県市町村教育委員会、メディア（新聞記事、ラジオ）、周辺自治会（鴨池89班820世帯など）

5. 「鹿児島大学生涯学習憲章」解説文の作成について

・解説文の性格：承認事項？ もしくは、センター独自で作成？

・解説文のイメージ、具体的内容

### ■資料

資料1 今後のスケジュール

資料2 「鹿児島大学生涯学習憲章（第三次案）」と解説のたたき台

資料3 技術士倫理綱領の解説（水産学部・S氏より提供）

## 第7回起草委員会の成果

### ■第7回起草委員会成果資料

・鹿児島大学生涯学習憲章 第3次案（案 ver.10）と解説の作成

## 鹿児島大学生涯学習憲章 第3次案（案 ver. 9）130726

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界に固有で多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。

鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 鹿児島大学は、教養教育と職業教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。
4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

## 鹿児島大学生涯学習憲章 第3次案 (案 ver. 10)

	第二次案	第三次案	解説
第1段落	鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。		第1段落は、鹿児島大学憲章との関連を明確にし、生涯学習憲章を鹿児島大学として推進することを明記したものです。ここで記す地域とは、大学と対置する概念として用いています。大学生涯学習は、地域とのつながりばかりではありませんが、本学がまず大事にしたい生涯学習は地域とのつながりです。
第2段落	鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界に無二の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。	鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。	第2段落は、生涯学習憲章を策定するに当たって鹿児島大学の地域性を明確にするために述べたものです。 鹿児島大学の立地する鹿児島県は、①南北に連なる島々の存在が海上交通の要衝にたらしめた史実、及び、②日本で世界自然遺産（世界に唯一無二）の登録を二つ持てる唯一の県である科学的知見を根拠に他県にはない自然の多様性として表現しました。また同時に、地域に学ぶことの対象として、多彩な文化（歴史を含む）と自然、及び、自然と共生してきた人びとの暮らし・知恵などとして表現しました。
第3段落	地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。		第3段落は、生涯学習の理念を述べたもので、地域と大学との相互作用であることを謳ったものです。
第4段落	鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。		第4段落は、鹿児島大学の全構成員が生涯学習に取り組むことを明確にしたものです。

赤：表現を変えた部分、追記した部分

方針 1	1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。		方針の1は、生涯学習が、学生を含む青年期の教育と成人教育をともに含むものであることと述べています。 ※青年期の教育と成人を対象とした教育が具体的に何を意味するのかについては、解説で詳述いたします。【@中原氏】
方針 2	2. 鹿児島大学は、教養教育と職業教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。		方針の2は、生涯学習は、専門職のキャリアアップや社会人大学院などの職業教育と、公開授業受講生など知識教養のための教育の両方を含むものであり、それによる地域への貢献を明確にしたものです。
方針 3	3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。		方針の3は、教員や学生が、地域に出向き、地域と交流することでお互いの知を交流し、高め合うことも広い意味での生涯学習と位置づけられます。
方針 4	4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。		方針の4は、生涯学習憲章と学生憲章との関係を明確にしたものです。 ※「進取の精神」の涵養を含む大学憲章の理念は、前文の冒頭で掲げたと通り、本憲章が前提にするものです。大学憲章と同じ表現や内容は極力さけることに配慮しました。ただし、解説文の中では、「学びの主体性」のスタンスや意味について、個人的で狭い学びではなく、地域や社会のことも視野に、進取の精神をもって学んでいくことを説明したいと思います。
方針 5	5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけられます。		方針の5は、生涯学習を鹿児島大学として推進し、地域に貢献する大学づくりの柱に位置づけると宣言したものです。

青：解説を入れるかどうか要検討

## パブリックコメント



## 鹿児島大学生涯学習憲章を策定するにあたって

鹿児島大学では、平成 19 年に「鹿児島大学憲章」を策定しました。また、平成 22 年には、学生の手によって「鹿児島大学学生憲章」を策定しました。したがって、「鹿児島大学生涯学習憲章」は、本学では 3 番目の憲章となります。これは、鹿児島大学が地域とともに社会の発展に貢献する総合大学として、今後本学が、地域の方と一緒にどのように大学づくりを進めていくのか、その理念を定めるものとなります。

このたびの憲章の策定には、次のような目的や願いが込められています。

鹿児島大学は、大学ごとに定める第 2 期中期目標(平成 22 年度～平成 27 年度)として「生涯学習に対する全学的な取組を推進する」と明記し、同中期計画の中に「『生涯学習教育研究センター』の機能を強化するとともに、各部局等の特色を活かした生涯学習プログラムを実施する。」と記しました。

生涯学習とは、鹿児島大学の持てる資源を地域に開放する活動であり、本学はこれまでも、生涯学習教育研究センターを中心に、9 学部、10 研究科、14 学内共同教育研究施設等が、それぞれの特色を活かした生涯学習に取り組んできました。

一方、鹿児島大学は、今年度からこれまでの重点研究領域である島嶼、環境、食と健康に加えて、新たに水、エネルギーを本学が取り組むコアプロジェクトに位置づけました。これらはいずれもが、本学が豊かな自然と厚みのある歴史と文化をもつ鹿児島に立地することの強みであり、我々が誇りとするものです。

そして、今後本学が、中期目標・中期計画を達成し、大学憲章に謳う「地域とともに社会の発展に貢献する」大学づくりを推し進めるには、本学の教職員と学生が一丸となって取り組める生涯学習の指針が必要です。今回策定する「鹿児島大学生涯学習憲章」が、学内の意思統一をはかる指針となり、これまでに以上に地域に出向いたり、地域の方と学ぶ機会が増えることを期待しております。

今回お示しする憲章案は、素案を作成する起草委員会(5 月～7 月)による議論と全学で取組んだ生涯学習憲章策定ワークショップ(6 月 1 実施、学内外関係者 100 人規模)を軸に構想し、学内の意見収集をへて取りまとめられたものです。

鹿児島大学生涯学習憲章（案）  
（平成 25 年 7 月 29 日現在）

鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。

鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。

地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。

鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。

1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。
2. 鹿児島大学は、教養教育と職業教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。
3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。
4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。
5. 鹿児島大学は、柔軟で闊達な組織体制の下、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。

「鹿児島大学生涯学習憲章」案の解説

	鹿児島大学生涯学習憲章（案）	解説
第1段落	鹿児島大学は、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす大学憲章の精神に沿って、大学と地域をつなぐ営みとして生涯学習を推進します。	鹿児島大学憲章との関連を明確にし、生涯学習憲章を鹿児島大学として推進することを明記したものです。
第2段落	鹿児島大学は、古来より海上交通の要衝として多彩な文化を集積し、世界で固有の多様な自然と共生してきた地域に学び、成熟社会における新たな社会像、地域像、大学像を獲得できる生涯学習に全学で取り組みます。	生涯学習憲章を策定するに当たって鹿児島大学の地域性を明確にするために述べたものです。
第3段落	地域のもつ知は大学及び大学人に新たな知的発見をもたらす宝庫であり、知的拠点としての鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人とともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくことです。	生涯学習の理念を述べたもので、地域と大学との相互作用であることを謳ったものです。
第4段落	鹿児島大学の全構成員は、生涯学習の理念を共有し、地域と世界を結ぶ視野をもって、生涯学習を組織的に実践するために、次の方針を掲げます。	鹿児島大学の全構成員が生涯学習に取り組むことを明確にしたものです。

方針1	1. 鹿児島大学は、青年期の教育とともに、成人を対象とした教育に取り組み、生涯にわたる学習の機会を提供します。	生涯学習が、学生を含む青年期の教育と成人教育とともに含むものであることと述べています。
方針2	2. 鹿児島大学は、教養教育と職業教育の調和が保たれた多様な教育機会を用意し、激動の時代を生きる地域の人びとが、ともに支え合い、暮らしていくことに貢献します。	生涯学習は、専門職のキャリアアップや社会人大学院などの職業教育と、公開授業受講生など知識教養のための教育の両方を含むものであり、それによる地域への貢献を明確にしたものです。
方針3	3. 鹿児島大学は、大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます。	教員や学生が、地域に出向き、地域と交流することでお互いの知を交流し、高め合うことも広い意味での生涯学習と位置づけています。
方針4	4. 鹿児島大学は、鹿児島大学生涯学習の実現に向けて、学びの主体性を支え、課題解決能力や実践力を育むため、学生が大学で修める学問を基礎に、地域とともに成長できる機会を保障します。	本生涯学習憲章と鹿児島大学生涯学習との関係を明確にしたものです。
方針5	5. 鹿児島大学は、柔軟で開達な組織体制の下、大学と地域の相互理解を深める機会を創出し、生涯学習の推進を地域とともに発展する大学づくりの柱と位置づけます。	生涯学習を鹿児島大学として推進し、地域に貢献する大学づくりの柱に位置づけると宣言したものです。

## パブリックコメントで寄せられた意見

番号	日付	名前	所属	意見
1	8月5日	S	鹿児島大学 水産学部	憲章事務局の皆様、水産学部の佐久間です。以下、コメントさせていただきます。これまで狭い意味で捉えられがちだった、「生涯学習」がより広い意味で有意義に位置づけられ、学内的にも地域的にもより盛んになれば幸いです。後は広報と、憲章の実質化が課題ですね。応援しています。
2	8月6日	M	お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科	<p>社会教育・生涯学習論を担当しております。</p> <p>今回の「鹿児島大学生涯学習憲章」(案)の策定は、私どものような大都市圏にある国立大学法人ではなく、地域との共生を模索する国立大学法人の今後の進むべき道を、生涯学習という観点から高らかに宣言した、画期的なものであると思います。ぜひ、全国に向けて憲章の存在を発信していただきたいと思います。</p> <p>なお、2の文章についてもう少し工夫が必要かもしれません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ここでは、教養教育と職業教育がバランスをもって提供されることを謳っていますが、調和やバランスということが目的のように読まれる可能性があります。実際には、教養教育も職業教育も、地域にとって役立つものを用意するという点に主眼を置いて良いのかなと思います。</li> <li>・また、「職業教育」というと、在学生在が地域や地元の企業に就職できるような就職支援、就職準備教育というイメージがしやすいですが、実際にはもう少し広がっていますので、在学生のほかに企業人や地域産業の担い手（農業従事者など）も含めることと、また、地域産業の振興に資する（在生および現職者の）教育プログラムということを強調しても良いように思います。ご検討いただけますと幸いです。</li> </ul>
3	8月12日	S	鹿児島大学 大学院保健学研究科	<p>先日は、鹿児島大学生涯学習憲章策定ワークショップに参加させていただき、また、その憲章策定案の確定のお知らせをいただきまして、ありがとうございます。大変うれしく思っております。ワークショップもでしたが、憲章案の策定にも、大変なご苦労がございましたのではないかと感じています。憲章案を拝見させていただきまして、感想でよろしければ、コメントさせていただきたいと思って、メールいたしました。</p> <p>ワークショップ時に私たちのグループで、思わず「いいね～！！」とみんなの声が出て、大きな感動のうねりとなったキーワードが「知の循環」が盛り込まれていて、ぐっと引き込まれましたし、策定にわたしもちょっとだけでも参加したんだな、という気持ちが湧きあがってきました。地域と大学の相互作用が促進され、ともに成長できることを願っていますし、大学あげての取り組みが必要であるということを、このように憲章に謳われることで、なお一層の力強い後押しになることを願っています。</p>

4		Y	鹿児島大学 稲盛アカデ ミー	<p>鹿児島生涯学習憲章案について、7月4日に以下のような、意見を提出しました。</p> <p>「鹿児島大学は、「鹿児島大学教育目標」、「鹿児島大学学生憲章」や「第2期国立大学法人鹿児島大学の基本的目標」を、大学の基本理念である「鹿児島大学憲章」を十分に踏まえて策定しています。鹿児島大学生涯学習憲章の作成においてこの点に留意すべきと考えます。</p> <p>例として、鹿児島大学憲章（前文、教育）、鹿児島大学学生憲章（学生憲章1.）および鹿児島大学教育目標（前文、2）より明らかのように、本学の教育目標と学生の学習目標において最も重視されているものは、進取の精神の涵養であります。また、「鹿児島大学の教育目標」において、前文に自主自律と進取の精神を有する人材の育成を一般目標として掲げ、そのもとに4つの行動目標を定めています。</p> <p>したがって、4の文章において、「学びの主体を支え、」のあとに、少なくとも『向上心をもって自ら困難に立ち向かう態度（進取の精神）を養い、』を挿入すべきであります</p> <p>現在、提示されている案には、鹿児島大学憲章、学生憲章および教育目標との整合性において不十分な点がありますので、再度、提案いたします</p> <p>本学・鹿児島大学憲章の基本理念は『自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす』ことであります。本学では、この理念の具現化のために鹿児島大学教育目標と鹿児島大学学生憲章を定めました。平成22年8月、教職員と学生の合同のワークショップを開催し、基本理念を共有した後、学生は自らの学習行動指針である鹿児島大学学生憲章を自主的なワークショップで練り上げ、見事な憲章を平成22年11月15日に制定しました。</p> <p>鹿児島大学学生憲章には、大学の基本理念である『自主自律』『進取の精神』『地域とともに』がきちんと取り入れられています。とくに、本学のミッションである『進取の精神』の修得を第一番目に掲げ、自らが、修得するだけでなく、後輩の『進取の精神』の修得を助けることによって、『進取の精神』を継承するとの強い決意を表明しています。また4は、ボランティアなどへ自主的に参加するなどの地域社会との関わりの中で、進取の精神を涵養するとともに、社会に貢献できるように全力を尽くすことの表明です。</p> <p>教職員も平成23年12月15日に鹿児島大学教育目標を制定いたしました。『自主自律と進取の精神を有する人材の育成』を基本目標とし、その実現するための行動目標として、教養・専門的知識・技能および課題解決能力の育成人間性、倫理観、進取の精神の養成社会の発展への行動力の養、国際社会の発展への実践的な能力の育成を掲</p>
---	--	---	----------------------	---

			<p>げ、その実践を決意しました。 教育目標にも『自主自律』、『進取の精神』、『地域とともに』が学生憲章と同様にきちんと取り入れられています。</p> <p>大学の一般的な使命である「真理の探究（研究）、人格の陶冶（教育）と社会貢献」を『自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに』に実践することにより社会の発展に貢献する」ことが、本学の基本理念であります。</p> <p>この生涯学習憲章（案）に、大学憲章の基本理念『自主自律と進取の精神の尊重』の反映と学生憲章と教育目標との整合のため、以下のような修正を提案します。</p> <p>学内外に鹿児島大学憲章を誤解なく伝えるために、第一行は</p> <p>「鹿児島大学は、自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす鹿児島大学憲章の理念に沿って」と修正、</p> <p>2、第20行には「課題解決能力や実践力を育むため」とのみ記載されていますが、さきほど説明しましたように、学生憲章および教育目標においては、進取の精神の涵養を第一義的学習・教育目標としております。 このような『学生・教職員の思い・意志』を踏まえ、学生憲章および教育目標と整合性するために、</p> <p>「4. 鹿児島大学は、鹿児島大学学生憲章の実現に向けて、学びの主体性を支え、進取の精神を養い、課題解決能力や実践力を育むため、」と加筆</p> <p>3、解説または注として、</p> <p>「進取の精神とは、自ら困難に果敢に立ち向かう態度です。」と加筆。</p>
--	--	--	---

## あとがき

今回報告書を作成するにあたり、タイトルをどうするかで悩んだ。報告書を作成する目的や意味ははっきりしていた。むしろ、それらを表すためのしっくりいく表現が見つからなかったのだ。完璧とまでいかないが、われわれの気持ちにずいぶん近づいたタイトルになった。

「鹿児島大学生涯学習憲章への道－大学と地域をつなぐ架け橋－」には、前例のない未踏の地をたくさんの方と力を合わせて切り拓いたという事実を残すことに第一の意味がある。鹿児島大学生涯学習憲章がどのような議論や願い、苦闘を経て誕生したのかをしっかりと記録するということだ。憲章を生みだすために貢献したすべての方々の名前や発言内容をできるだけ残したいと考えた。名前が記載できなかった方も含め、協力いただいたすべての方へのわれわれの感謝の念と敬意の表れであると理解していただけるとありがたい。

第二の意味は、今回は決してゴールではないということだ。鹿児島大学生涯学習憲章は理念や方針を定めたものである。このタイトルは、これからも憲章の実現に向かって鹿児島大学が歩み続けることを表現する。副題の「大学と地域をつなぐ架け橋」も同じだ。憲章は、大学と地域のこれまでのつながり方に新たな指針を示している。

今回は、「鹿児島大学生涯学習憲章」策定ワークショップの記録（第Ⅰ部）と「鹿児島大学生涯学習憲章」起草委員会の記録（第Ⅱ部）の二つを作成した。第Ⅰ部は、2分科会、12班に分かれて2時間にわたる議論を行った。最後の発表からこぼれおちた内容も多い。紙面の関係上、この報告書に盛り込めなかったことは残念である。第Ⅱ部に関しては、赤裸々な議論や資料を隠すことなく報告書にした。その行為は、われわれの至らなさをさらすことになるが、鹿児島大学生涯学習憲章が何を踏まえ、どういう議論の末にでき上がったのかを詳細に記録したかった。そのことが、日本の大学で先んじて取り組んだ者の責務ではないかと考えたからだ。いつか役立つことがあれば幸いである。

鹿児島大学生涯学習憲章という発想は、本気で頑張っている人が大学や地域にもたくさんいるにもかかわらず、閉そく感が打開できないことに端を発している。今回手掛けたことが突破口になり、新たな社会、地域、大学づくりが進むことを切に願う。

平成 25 年 9 月 19 日

小栗有子 鹿児島大学生涯学習教育研究センター 准教授  
酒井佑輔 鹿児島大学生涯学習教育研究センター 講師

# 鹿児島大学生涯学習憲章への道

## -大学と地域をつなぐ架け橋-

第Ⅱ部「鹿児島大学生涯学習憲章」起草委員会の記録

平成 25 年 9 月 19 日

編集・発行 国立大学法人鹿児島大学  
生涯学習教育研究センター

〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30

Tel & Fax: 099-285-7294

E-mail: [contact@life.kagoshima-u.ac.jp](mailto:contact@life.kagoshima-u.ac.jp)